

LIXIL *eye*

建築・まちづくりから生活文化を探求する情報誌「リクシル・アイ」

no. 10 February 2016

- | | | | |
|----|---|------------|-----------|
| 特集 | 1 | 新・生き続ける建築 | 片山東熊 |
| | 2 | 建築ソリューション | 五島美術館 |
| | 3 | まちづくりの今を見る | 古民家の保存と活用 |



風景をデザインする 国内編

木材を活用した環境デザイン | 愛知県名古屋市

大学のキャンパスには、自動車や自転車が走り、多くの人が行き交う街路と広場がある。カフェや売店などの商業施設もあれば、保育施設や体育施設などもある。単に講義室や研究室だけでなく、小さな都市としての構成要素を備えている。名古屋大学では、こうした都市的空間における駐輪場やストリートファニチャー、柵や車止めまで、人の目線の景観要素に可能な限り木材を活用したデザインを施し、大学“外”都市に向けて提案している。

東山キャンパスの理系エリアのゲートとして2011年に竣工したES総合館には、スギ間伐材小径丸太による駐輪場を設計・設置した(現在は移設)。2015年には、屋根にソーラーパネルを付けたヒノキ材の駐輪場を電動アシスト自転車の充電基地として、新しく竣工したNIC棟の前に再設置した。この他に、スギ材のルーバーによる実験室ヤードの目隠し、間伐材丸太にステンレスの蓋を付けたデザインの車止め、ボックス型の木ベンチなども備えた。内装での地域産材活用や、学生による施工体験にも積極的に取り組み、研究者・実務者・地域が連携した実践研究「都市の木質化プロジェクト」の活動も展開するなど、キャンパスは木質デザインの実験場となっている。

最後に、丸太駐輪場を設計した構造物家、故堀内征弘氏にこの場を借りて哀悼の意を表したい。

太幡英亮

Eisuke Tabata

プロジェクト概要

名称：都市公共建築木質化に関する提案と研究(スギ間伐材小径丸太による駐輪場、木製ルーバー、間伐材ポールほか)

所在地：愛知県名古屋市千種区不老町

主要用途：大学施設

発注者：国立大学法人名古屋大学

設計：太幡英亮、古川忠稔、堀内征弘ほか

工期：2011.4-(プロジェクトは継続中)

たばた・えいすけ——名古屋大学工学部施設整備推進室・同大学大学院環境学研究科都市環境学専攻准教授/1975年生まれ。2004年、東京大学大学院工学系研究科建築学専攻博士課程修了後、渡辺誠/アーキテクトオフィス、東北文化学園大学、名古屋大学助教を経て、2015年より現職。専門は建築計画学(計画基礎、地域・街路空間)、建築・家具設計。

主な作品：Hakuba House [2013]など。



上左—スギ間伐材小径丸太による駐輪場 | 上右—スギ材のルーバーは、構造実験室のヤードの目隠しになっている | 下左—単純な丸太の列柱が境界をつくり出す間伐材の車止め | 下右—人数と状況に合わせてさまざまな姿勢で使用できるボックス型の木ベンチ [写真4点とも：筆者]

表紙写真：
五島美術館
[撮影：フォワードストローク]

次号[LIXIL eye]no.11は、
2016年6月発行予定です。

[LIXIL eye]はバックナンバーを
インターネットでご覧いただけます。
http://archiscape.lixil.co.jp/lixil_eye

02 [風景をデザインする 国内編]
木材を活用した環境デザイン —— 太幡英亮

04 **特集1 | 新・生き続ける建築 — 10**
片山東熊

04 [本論] 宮廷建築の確立と皇室伝統の継承 —— 浅羽英男
08 [作品] 旧帝国京都博物館(現・京都国立博物館明治古都館)
表慶館
竹田宮邸洋館(現・グランドプリンスホテル高輪 貴賓館)
14 [年譜] 略歴 | 主な作品

15 **特集2 | 建築ソリューション | 保存・再生・継承へ | — 10**
五島美術館

22 [序論] 鉄筋コンクリート造による平安王朝美の再現
—— 吉田五十八の五島美術館にみる“平安調”の建築意匠 —— 青柳憲昌
24 [鼎談] 新時代に挑戦した先駆者
吉田五十八の原点、住宅のような五島美術館を使いながら未来へ…。
—— 名兎耶 明 | 堀越英嗣 | 古谷誠章
37 [鼎談後記] 戦後日本の芸術文化の復興、モダニズムのポキャブラリーでつくる新たな日本の建築 —— 古谷誠章

38 [ARTIST at HOME] — 10
鍛造作家・藤田良裕さんの巻 —— 中村好文

42 **特集3 | まちづくりの今を見る — 10**
古民家の保存と活用

44 [論考1] 歴史的建築物活用に関する自治体の新しい仕組みづくり
—— 歴史的建築物活用ネットワーク(HARNET)事務局
46 [論考2] 古民家活用が地域にもたらすもの —— 角間崎圭輔
48 [資料] 古民家再生や活用を巡る状況
50 [事例1] 城下町に点在する4棟の古民家がひとつのホテルに —— 国家戦略特区制度を活用した新たな試み
52 [事例2] 歴史のある建物を活かし、来訪者も楽しめる場所をつくる
—— オーナーと入居者、設計・施工者と共に地域に寄り添うNPO
54 [事例3] 食を通して京都を体感できる町家 —— 錦市場から発信する日本の伝統文化
56 [事例4] 古民家を村に見立て、全国の村民で支える —— クラウドファンディングで実現したシェアビレッジ

58 [素材を語る]
鉄の器 —— 原田真宏

60 [TOPICS]
森林や里山の自然環境を守る「森でeこと」 —— 蓼沼亜沙子

64 [INFORMATION]
「LIXILビジネス情報サイト」のご案内
LIXILからのご案内 | ギャラリー+イベント | LIXIL出版 新刊案内

68 [新・建築家の往復書簡] — 10
いろんな国を旅行して、まず、頭に浮かぶのはインドの街…。 —— 西沢立衛 | 長谷川逸子

LIXIL eye no.10
2016年2月20日発行

発行：株式会社 LIXIL
編集発行人：久保雅義
LIXIL ジャパンカンパニー
セールス&マーケティング部
〒100-6007
東京都千代田区霞が関3-2-5
霞が関ビルディング7階
Tel: 03-6273-3635
Fax: 03-6273-3743
制作：株式会社森戸アソシエイツ
協力：フォンテルノ(02.42-57頁)
デザイン：松田洋一
印刷：竹田印刷株式会社

*本誌記事の無断転載を禁じます
*本文中の敬称は省略させていただきます

片山東熊

1885年に設置された宮内省内匠寮(前身は内匠課)は、宮廷建築の造営、管理、修復などを担い、八面六臂で活躍した。そして、その筆頭となり、内匠寮の礎を築いたのが片山東熊である。

片山はジョサイア・コンドルの教えを受け工部大学校造家学科を卒業し、工部省に入省した。皇居御造営事務局、内匠寮へ転じ、木造和風建築が主流だった営繕の中で、有栖川宮邸洋館や明治宮殿の造営のため欧州各国を訪れ、王宮や宮殿、美術館を視察。いち早く洋風建築に直に触れるなどして体得した経験が、宮廷建築家としての素地をつくった。帝国奈良・京都博物館などの設計で経験を積むと、皇太子嘉仁親王のご成婚にあたり造営された、東宮御所の御造営局技監の大役を任される。東宮御所は、当時の建築・工芸技術を結集させ、約10年の歳月をもって完成。その後、2009年には明治以降の建築で初めて国宝に指定され、現在は迎賓館赤坂離宮として国賓や公賓をもてなす外交活動の舞台となっている。

内匠寮のトップとして内匠頭まで登り詰め、約35年の宮廷建築家人生を全うした片山東熊。今号は、世の期待を一身に背負い設計活動を続けた片山に光を当てた。

Toukuma Katayama



〔出典：『建築雑誌』1917.11〕

東宮御所(現・迎賓館赤坂離宮)〔1909〕の設計者・片山東熊は嘉永6年〔1853〕12月19日、長門国阿武郡萩今古萩町(現・山口県萩市今古萩町)に生まれた。明治6年〔1873〕8月23日、工学専門官費生として工部省工学家に入寮。明治12年〔1879〕11月8日の工部大学校造家学科第1回卒業生で、同期卒に辰野金吾〔1〕、曾禰達蔵〔2〕、佐立七次郎〔3〕がいる。片山が建築を志ざした理由は定かではないが、工部省工学家に入寮する前は横浜で英語を学んでおり、明治維新を経た新時代に英語を習うといった進取な向学心が、工部大学校で西洋建築を学ばせたと推察される。片山や辰野たちは工部大学校造家学科の外国人教師ジョサイア・コンドルから本格的な西洋建築学を習得し、またコンドルの設計の手伝いや現場実務を実習した〔4〕。そして明治12年12月3日、工部省の工部七等技手に任官し、明治14年〔1881〕1月19日付で有栖川宮建築掛を命ぜられる。28歳の時である。

欧風建築作品の根源・欧米出張

片山東熊の東宮御所を頂点とした欧風建築作品の根源は、5回の欧米出張による見聞と知識の習得による。

片山の初めての渡欧は、明治15年〔1882〕6月18日、有栖川宮熾仁親王が明治天皇の御名代としてロシア皇帝アレクサンドル3世の即位戴冠式に参列する随従員に有栖川宮の家従心得として陪従した29歳の時である〔5〕。帰路は有栖川宮邸洋館の室内装飾の調達のため、一行と別に欧州に滞在し、明治17年〔1884〕2月19日に帰国した。有栖川宮邸洋館は明治17年7月に竣工した煉瓦造2階建てのジョサイア・コンドルの初期の作品で、1階は客間、会食堂、宮御食堂、客間兼踏舞室および転球室などを配置し、2階はプライベートな宮御寢室、御息所御寢室、御書斎、御息所ニノ間などを配置した、宮様の御生活に適應した平面プランになっている〔6〕。片山は欧州から買入れたカーテンや家具などの装飾で調和のとれた品位ある室内空間とした。その後、有栖川宮邸洋館は「蓋し皇族の御殿を純洋風に造りたる嚆矢にして、永く後の模範となりたり」と称えられた〔7〕。明治28年〔1895〕1月15日、熾仁親王が薨去され、翌年12月、皇室所有として買い上げられた。明治37年〔1904〕2月から霞ヶ関離宮となったが、昭和20年〔1945〕5月25日の空襲で焼失した。

片山の渡欧米5回のうち、初回の有栖川宮邸と2回目の明治宮殿〔1888〕は、家具を含む室内装飾の調達が主であった。初回で欧州各国の王宮や宮殿、美術館などを見聞し、欧風宮廷建築の知識を得た。その知識が帝国京都博物館(現・京都国立博物館明治古都館)〔1895〕造営に具現化され、その成果が東宮御所御造営のベースになったと考えられる。3回目から最終の5回目の出張は、東宮御所御造営の用務であった〔8〕。

東宮御所とつながる 3 作品

本稿では、現存する片山東熊作品の中から帝国京都博物館、表慶館〔1908〕、竹田宮邸洋館(現・グランドプリンスホテル高輪 貴賓館)〔1911〕の3作品と東宮御所との共通性を鑑み、取り上げた。その関係性としては、帝国京都博物館では東宮御所と同じ内匠寮技手の足立鳩吉と福田安三郎、工匠では石工、装飾大工が本格的な煉瓦造の現場を経験できたこと。表慶館では外壁の精巧な花崗岩装飾や内部階段の錬鉄手すりの精美なつくりが共通していたこと。竹田宮邸洋館では内外のディテールを東宮御所から応用していることなどが考えられる。

1つ目の帝国京都博物館は、日本土木会社(現・大成建設)が一式請負で明治25年〔1892〕6月17日に起工したが、会社都合により同年9月末、契約解除となったことから工種別請負(直営工事)に切り替え、明治28年〔1895〕10月9日に完成した。工事録によって主な工種の請負者が後の東宮御所御造営に参加したこと。また、明治26年〔1893〕12月29日にジョサイア・コンドルが京都の現場視察をしたことが分かった〔9〕。赤煉瓦の端正な正面ファサードが特長の築110年になる建物で、平面は完全なシンメトリー、中央彫刻室から中坪(中庭)に面した展示室を周る拝観形式〔10〕。内部は展示室天井の明かり取りに欧州から輸入したガラスを使用した進取性、展示室入り口の木製飾りの彫刻美、外観はマンサード屋根が映える品位と安定感のある美の殿堂である。

一方、明治24年〔1891〕10月28日、愛知・岐阜の両県を中心とした濃尾地震が起きた〔11〕。新築中の御料局木曾支庁舎は煉瓦造で木造小屋組まで完了し屋根葺き前であったが、半壊の被害に遭ったため、やむなく工事を取りやめた〔12〕。片山は震災直後の岐阜市や名古屋市の被害の実態を見て耐震の重要性を再認識したと推察される。そこで帝国京都博物館では鉄骨の採用には至らなかったが、耐震に対して、煉瓦積みの剥離防止を左右する目地モルタルの性能向上のため、各社セメントの比較試験を行っている〔13〕。『明治工業史 建築篇』〔14〕の京都博物館の条によれば、「本建築は明治24年の濃美地震の後なりしを以て、コンクリート及びモルタルには総てセメントを用ひたり。之に用ひしセメントはアルゼン、セメントなりき」と記してある。

2つ目の表慶館は、皇太子嘉仁親王殿下(後の大正天皇)御成婚を記念した奉獻美術館で、東宮御所御造営中の明治34年〔1901〕8月に起工し、明治41年〔1908〕に完成した。片山と高山幸次郎御造営局設計課長〔15〕による委嘱設計、監督は新家孝正〔16〕。建築面積2,049m²、煉瓦造2階建て、銅板葺き屋根、外壁花崗岩張りのネオ・バロック様式〔17〕、平面は十字形のシンメトリー。直径約17mの大ドームを持つ中央部から左右に翼を伸ばし、正面中央1階に玄関、



有栖川宮邸洋館〔1884〕

1階の客間兼踏舞室。片山が欧州で調達した品位ある3基のシャンデリアや椅子は、社交の場にふさわしい雰囲気を出している。2連アーチの出入り口からバルコニーに出ると御庭がよく望めた〔出典：『コンドル博士遺作集〕〕

〔5〕 『熾仁親王行実 下巻』〔高松宮家編、高松宮家／1929〕

〔6〕 『有栖川宮殿地図』『有栖川宮邸沿革誌』〔所蔵：宮内庁宮内公文書館〕

〔7〕 『コンドル博士遺作集』〔コンドル博士記念表彰会編、コンドル博士記念表彰会／1931〕

〔8〕 欧米出張第2回：ドイツ、1886年12月31日-87年11月23日、明治宮殿の室内装飾および家具調達、34歳。第3回：欧米、1897年3月26日-98年3月23日、『明治天皇紀 第9』〔宮内庁編、吉川弘文館／1973〕の明治30年2月22日の条によれば「東宮御所建築につき内匠寮技師片山東熊を欧米諸国に差遣し各国宮殿・離宮及び公館の構造・配置及び室内装飾等の事を調査せしむ」とある、44歳。第4回：アメリカ、1899年6月14日-11月24日、東宮御所御造営の鉄骨ならびに暖房機調達、46歳。第5回：欧米、1903年1-12月、東宮御所御造営の洋館装飾等調達、50歳

〔9〕 『内匠寮 京都及奈良博物館建築工事録21 明治23-28年』〔所蔵：宮内庁宮内公文書館〕の明治26年12月29日の日誌

〔10〕 『京都帝室博物館本館平面図 大正12年』〔所蔵：宮内庁宮内公文書館〕

〔11〕 『風俗画報(東陽堂)』1891年11月号によれば、被害は劇震の濃尾地方、烈震の東海、関西、北陸のほか、西は九州、東は東北地方までの広範囲に及んだ安政地震以来最大の規模であった

〔12〕 『帝室林野局五十年史』〔帝室林野局編、帝室林野局／1939〕の年表を要約すれば、木曾支庁は1889年4月、岐阜市に開庁。被害大により工事は中止され、1892年2月に廃止。機能は名古屋市に移され、名古屋支庁が設置されたとある

〔13〕 『内匠寮 京都及奈良博物館建築工事録24 明治23-28年』〔所蔵：宮内庁宮内公文書館〕の雑件の「セメント試験二開スル諸表」によれば「次表ハセメントノ耐力及モルタルニ用フル砂ノ適否ヲ検スル為メニ明治二十五年八月片山技師ノ命ニ依リ之レガ試験ヲ施行シタル結果ナリ」と詳細な試験報告が記録されている。また「同21 明治23-28年」の明治25年9月17日の日誌には、モルタルの調合をセメント・白砂・石灰や白砂・石灰など4種類の試験を行ったと記されている。試行錯誤した試験だったと推察される

〔14〕 『明治工業史 建築篇』〔工学会編、工学会／1927〕

〔15〕 高山幸次郎〔1855-1908〕工部省製作寮、皇居御造営事務局御用掛。1897-98年には、片山に随行して欧米諸国の建物を調査。設計の名手であった

〔16〕 新家孝正〔1857-1922〕1882年、工部大学校造家学科卒業。皇居御造営事務局、初代・宮内省庁舎の現場担当の一人。その後、通信省を経て、日本土木会社入社。1892年、米国シカゴ世界博覧会鳳凰堂建築工事主任。帝国京都博物館造営では最初の請負者・日本土木会社の現場責任者だった〔17〕『新指定重要文化財 解説版13 建造物3』〔重要文化財〕編集委員会編、毎日新聞社／1982〕



表慶館額面ディテール〔1908〕

外壁上部の石飾り彫刻には、左から塗装の刷毛、大工道具のトンカチ、製図の定規が見られる。『風俗画報』1908年3月号によれば「建築、絵画、器械、測量器、紡織、鍛冶、印刷、製陶等を現はしたるもの」という。東宮御所の中央玄関左右の壁に楽器、パレット、絵筆、農具、歯車やスノナなど類似した石飾り彫刻がある【重要文化財】



帝国奈良博物館（現・奈良国立博物館なら仏像館）〔1894〕

外観は、正面中央階段の両脇にコリント式複柱が立ち、上部には大きな楕形ペディメントが付いている。中央玄関口の大きなアーチ脇の左右の小アーチは意匠上で、入り口ではない。帝国京都博物館の3連アーチの出入り口との違いも興味深い【重要文化財】〔出典：『明治洋風宮廷建築』】



〔18**〕** 木子幸三郎〔1874–1941〕

内匠寮土木課長・木子清敬(きよよし)の子息。息子は木子七郎〔INAX REPORT〕No.189,2012.1.20、p04-参照）。1901年、東京帝国大学工科大学建築科卒業。住友本店臨時建築部、東宮御所御造営局を経て、宮内省内匠寮。1922年、退官。片山のもとで正倉院正倉修復、神奈川県庁舎〔いずれも1913〕を担当。和洋建築どちらにも卓越していた

〔19**〕** 渡辺謙〔1855–1930〕

1880年、工部大学校造家学科卒業。工部省営繕局設計掛、海軍省および海軍大臣官舎建築主任、清水組2代目技師長、海軍技師。工学博士。主な作品に、初代・帝国ホテル〔1890〕など

〔20**〕** 『明治洋風宮廷建築』小野木重勝著〔相模書房／1983〕

〔21**〕** 『東宮御所御造営誌 昭和10年11月9日 写』〔所蔵：宮内庁宮内公文書館〕

〔22**〕** 山本直三郎〔1869-没年不明〕

1892年、宮内省内匠寮。東宮御所御造営局技師、内匠寮技師、御造営局御用掛。1901年には、片山に随行し渡欧。1921年、退官。大日山水源地御園室〔1912〕、武庫籬宮〔1914〕などを担当

〔23**〕** 「回顧座談会 第2回座談会」『建築雑誌〔建築学会創立50周年記念号〕』1936.10（臨時増刊）

〔24**〕** 辰野金吾「片山博士に対する諸家の追憶」『建築雑誌』1917.12

〔25**〕** 『LIXIL eye』no.8,2015.6.20、p04-参照

2階をバルコニーとし、奥行きのある空間としている。玄関に入った中央は円形の吹抜けホールで、1階は角柱、2階は8本の大理石の円柱で構成された建築と彫刻美術が調和した明治欧風建築の優秀作品である。

3つ目の竹田宮邸洋館は、明治天皇第六皇女常つねのみや宮昌子内親王が竹田宮恒久王こうかに降嫁した際に、その邸宅として下賜された殿邸で、明治44年〔1911〕に完成した。設計は片山と木子幸三郎〔18〕の他に渡辺謙〔19〕も参加している。日本館と称する木造平屋建ての付属邸が併設されていたが、現存しない。平面は1階に広堂や客室、食堂を配置し、2階を御座所や御寝室、御学問所などのプライベートな諸室を配置した洋館邸宅の定型である〔20〕。北側の正面ファサードは急勾配で立ち上がるマンサード屋根が特長。御車寄は角柱に寄り添うようなエンタシスのトスカナ式円柱が正面の荘重さを和らげている。南面中央のバルコニーは1階が3連アーチ、2階がイオニア式円柱で、明るい開放的な空間構成としている。片山の設計による皇族殿邸として現存する唯一の作品である。

明治欧風建築の集大成・東宮御所

片山東熊は有栖川宮邸洋館室内装飾、奈良と京都の両博物館を造営し、畢生の大作となる東宮御所御造営に取り組んでいく。表慶館は東宮御所と同時進行であった。

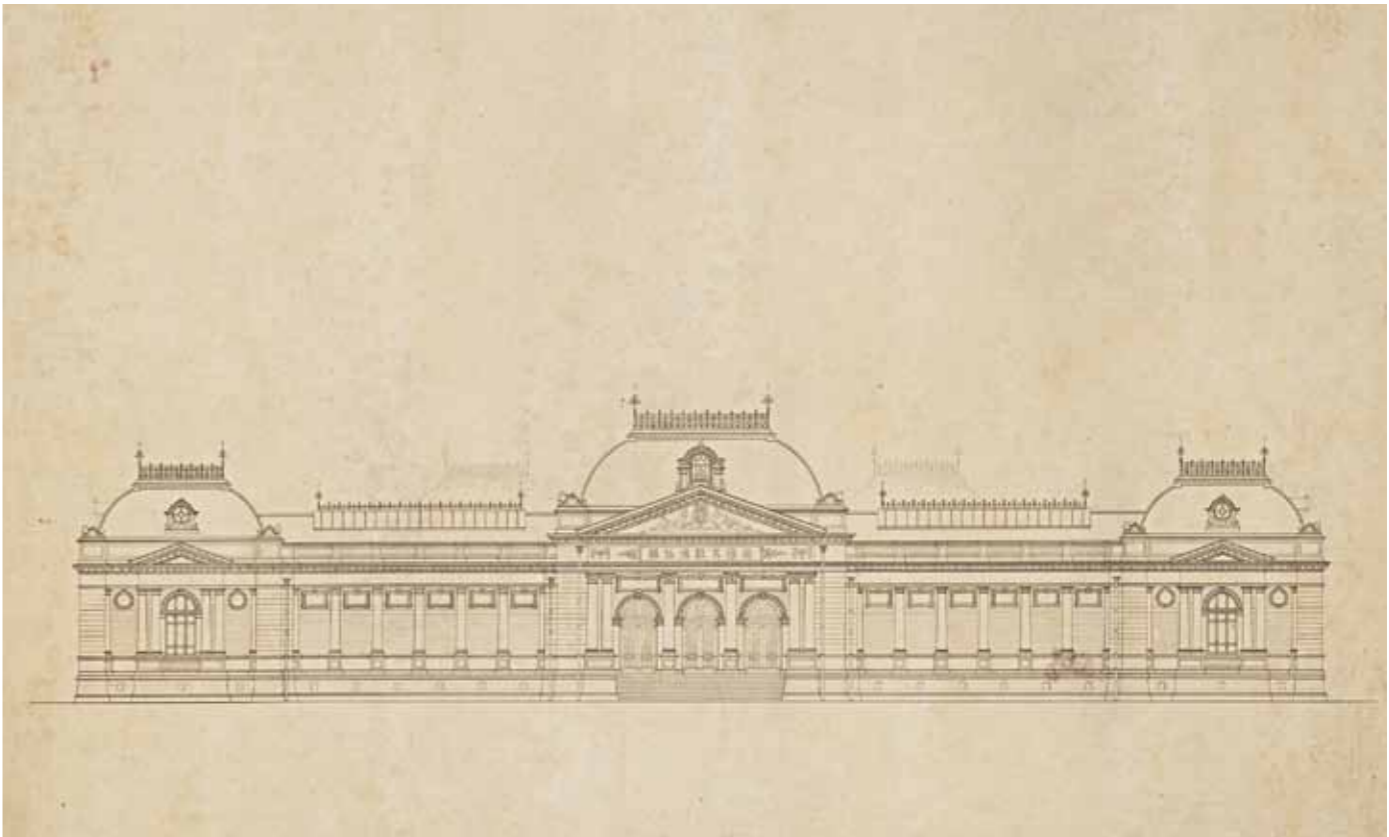
東宮御所は、東宮（皇太子嘉仁親王殿下、後の大正天皇）の御住居として明治32年〔1899〕7月28日に起工し、明治39年〔1906〕12月31日、建築部分が完成。明治42年〔1909〕6月に外構施設も含め完成した。地下1階、地上2階の3層、建築面積5,170m²、外壁花崗岩張りのネオ・バロック様式で、平面はほぼシンメトリー。1階は皇太子同妃両殿下の御住居、2階は主に外国賓客接遇の諸室で構成している。北側正面の左右翼館への回廊を湾曲させ石造建築の持つ堅さを柔らかに見せていること、南側2階中央ベランダはイオニア式複柱を採用した列柱で明るく伸びやかさがあることなどが特長である。ここでは煉瓦造内に鉄骨を組み込んだ鉄骨補強煉瓦造とし、アメリカ・シカゴの専門家シャタランドに鉄骨設計指導を委嘱、カーネギー製鉄の鉄骨を採用した。また同社の技師2名が現場指導のため来日している〔21〕。

10年の歳月を掛け、煉瓦造の弱点を鉄骨補強で解決し、外壁の石張り、銅板葺き屋根、石造彫刻、室内に大理石柱や石膏彫刻を用いるなど建築界、美術界全体の力で最高度の建築を完成させた。技師・山本直三郎〔22〕は後に「我国の建築工業界には一大進歩を齎したと信じて居ります」と語っている〔23〕。

皇太子同妃両殿下は工事中の明治33年〔1900〕5月に御成婚後、青山仮東宮御所を御在所として完成後も引き続き御使用になった。その理由は不詳であるが、本来、洋館の御殿に付属する日本館（木造平屋建て、東宮職も入所予定）が取りやめになったことも考えられる。戦後、昭和23年〔1948〕4月から国会図書館として使用するなどしていたが、昭和43年〔1968〕から改修工事を行い、昭和49年〔1974〕4月1日、総理府（現・内閣府）所管の迎賓館となり、現在に至っている。平成21年〔2009〕12月8日には、明治以降の建築で初めて国宝に指定された。

皇室伝統の継承、御陵造営と御代替わりの式場布設

明治45年〔1912〕7月30日に明治天皇が崩御された。当日、踐祚ひんその儀が執り行なわれ元号が大正となった。さらに大正3年〔1914〕4月11日に昭憲皇太后が崩御し、片山東熊は、明治天皇の伏見桃山陵〔1913〕と昭憲皇太后の伏見桃山東陵〔1915〕を完成させた。御代替わりの大礼では、大礼使造営部長として大正4年〔1915〕11月10日に京都御所紫宸殿で「即位の礼」、11月14日夕から15日暁にかけて仙洞御所御内庭で「大嘗祭」、11月17日には二条離宮で饗宴場の布設した。天皇が宮城みんこうに還幸後の12月7、8日、天皇は片山と木子幸三郎設計の宮殿の中庭に建てられた能楽場で御能を御覧になった。片山は自身が最も好んだ謡曲によるハレの御能が終了した後、12月27日、内匠頭を辞し、宮中顧問官に任した。歴代天皇陵の陵形は多種であるが、伏見桃山陵と伏見桃山東陵の陵形は“上円下方”で造営され、次代からは同形を踏襲している。御代替わりの式場は、今上天皇の「即位の礼」は皇居の宮殿、「大嘗祭」は皇居東御苑で執り行われたが、式場形式はおおむね先例を踏襲している。このことは片



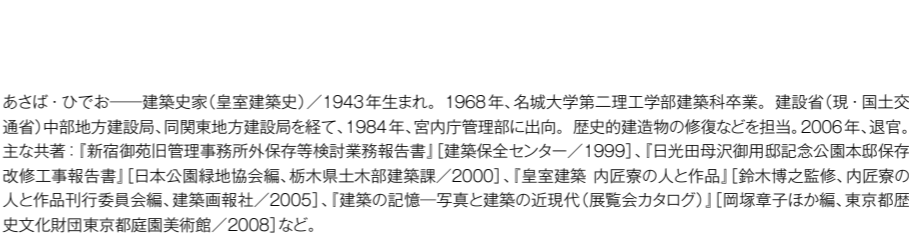
山が確立したと言える。なお、宮殿中庭の“御能”は、今上天皇の大礼では“雅楽”になった。永代に続く御陵は建築家・片山東熊が皇室の技師であった証である。御陵造営と御代替わりの式場布設は、宮内省内匠寮が宮内庁管理部と名称替えとなった今日、皇室の連綿と続く伝統の継承として最も重要な職務のひとつである。

片山東熊の人柄と評価

片山東熊は東宮御所を始め、帝国奈良博物館、帝国京都博物館、表慶館、栃木県庁舎〔1890〕、神宮徴古館〔1909〕、神奈川県庁舎〔1913〕など、象徴性や記念性の高い作品は平面、外観共にシンメトリーを基本にしている。辰野金吾は「片山博士が最も好む所の建築上の様式はフレンチルネサンスであつた、而かも余程意に叶うた様式と思はれて居つたと思ふ、君は何づれの建物にも良く該様式を適用されたものである。博士の設計には何時もフレンチルネサンスが瞭然と見えて居る」と語っている〔24〕。

一方、新宿御苑洋館御休所〔1896〕ではスレート屋根の木造平屋建て、スティック様式とし、埼玉鳩場御食堂〔1910〕は木造平屋建て、煉瓦造暖炉付きなど、用途・規模共に幅広く設計している。いずれも皇室の御使用をベースにした品位があり、親しみを感じる作品である。

片山は責務から離れて2年後の大正6年〔1917〕10月23日、逝去した。64歳、正三位、勲一等旭日大綬章。有栖川宮建築掛を含めて約35年間、宮廷建築造営を全うした生涯であった。片山は宮廷建築家、辰野金吾は造家学会会長・大学校教授・建築家、妻木頼黄〔25〕は官庁宮繕建築家としてそれぞれの分野で頂点に立った。建築家・片山東熊は私にとって皇室の建築、土木の大先輩にあたる。今日、片山東熊の設計した多くの皇室建築が広く人々に愛され大切にされていることは無上の喜びである。



あさば・ひでお——建築史家(皇室建築史)／1943年生まれ。1968年、名城大学第二理工学部建築科卒業。建設省（現・国土交通省）中部地方建設局、同関東地方建設局を経て、1984年、宮内庁管理部に出向。歴史的建造物の修復などを担当。2006年、退官。主な共著：『新宿御苑旧管理事務所外保存等検討業務報告書』[建築保全センター／1999]、『日光田母沢御用邸記念公園本邸保存改修工事報告書』[日本公園緑地協会編、栃木県土木部建築課／2000]、『皇室建築 内匠寮の人と作品』[鈴木博之監修、内匠寮の人と作品刊行委員会編、建築画報社／2005]、『建築の記憶—写真と建築の近現代(展覧会カタログ)』[岡塚章子ほか編、東京都歴史文化財団東京都庭園美術館／2008]など。

旧帝国京都博物館 特別展示館正面図

中央部と隅屋部に大小のマンサード屋根を載せて南北に長い印象を和らげるとともに、隅屋部を脇玄関に見立てたバランスの良いシンメトリーの外観は、背後の東山の峰々に溶け込むことを意図したかのである。中央玄関と左右翼廊の外壁の付け柱の取り付けや屋根のドーマー窓と鑄鉄の様飾り、軒の徳利石彫刻などの装飾は、正面外観の品位をより高めている〔所蔵：京都国立博物館〕



東宮御所〔1909〕

北西から望む。大御車寄（公式御玄関）から湾曲した回廊を経て東西の翼館に至る。外観は、瑞鳥（ずいちょう）が羽根を広げたような荘厳な雰囲気の中、賓客を優しく迎える【国宝】〔出典：『明治洋風宮廷建築』】



新宿御苑洋館御休所〔1896〕

皇族の温室御観覧時の御休憩所として建てられた木造平屋建ての建物。渡り廊下で温室と結ばれていたが、渡り廊下は現存しない。昭和に入り、御運動時の御休憩所として原形を活かし、改修・増築された【重要文化財】〔写真：筆者〕

旧帝国京都博物館 (現・京都国立博物館 明治古都館)

竣工年：1895年
所在地：京都府京都市東山区茶屋町527
構造・規模：煉瓦造平屋建
【重要文化財】



1 表門

巧緻なデザインの門扉を構える表門は、赤煉瓦壁が彩やかで、明治期の作品の格調の高さを今に伝える。ドームを載せた門衛所を併設している

2 正面玄関

コリント式の付け柱と3連アーチの堂々とした構え。ペディメントは美術工芸の神である伎芸天と毘首羯磨(びしゅかつま)の東洋的レリーフ

3 展示室

竣工時に中央廣堂と称した展示室は、コリント式列柱で囲まれ荘厳な雰囲気を出している。創建当時は、天窓からの光が優しく注がれていた【所蔵：京都国立博物館】

4 西面全景

端整で品のあるファサードが特長のフレンチ・ルネサンス様式の代表建築。中央と両端の緩やかなマニサード屋根と赤煉瓦壁が印象的である



表慶館

竣工年：1908年
所在地：東京都台東区上野公園13-9
構造・規模：石および煉瓦造2階建
【重要文化財】

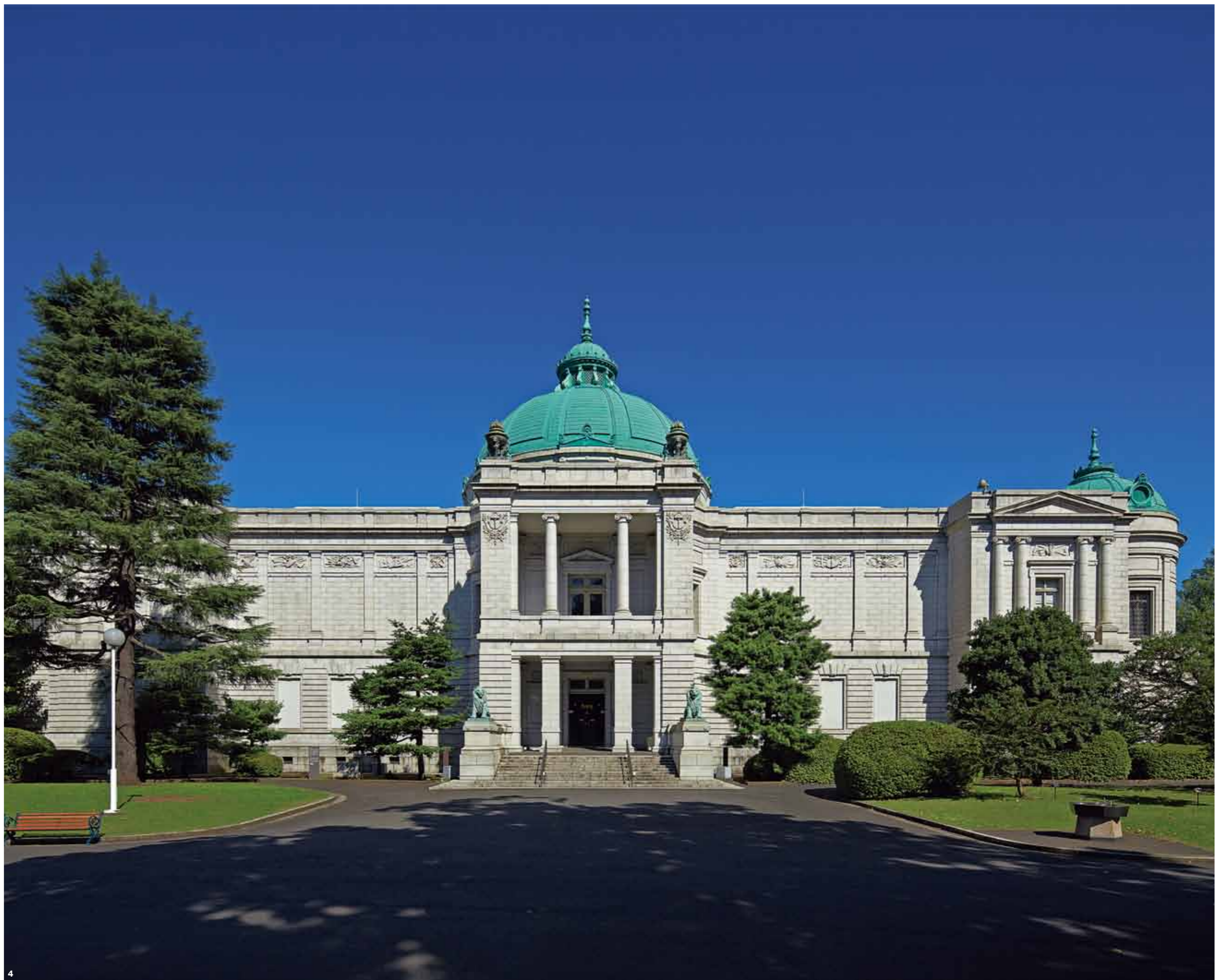


1 2階回廊
中央ドームを8本の大理石のイオニア式円柱が支えている。柱の台座と手すりも大理石で、品のあふれる落ち着いた空間となっている

2 1階中央ホールからのドーム見上げ
8本の円柱があたかもドームの中心に向かうような奥行き感を出し、2階回廊の明かりも夜空のような神秘性を醸し出している

3 階段室
円塔の階段室の踊り場から1階の展示室を見る。明かりのコントラストにより引き立つ錬鉄製手すりの曲線が秀麗

4 正面外観
中央大ドーム、両端小ドームの緑青銅板が青空に映える壮麗なネオ・バロック様式。1階のトスカナ式角柱、2階のイオニア式円柱が力強い。建物を守護する正面玄関脇の2頭の青銅製ライオンは大熊氏広の製作による



竹田宮邸洋館 (現・グランドプリンス ホテル高輪 貴賓館)

竣工年：1911年
所在地：東京都港区高輪3-13-1
構造・規模：煉瓦造2階建



1 正面全景
中央持出し部の急勾配のマンサード屋根が特徴的。威厳のある御車寄の角柱をトスカナ式円柱が内側から優しく寄り添っているように見える。軒上ペランダの徳利束、2階出入り口まわりなどに見事な彫刻が施されている

2 南面外観
中央1階に3連アーチ、2階にイオニア式円柱のペランダを配し、両端を持出し部として奥行き感を演出している

3 階段室
木製の緩やかな回り階段が賓客を2階に誘い、親柱の精緻な彫物も見事である。大きな窓のステンドグラスは、品川沖の帆船や群れ飛ぶカモメを描いたと伝えられる

4 チャペル「錦鶏」
木調でまとめられた格天井、木枠の大きな鏡を持つ大理石の暖炉など、重厚に設えられた空間。1972年、建築家・村野藤吾が改修し、チャペルとなった。正面の祭壇部は宮邸時には壁で仕切られ、出入り

口が設けられていた

5 バンケットルーム「鳳凰」
フレンチ・ルネサンス様式で華やかな空間。大きな鏡を持つ大理石の暖炉、シャンデリアや天井の石膏線型金箔装飾は宮邸時と変わらないが、正面右側の扉は大鏡だった

6 前室「桐」
小高い丘に建ち外の景色がよく望める八角形半円の持出し部は明るく開放的な空間で、天井まわりや壁の装飾とも調和している



略歴 Biography

嘉永6年[1853]	12月19日、長門国阿武郡萩今古萩町に片山文左の四男として生まれる		
明治6年[1873]	8月23日、工学専門官費生として工部省工学家に入寮		
明治12年[1879]	11月8日、工部大学校造家学科卒業、工学士の学位を授与される。12月3日、工部七等技手		
明治14年[1881]	1月19日、有栖川宮建築掛		
明治15年[1882]	6月18日、有栖川宮に陪従し、渡欧。同宮新邸の装飾を調達する		
明治17年[1884]	2月19日、帰国。7月12日、工部省准奏任用御掛。8月2日、太政官准奏任用御掛。8月6日、外務省御用掛兼務を命じられ、清国北京日本公使館移転および建築掛として清国に出張		
明治19年[1886]	1月9日、外務二等属。9月3日、帰国。10月9日、内閣直属臨時建築局四等技師兼任官。12月17日、皇居御造営事務局出仕兼任四等。12月31日、明治宮殿の室内装飾および家具調達のため渡独		
明治20年[1887]	11月23日、帰国。12月24日、皇居御造営事務局が廃止され、皇居御造営残業掛となる。匠師兼任四等、皇居御造営残業掛専務		
明治21年[1888]	3月9日、内匠四等技師。10月15日、帝国大学工科大学の造家学・図画授業嘱託。10月30日、匠師が廃止され、内匠四等技師となる。10月31日、皇居御造営残業掛が廃止され、皇居御造営残務取扱所となる。残務取扱専務。12月4日、警察上建築検査嘱託	明治24年[1891]	8月24日、工学博士の学位を授与される。10月12日、箱根離宮、御料局木曾・静岡両支庁へ出張。10月30日、愛知・岐阜両県下へ出張
		明治27年[1894]	7月17日、宮内省修築取調委員
		明治29年[1896]	12月9日、東宮御所御造営調査委員。12月25日、勲六等瑞宝章
		明治30年[1897]	3月26日、東宮御所御造営調査のため、渡欧米。高山幸次郎、足立鳩吉が同行
		明治31年[1898]	3月23日、帰国。8月17日、東宮御所御造営局技監を兼任
		明治32年[1899]	6月14日、東宮御所御造営の鉄骨ならびに暖房機調達のため、渡米。11月24日、帰国。12月27日、勲五等瑞宝章
		明治34年[1901]	6月27日、勲四等瑞宝章
		明治36年[1903]	1月、東宮御所御造営の洋館装飾等調達のため、渡欧米。12月、帰国
		明治37年[1904]	4月1日、内匠頭を命じられ、東宮御所御造営局技監を兼任
		明治38年[1905]	6月24日、勲三等瑞宝章
		明治40年[1907]	2月8日、勲二等旭日重光章
		大正4年[1915]	12月27日、内匠頭を退任し、宮中顧問官となる
		大正5年[1916]	1月19日、勲一等旭日大綬章
		大正6年[1917]	10月23日、逝去(64歳)、正三位



工部大学校第1回卒業生
片山は、秋に執り行われた大正大礼の式場布設前で、和服姿でくつろいでいる。後列左から3番目に辰野金吾、その隣に曾禰達蔵、前列左に佐佐七次郎、その隣に片山東熊[出典：『INAX REPORT』No.167,2006.7]

主な作品 Works

●印は現存

明治17年[1884]	有栖川宮邸洋館室内装飾(設計：ジョサイア・コンドル)(東京)	明治34年[1901]	●楠公銅像台(東京) 沼津御用邸洋館(静岡)	大正4年[1915]	●伏見桃山陵(昭憲皇太后陵)(京都) ●京都御所春興殿(京都) 宮中能楽場(東京) 二条離宮饗宴場(京都) 建春門外朝集所(京都)
明治19年[1886]	清国北京日本公使館(中国)	昭和35年[1902]	高輪御殿御学問所洋館(東京)		
明治21年[1888]	明治宮殿室内装飾(設計：木子清敬)(東京)	明治37年[1904]	秋田県公会堂(秋田)		
明治23年[1890]	●日本赤十字社中央病院病棟(東京) →昭和49年、明治村に移築保存(愛知) 【国登録有形文化財】 栃木県庁舎(栃木)	明治40年[1907]	●仁風閣(鳥取)【重要文化財】		
明治24年[1891]	江戸橋郵便局(東京) 伏見宮邸(東京) 一条公爵邸(東京) 山県公爵邸(東京) 土方伯爵邸(東京)	明治41年[1908]	●表慶館(東京)【重要文化財】		
明治25年[1892]	御料局静岡支庁舎(静岡)	明治42年[1909]	●東宮御所(現：迎賓館赤坂離宮)(東京)【国宝】		
明治26年[1893]	細川公爵邸(東京)	明治43年[1910]	●神宮徴古館(三重)【国登録有形文化財】 靈南坂官舎(東京)		
明治27年[1894]	●帝国奈良博物館(現：奈良国立博物館ならら像館)(奈良)【重要文化財】	明治44年[1911]	●埼玉鳩場御食堂(埼玉) 帝室林野管理局庁舎(東京)		
明治28年[1895]	●帝国京都博物館(現：京都国立博物館明治古都館)(京都)【重要文化財】	明治45年[1912]	●竹田宮邸洋館(現：グランドプリンスホテル高輪 貴賓館)(東京) ●大日山水源地御館室(現：九条山浄水場ポンプ室)(京都) 北白川宮邸洋館(東京) 赤坂分庁舎(東京) 宮内省消毒所(東京) 宮内省自動車庫(東京)		
明治29年[1896]	●新宿御苑洋館御休所(東京)【重要文化財】 閑院宮邸(東京)	大正2年[1913]	●伏見桃山陵(明治天皇陵)(京都) ●正倉院正倉修復(奈良)【国宝】 神奈川県庁舎(神奈川)		
明治30年[1897]	宮内省庁舎改修(東京)	大正3年[1914]	武庫離宮(兵庫) 紅葉山写真場(東京)		
明治31年[1898]	●後月輪東北陵(英照皇太后陵)(京都)				

参考文献：「東洋一美術館」『風俗画報(東陽堂)』1908.3、「明治天皇紀 第1-4」[宮内庁編、吉川弘文館/1968-70]、「日本の建築 明治大正昭和2様式の礎」小野木重勝著[三省堂/1979]、『皇室建築 内匠寮の人と作品』[鈴木博之監修、内匠寮の人と作品刊行委員会編、建築画報社/2005]

取材協力：京都国立博物館/グランドプリンスホテル高輪/東京国立博物館
おことわり：08-13頁の作品名称のみ文化財指定名称とし、他は原則として竣工時の名称を使用しています

五島美術館

五島美術館は、東急電鉄の創始者・五島慶太の喜寿を記念して建設された。しかし五島は竣工を見ることなく他界し、美術館は1年後に完成した。建築家・吉田五十八は、「設計者として建設工事中にその主たる人を亡くすくらい遺憾なことはない。しかし、この設計には五島氏の好みが多量なりとも織り込まれている。それがせめてものなぐさめと言い得る」と述懐している。

この美術館は、寝殿造りの要素を現代建築に活かしたと注目を集めた。深い庇と巨大な丸柱に囲まれたシンプルな中にも高い質感を持つ空間は、常に庭と一体化し、背後にある武蔵野の面影を残す庭園に広がっていく。

開館50周年を機に2011年6月、大規模な増改築工事がスタートした。設計・施工は清水建設、デザイン監修は堀越英嗣。吉田による外観デザインを可能な限り継承することをテーマに見直しを掛け、もとの空間性を純粹なものに戻して現代化した。そして耐震補強を施し、設備も刷新した。

吉田五十八の原点、住宅のような美術館は使いながら、更に更にと次代に継承されていくことだろう。

竣工時の概要

所在地	東京都世田谷区上野毛3-9-25
敷地面積	6,380m ²
建築面積	1,391m ²
延床面積	1,670m ²
構造	鉄筋コンクリート造
工期	1959.3-1960.4
設計・監理	吉田五十八
施工	清水建設

増改築時の概要

敷地面積	19,903.86m ²
建築面積	1,858.84m ²
延床面積	1,989.14m ²
規模	地下1階、地上2階
構造	鉄筋コンクリート造
工期	2011.6-2012.2
総合監修	東京急行電鉄
デザイン監修	堀越英司 ARCHITECT 5
設計・監理	清水建設
施工	清水建設





15頁一週り緑西側から休憩室と展示室1を見る：休憩室は2012年の増改築で新設されたが、展示室2から雁行して配置されたため、エントランスホールからその姿は見えない。本館の竣工は1960年4月。軒高を抑えた低層のおおらかな東面と、力強い丸柱が廻り縁に沿って取り囲む堂々とした西面の構えが、広大な敷地の中にひっそりとある。2012年、2年間休業して大規模な増改築工事が行われた。改修のテーマは、50年間、引き継がれてきた行まいの記憶を継承することだった。16-17頁一正面(東面)外観：全体を低層に抑えた構成が特長で、鉄筋コンクリート造で和風建築を実現した吉田五十八の代表作でもある。正面左半分は手狭になった事務スペースを改善するため、1989年、吉田五十八の高弟・野村加根夫の設計によって拡張された。18-19頁一中庭から見た美術館：この景観は50年を経た現在も、ほとんど変わっていない。20頁上—エントランスホール：2012年の改修時に受付カウンターを新設した。位置も展示室1側から展示室3側に変更し、竣工時のイメージを踏襲して、すっきりとした空間にまとめられている。床の文様“松皮菱”はひび割れを修復して再利用し、天井の照明カバーの“朽木文様”はコピーではなく、昔ながらのやり方で、手づくりで修復されている。20頁下—休憩室内部：展示室2と集会室をつなぐ連絡通路にもなっている。21頁上—展示室2：旧集会室を改修して増設された。吉田五十八は自然光に近い状態で絵や掛け軸を鑑賞することを理想としたため、障子を採用して柔らかな光を再現した。現在はガラス、障子、シャッターと、3段階の光の使い分けができる。21頁下—新設された集会室：庭に面した開口には大判の割付障子を採用。夕日によって木々などが映し出され、豊かな自然の移ろいを感じ取れるよう設計されている。



鉄筋コンクリート造による平安王朝美の再現 ——吉田五十八の五島美術館にみる“平安調”の建築意匠

世田谷区の上野毛にある五島美術館は、東急電鉄の創始者・五島慶太[1882-1959]の蒐集した古写経を始めとする美術品を保存・公開する私設美術館である。1960年に建てられた本館の建物は、いわゆる“新興数寄屋”でよく知られる和風建築の大家、吉田五十八[1894-1974]の設計による鉄筋コンクリート造和風建築であり、清水建設によって施工された。多摩川の河川敷きを望む高台の上に建ち、北棟と南棟を低い屋根のエントランスホールで繋ぎ、それらの建物が、眺望の開けた庭園をコの字形に囲むという構成になっている。その庭園から建物を見ると、背の高い丸柱が中庭をぐるりと取り囲み、威風堂々とした外観のデザインが印象的であるが、それとは対照的に、正面玄関側の立面は一段低い屋根を玄関ポーチに張り出し、軒高をなるべく低く抑えた優しい構えになっている。

五島美術館の竣工時に、吉田は「五島慶太氏の喜寿を記念する意味」でこの建物が建てられたことを記している[1]。五島の喜寿祝いの会は1959年4月18日、五島自身も設計に関わった茶室「富士見亭」[1957]において開催されたが、この時にはすでに吉田の基本設計は完了しており、翌月には早くも清水建設との工事契約が交わされている。しかし、同年8月に五島は他界してしまい、吉田は「設計者として、建築工事中、その主たる人に亡くなられるくらい、遺憾なことはない」[1]と痛恨の念を吐露しているが、翌年4月18日には盛大な竣工記念式典が敢行された。1989年には、手狭になった事務スペースを広げるための増築工事が行われた。それは、玄関側正面の左手に突出する事務室をさらに柱間1スパン分外側に拡張した工事で、立面意匠上重要になる外壁もその際に新たにされたが、オリジナルのデザインを損なうことなく、さりげなく増築している。例えば、幅木は当初と同じ鍔御影石(本磨き)を用いており、コンクリート製の格子窓も細部まで同寸で、丸柱の斫り仕上げ(「赤間石の碎石入り擬石塗り小印仕上げ」[2])も新旧の見分けが付き難い。この工事は東急建設によって設計・施工され、吉田に師事した高弟の一人、野村加根夫氏もその設計に関わったと言われる。なお、2012年にも、清水建設(デザイン監修:堀越英嗣)によって耐震補強を含む大規模な改修工事が行われたが、建物の歴史的価

値に配慮し、建設当初の吉田の設計意図を尊重したも

寝殿造りの再解釈と

鉄筋コンクリート造による伝統表現

戦後の復興期に、吉田は自らの設計活動について「しまいには不燃の建築ばかりやりたい。(中略)いつか不燃の建築としっかり結びついて、日本らしいコンクリートの形態が出来ればそれでいい」という抱負を述べていた[4]。つまり、木造という伝統的構法ではなく、現代的な構造技術である鉄筋コンクリート造を用いて建物を不燃化しながら、伝統的で“日本らしい”建築をつくりたいというのである。ひいては近い将来に日本の建築界で、鉄筋コンクリート造による新たな和風建築様式を生み出すべきと提唱している。その言葉のとおり、戦後の吉田は、主に公共建築の仕事において鉄筋コンクリート造の伝統表現に取り組んだ。五島美術館はその最初期の作品のひとつで、この直前に設計された日本芸術院会館[1958]とともに平安時代の貴族住宅である寝殿造りを再解釈しつつ、それに現代性を付与しようとしたものであり、それらで試みられた吉田の“平安調”の意匠は、それ以降の吉田作品の基調となった。鉄筋コンクリート造は木造よりも部材寸法が大きくなるので、それまで吉田が得意としていた数寄屋よりも木太い古代建築の方が相性が良く、さらに彼自身の好みも、おおらかな古代建築とよく合ったのだろう。寝殿造りは畳を敷き詰めずに板張りのままで、内法が高く、天井を張らない点など「おおらか」で、かつ「近代的」であると吉田は述べている[5]。

それでは吉田の言う“平安調”の意匠とは具体的には何なのか。まず、日本建築の大きな特徴である屋根の表現について五島美術館を見ると、軒の出を2m以上も出しつつ、陸屋根^{フラットルーフ}にしている。勾配のある屋根は屋根裏にデッドスペースが出来るので構造的、経済的に合理的ではないし、本物の木造古建築でも近寄って屋根を見上げれば、平入りだと棟は見えず軒だけしか見えないから、思いきってフラットにして軒だけ出すことにしたのだろう。よく見ると、隅では微妙に軒の上端を反り上げて、古建築の優美な軒反りの曲線を表現しているが、コンクリートでそれを再現するのは容易ではなかったはずである。この建物は1961年の建築業協



中庭から展示室2・3を見る

会賞を受賞したが、その受賞理由を見ても、この点を始めとする施工技術の高さが評価されている[2]。また、竪樋を柱の内部に仕込むことにより、意匠上目障りな横樋をなくして軒線を綺麗に見せており、さらに近年の改修で軒先鋼板の鮮やかな当初の色彩を再現したので、軒線は一層引き立っている。立面の意匠を見ると、木太丸柱は古代建築らしく、その表面を研って、工具が未発達だった古代建築の荒々しさを表現している。幅の広い廻り縁^{まわりぎし}を張り出して、深い軒とともに外観の水平線を強調しつつ建物と庭を連続させている。柱間一杯の開口部にはアルミパイプ製の御簾やコンクリート製の都戸風の格子窓を用いている。これらは寝殿造りの建築のモチーフをもとに吉田が考案したもので、むしろ意匠の意味だけではなく日照を制御する実用的意味も持たせてある。鉄筋コンクリート造の伝統表現において、吉田は「ちょっと見たときに、なんか日本的だなという程度」[6]にしておくのが良いとして、その「なんか日本的」は、細部ではなくて「プロポーション、間の取り方」によって生まれるものなのだ、と述べている。「間の取り方」とは、長唄の名人でもあった吉田の面目躍如たる言葉であるが、そうして見ると、戦前からの“新興数寄屋”は木造だが大壁構法を用いて柱の間を取るものであったという点で一脈通ずるものがある。庭園に面する廻り縁、木太丸柱と広い柱間、深い軒などによって構成される、耽美的で、伸びやかな意匠には、吉田の造形感覚がよく現れている。なお、吉田流にアレンジした有職文様を各所に用いて

いる点も吉田の“平安調”の特徴で、エントランスの天井照明の嵌め込みガラスには朽木文様をあしらっており、この文様は五島美術館の公式のシンボルマークにもなっている。

ところで、五島美術館の2年前に竣工した日本芸術院会館もよく似た外観のデザインになっている。両者を比較すると、日本芸術院会館では中庭が^{ちち}たちの低い回廊で囲まれているのに対し、五島美術館では、庭園を囲む南北棟を、廻り縁のある^{ちち}たちの高い建物として、たくましい列柱が表現されている。これは設計条件の違いにも起因するのだろうが、その後の彼の“平安調”の作品を見ると、廻り縁を表現の主体に据えた五島美術館は、吉田の“平安調”を一段と展開させたように見える。吉田は竣工時に「この設計のうちに、五島氏の好みが多量でも、織りこまれている」[1]と述べているが、この言葉は、五島が美術館設立を具体化させた頃に購入した『源氏物語絵巻』(国宝)に描かれた平安時代の貴族住宅の姿と、この建物の外観意匠との関連性を思わせる。吉田の“平安調”はその直前の日本芸術院会館の設計の際に生まれたものであったが、それを建築的に展開させた原動力は、五島の『源氏物語絵巻』にあったのかもしれない。

[1] 吉田五十八「五島美術館」『新建築』1960.6

[2] 松田軍平「五島美術館」『建築業協会賞作品集 1961—第2回BCS PRIZE WORKS』[建築業協会 / 1961]

[3] 「五島美術館 改修」『新建築』2012.11

[4] 「国際性・風土性・国民性—現代建築の造形をめぐる—」(吉田五十八×丹下健三×坂倉準三×前川國男)『国際建築』1953.3

[5] 『建築の一九三〇年代—系譜と脈絡』磯崎新著[鹿島出版会 / 1978]

[6] 「座談会:美の伝統と創造」(東山魁夷×吉田五十八×栗田勇)『現代日本建築家全集3 吉田五十八』[栗田勇編、三一書房 / 1974]

あおやぎ・のりまさ——立命館大学理工学部建築都市デザイン学科講師 / 1975年生まれ。1998年、東京工業大学卒業。2008年、東京工業大学博士課程修了。博士(工学)。2008-12年、東京工業大学建築学専攻助教。2013年より現職。
主な著書:『建築史家・大岡貴の建築—鉄筋コンクリート造による伝統表現の試み』[共著、川崎市立日本民家園 / 2013]、「古経楼・富士見亭の建築と意匠—五島美術館古経楼・富士見亭修理工事報告書」[世田谷区文化財調査報告集23] [共著、世田谷区教育委員会 / 2014] など。

特集 [鼎談]

新時代に挑戦した
先駆者



●ゲスト●
名児耶 明
Akira Nagoya
五島美術館副館長(左)
堀越英嗣
Hidetsugu Horikoshi
建築家(右)



●聞き手●
古谷誠章
Nobuaki Furuya
建築家

吉田五十八の原点、 住宅のような五島美術館を 使いながら未来へ…。

五島慶太さんの 蒐集があつてこそ…

古谷 | この特集は、わが国の戦後の近代建築の中で時代を画するような建物を取り上げて、そのプロジェクトがどのようにして生まれ成り立ったかを、当時をよくご存じの方に伺って記録にとどめるのが主旨なんです。今回の五島美術館は、それとは少し趣が変わってきます。当然、戦後の復興の過程でいろいろな意味での日本の再生を果たしてきたわけですが、その中で技術立国とか経済成長だけではなく、戦争中とはとてもそれどころではなかった状況から立ち直り始めて、文化、そして芸術といったものを改めてきちんと保管するし、鑑賞もする。そういう芸術文化に触れることの意義が、もう一度生まれてきた。それも重要な復興の過程だと思えます。この五島美術館は、そういう意味で時代を画したのではないのでしょうか。

竣工は1960年で、戦後から15年たっていることになりませんが、当然それより前に五島慶太さんの蒐集があつてこそなんです。それが改めて収蔵され、展覧されるようになる。そういう意味でエポックメイキングであつたと考えています。今日はこの美術館の生き字引と言われる名児耶明さん、再生に加わられた堀越英嗣さんにお越しいただきましたので、おふたりにお話をお伺いいたします。ちょっとさかのぼりますが、まず美術館の創始者・五島慶太という方はどんな方だったのですか。もちろん東急の創始者であるし、実業家、後に政治家にもなられる。そういう意味での表の五島さんの来歴は承知しているつもりですが、この書画骨董と言いますか、文化財を蒐集していた五島さんとは、どういう方だったのか、そこからお聞かせいただけますか。

名児耶 | 基本的には古美術の蒐集のきっかけは、そういうものを集めている先輩実業家たちの影響ですね。それと親の影響で法華経でしたが、仏教に信心深いところがありまして…。

古谷 | 子ども時代はいつもお経を唱えさせられて育つたという記録があるそうですね。

名児耶 | そうです。長野県の小さい田舎町にあつた小林家で親の影響を受けて育つた。学校も昔の高等師範を出てから東大に行っているんです。そして昔の鉄道省に入りました。その間に結婚しますが、夫人側の途絶えていた五島姓を再興するために、五島に改姓しています。まだ小さい電鉄会社がいろいろあつた時代でしたが、そのひとつ、武蔵電機鉄道に鉄道省から入り、合併したりして大きくしていった。それが現在の東急です。その過程で、実業家たちから「あいつも力が付いてきた。文化的な勉強会の仲間に入れよう」と言われて、延命会に入って勉強を始めたようです。

古谷 | 命を延ばすと書く、延命会ですね。

名児耶 | そうです。有名な服部(玄三)さんとか、そうそうたる実業家たちが入っているグループです。当時の文化人に誘われて徐々に興味を持つようになった

みたいですが。それがきっかけで美術品を集めるというか、興味を持っていったようですが、とにかく古美術に目が向いたのは、鉄道関係の仕事をし始めてから同業の中で交流が出来て、役員に呼んだり呼ばれたりするようになってからです。

古谷 | それは当然、戦前の話ですね。

名児耶 | そうです。そのうち月に1回ぐらいいらいますが、今の近鉄での会合に参加するようになります。今と違って日帰りはできませんから、泊まり掛けで2、3日掛けて行きまして、余った時間に神社仏閣などを見て回つたようです。それがひとつと、もう一つは近鉄の役員の中に阪本(猷)さんという森林関係の大富豪がいらつちゃって、その影響もあつたと思います。その人が古美術を集めていて、後に阪本龍門文庫をつくられた。今もたしかあつたと思います。

古谷 | 吉野の方ですね。

名児耶 | そうです。その方が会議のたびに古美術の話をしてくれたらしいんです。それで自分も集める気になった。最初を買つたのは、奈良の薬師寺に伝わる薬師寺経というお経だつたそうです。短い時間に相当数のお経を集めていたんですよ、びっくりしました。お経から次第に奈良から江戸時代までの書跡を集め始めまして、次はお茶の世界に入つてお道具類も集める。その前に新画(日本画)を集めたと聞いています。新画は偽物が分かりやすいですからね。(横山)大観とか(川合)玉堂に興味を示して絵も集めているんです。そして、この美術館をつくる時に、「源氏物語絵巻」とか「紫式部日記絵巻」、中国のやきものなどをどつと買うんです。

古谷 | じゃあ「源氏物語絵巻」などは、この美術館をつくるために買われた。

名児耶 | そうです。根幹はあくまでも書を中心とした仏教美術なんです…。

古谷 | なるほど、そうでしたか。

名児耶 | いろいろ話を聞きますと、五島慶太は何事に対しても豪快なように見えますけれども、とても生真面目な人柄だつたそうです。

五島美術館が生まれた経緯 財団として管理すること…

古谷 | 五島美術館が生まれた背景を伺います。今、伺つたように経済界のお付き合いをされている中で次第にお集めになって、やがて美術館にまとめることをお考えになった。それまで美術品は、どこに置かれていたんですか。

名児耶 | たぶん自宅です。私がこの美術館に入った時は別館の辺りに倉庫がありました。それが蔵だと思えます。

古谷 | その頃の管理状態はどうだつたのですか？

名児耶 | 今は亡くなりましたけど、運転手兼、用心棒兼、蔵番みたいな人がいまして。

古谷 | きちんと管理されていたんですね。



吉田五十八 [出典:「現代日本建築家全集3 吉田五十八」(栗田勇編、三一書房/1974)]
1894年、東京都に生まれる。1923年、東京美術学校卒業。1946年、東京美術学校教授。1949-61年、東京藝術大学教授。1954年、日本芸術院会員。1960年、メキシコ建築家協会名誉会員。1962年、東京藝術大学名誉教授。1963-68年、皇居新宮殿造営顧問。1964年、文化勲章受賞。1968年、AIA名誉会員。1974年、逝去(79歳)。従三位、勲一等瑞宝章

名児耶 | そうだと思います。美術館に寄贈されたものもあるのですが、それらはその蔵の中にあっただと思います。時々お茶会があると、「こんなお道具があるけど使ってよ」なんて、その蔵番の人が出してきましたから。そういうことをきちっと管理していたと思います。

古谷 | ご自宅にずっと保管されていたものを美術館としてまとめる。当然それは公開することをもくろんでいたわけですよね。

名児耶 | そうです。77歳の喜寿をきっかけに公開しようとしていました。まずは財団をつくってそこに寄付するわけですね。ですから、自分の思いどおりにはもうならないことが分かった。でも、それはまあしょうがないですよね、公開すると決めたわけですから。

古谷 | でも、後々のことを考えて公開されたわけでしょう。

名児耶 | そうです。当時をよく知る弁護士は、「たぶんバラバラにしたいことが大きかったと思う」と言っていました。今後は財団としてきちっと管理することを承知して公開にしたと思います。

古谷 | 残念ながら、開館する前にお亡くなりになった。

名児耶 | そうなんです。でも、もし美術館経営に直接かかわっていたら、どういう美術館になったか…(笑)。

古谷 | そういう意味もありますか(笑)。

名児耶 | つまりワンマン美術館…。新しく出来たのに崩壊した例が結構あるんですよ。長野や大阪にあった某美術館は、それを引き継ぐことがなかったと聞いた気がします。五島美術館の場合は2代目の五島昇が相当興味を持っておりまして、「計画したのは五島慶太だけど、つくったのは自分だ」と言っているくらいです。その意識が強かったからこうして維持できています。

古谷 | 戦前までは財界の方々が個人的に収蔵されていたものが、ある意味では近代的な美術館に生まれ変わっていった、黎明期のような感じですかね。

名児耶 | そうですね。残っているのは都内で言うと根津美術館、大倉集古館の2つくらいが古く、残っているのも良さそうな美術館がなくなっていますからね。

吉田五十八先生は、雲の上にいるような方

古谷 | 次は堀越さんにお伺いします。この美術館建設は、吉田五十八先生が担当されたわけですが、吉田先生は東京芸大のご出身であり、教授でもいらっしゃったわけですね。生前、吉田先生にお会いになったことはあるんですか？

堀越 | お会いしていないんです。ちょうど入れ替わりの時期で、名誉教授だったんですが、ついにお会いしないままになってしまいました。ただ、影を感じていました(笑)。

古谷 | 影を感じていたんですね。お亡くなりになったのは1974年、昭和49年ですから、堀越さんは大学生

の頃ですね。

堀越 | そうです。私は1972年の入学で、その当時、先生は芸大におられて、建築学科に「名誉教授・吉田五十八」の名札が下がっていました。その頃は吉村順三先生も来られていましたけど、常勤は辞めるというタイミングでしたね。

古谷 | 退官されていたにせよ、超大物である吉田先生や吉村先生がいる芸大ですから、残り香と言いますか、そういう雰囲気は充満していたのでしょうか。

堀越 | そうですね。言ってみれば、1970年代は日本のモダニズムがまだ残っている時代というか、全盛から少し延びた時期で、ちょうど万博が終わった頃ですね。吉田先生の立ち位置は、芸大の中でもなかなか特異な存在でした。ところが吉田先生のお弟子さんたちは今でも活躍されている方が結構いらっしゃって、その方々は日本というものをきちっと背負った人たちで、モダニズムとは別格でした。むしろ芸大の中では吉村先生的な、モダニズムの中で気持の良い空間をつくっていく派、その辺りが主流でしたね。吉田先生はどちらかというと非常に特異な存在で、雲の上にいるような方…というイメージが強かった。

古谷 | そうですか。聞くところによると、吉田先生は大学を卒業されてから当然のようにヨーロッパを見聞して歩かれて、その中でヨーロッパの古典建築が、風土にどう根差しているかを実感されたとか…。

堀越 | そうです、それは有名な話です。

古谷 | そこから、逆にわが国の伝統建築は…と思いたれたと言われていたようですが、そういうことだったのでしょうか。

堀越 | そうです。これも有名な話ですが、芸大には吉田先生の卒業設計が残っていて、それは芸術家クラブなんですけど、もう本当にセセッションなんです。当時、指導していらっしゃった大澤三之助先生は「これは、タービンの設計じゃないか」と、だいぶ怒られたというエピソードを読んだことがあります[1]。非常にシンプルで、セセッションの形なんです。彼は、実はオランダのJ.J.P.アウトとかミッセル・デ・クラークにあこがれて、かつセセッションにもあこがれた。それを見にヨーロッパに行ったんですが、ことごとく失望した。セセッション系では、唯一オルブリッヒのダルムシュタットの結婚記念塔、あの辺りは良かったと…。それからイタリアに行きまして、フィレンツェのルネサンスを見るわけですが。そして圧倒的な歴史と地域の伝統と素材によって構築された建築にはとても敵わないと戻って来られて、日本で何かできないかと考えた。私は吉田先生の根は、モダニストだと思っているんです。“モダニストの目で、日本の建築をどう変えようか”と思われた。ですから、吉田先生は“日本建築の延長線上で何かをやって、芸でこなし人”というイメージがあるんですが、私はそうじゃなくて、先生はかなりのモダニストの骨格、芯を持って日本の伝統をヨーロッパに負けないものとして、日本のモダニズムに応用できないかを考えた建築家だと理解しています。

古谷 | なるほどね。まあ、私たちみたいな凡人でも、初めてヨーロッパなどに行った時は圧倒されるころがありますし、失望することもある。そんな中で日本を逆照射されるような気持も何となく分かります。日本にいる時は全く意識しなかったことを意識するようになったり…。それは当時まだお若い吉田先生が感じられたことでもありますね。そして、ちょうど日本建築がタウトとか、そういう人たちによって、もう一度光が当てられたと言いますか、日本建築はモダンな側面もあるのではないかというようなことが、外からの指摘でようやく自覚されてきた。日本人も何となく、そうかなと思いついてきた時期なんですね、きっと。

堀越 | そうですね。その辺が非常に面白くて、いわゆる単純にあこがれた引用ではなくて、日本のモダニズムの精神を持って日本の建築をどうにかしたかった。私はもう一つ自分なりの想像で膨らませたのは、オランダに行った時はJ.J.P.アウトしか彼の記録には出てこないんですね。ただ彼の作品というか、戦前の料亭などの建築を見ますと、かなりデ・ステイルとかリーフトフェルトの影響があるんじゃないかと思うんです。でも、おそらく直接的に影響を受けたことは語りたがらないのではないかと。これは私の個人的な見解です(笑)。例えばライトが日本建築に影響を受けていないと言っているのと同じように、吉田先生もその辺りはちょっと考えているのかなど…。というのは、非常に立体的な面構成の床の間とか、コーナーを開けるとか、吉田先生のアイデアの源泉が、そういうオランダの建築にあるような気がするんですよ。

古谷 | なるほど。秘密の源泉がね。ここでもう少しだけ芸大の話を伺いますと、堀越さんが直接受けてはいらっしゃらなかったとしても、芸大で吉田先生はどういった講義とか、指導をされていたのか、その辺りのことをご存じないですか？

堀越 | 指導面でも幾つか面白いエピソードが伝わってまして、例えば入試の時などは、かなり一生懸命やっていたという話があります。

古谷 | 入試ですか？

堀越 | そう入試。吉田先生は才能がある学生を見つけないことが非常に重要だと思っていて、よく言っていたのは、「建築の設計には氏も育ちも才能もいる」。つまり生まれも育ちも良くないといけないし、才能もなきゃいけない(笑)。皆さんからはちょっと煙たがられていたようです。非常に面白い話がありまして、当時の芸大の入試に吉田先生が考えた、無造作に置いてあるロープの長さを当てさせるという感覚考査問題がありました。プロポーシヨンの感覚とかスケールの感覚は勉強してできることじゃない。それを瞬時に分かるようなカンのような能力がなければ建築はできない。そういうところに結構ポイントを置いていたそうです。これは面白いことだと思うんです。

古谷 | なるほど。それは芸大だからできるようなところもありますが、そういう逸材を発掘するというか、それが大学としての使命だということですね。

堀越 | そうですね。だからやっぱり本当の意味で、ある能力の抜きん出た人が建築をやらなきゃいけない。そういうところを持っていた。吉村先生のように誰でも努力すれば何とか近付ける道…とは違う。吉田先生は「普通じゃいけないぞ」という道を示された。芸大の中では2つに分かれていましたね。

五島美術館の設計を発注敷地の最終決定と同時に…

古谷 | 吉田先生に設計を発注されるわけですが、その経緯をご存じですか。

名児耶 | それがあまり知らないんですよ。

堀越 | 私も吉田先生の著書『饒舌抄』[2]を始めいろいろな資料を読みましたところ、敷地を手に入れるにあたっては、最初は五島さんがこの土地を半分くらいお持ちで、あとの半分は土地係争で得たと書いてありました[1]。その相手が世界救世教の岡田茂吉さんだった。実は吉田先生は、初期の頃、世界救世教の建物を少し設計しておられて、そのうち岡田さんは自分でつくり始めたらしいんです。岡田さんは一時、美術学校に在学していましたので先輩にあたる関係で吉田先生と親交があった。いずれにしても岡田さんが(野々村)仁清の「色絵藤花文茶壺」を手に入れる時に、資金が不足していて、係争中だった隣接していた土地を五島さんに売った…という話らしいです。

名児耶 | そうです。別館の南側は世界救世教の聖地で、そこで岡田さんはひらめきを受け、いろいろ発案したと言われています。そして仁清の壺も亡くなる1週間か2週間前ですかね。「お金が足りない分は、この土地を五島慶太に売って…」と言った。だからMOA美術館に仁清の壺があるんです…。

古谷 | ここの土地を五島さんが買ったからですか…、そうでしたか。

名児耶 | 話を少し戻しますが、私が美術館に入った時に副館長で、後に館長になった西村清の記録によると、1958年の7月、設計者を吉田五十八に依頼することを正式に決定したようです。

古谷 | それは日誌ですか？

名児耶 | いえ、メモですが、これは結構貴重なメモなんです。敷地になりますと、さらに詳しく1958年7月25日と日付が入っています。「五島美術館の用地としてここ1,500坪を最終的に決定した」と。それで設計者も吉田五十八と…。

堀越 | 同時にですか。

名児耶 | そうです。「吉田五十八に依頼する」とそのメモに書いてあります。

古谷 | その時、吉田先生はお歳はお幾つぐらいですか。1894年生まれだから、64歳ぐらいですね。

名児耶 | そうですね、一番良い時期ですね。

古谷 | 境地としてはね。確かに戦前は住宅作品がたくさんあって、少し大きなものをつくり始めたのが戦後ですね。だからやっぱり円熟された境地だったん

[1] 『建築家吉田五十八』砂川幸雄著[晶文社/1991]

[2] 『饒舌抄』吉田五十八著[吉田五十八作品集編集委員会+新建築社編/1980]

ですね。

堀越 | 日本の何が大事かというのが見えてきた時代のようにですね。芸術院会館も五島美術館の直前にやられていますし…。

古谷 | そうかそうか、芸術院ですね。

堀越 | 五島美術館には芸術院会館での経験が、かなり活かしている気がします。

古谷 | なるほどね。そういう円熟の境地にあって、芸術院会館での経験もあるし、最初に感じた日本のモダニズムというか、モダニズムで捉えた日本、そういうものもある程度、完成されつつあった時期ということですよ。

堀越 | そう思います。ですから私の師匠である丹下健三とよく比較していたのですが、丹下先生はどちらかというところ、"モダニズムの建築をいかに日本のポキャブラリーでつくるか"ということでしたが、吉田先生は逆で、"日本の建築をいかにモダニズムのポキャブラリーでつくるか"なんですね…。

古谷 | それは鋭い考察ですね。

堀越 | そういう意味で非常に面白い対比として、私の中ではふたりがいる。日本の戦後の中で、重要なポジションとして捉えているんです。

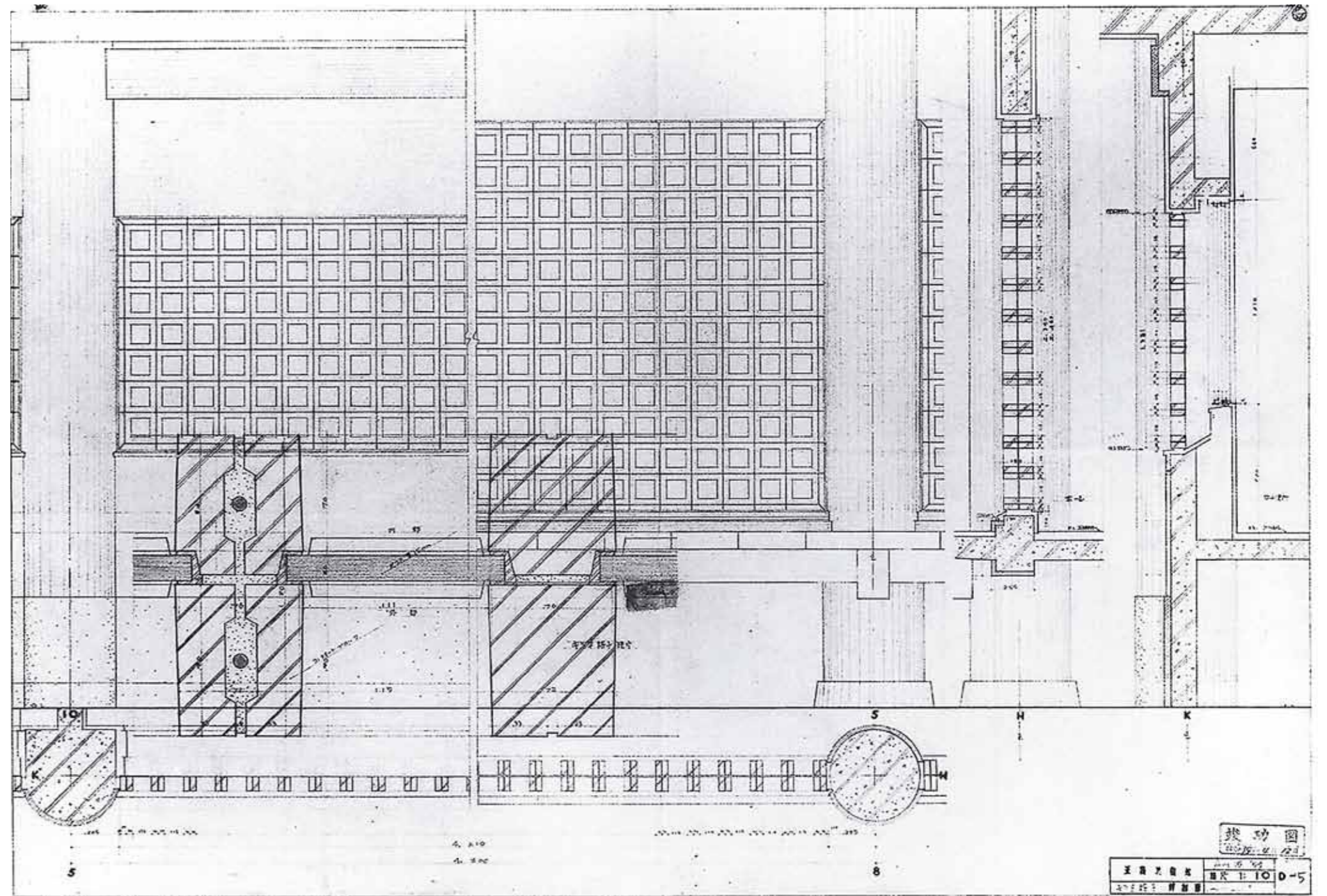
古谷 | 住宅でいろいろ試みられていた新技法みたいなもの、例えば吉田先生のアルミのパイプの下地窓とか…。

堀越 | そう、モダンの素材で日本建築をどのように見直していくか…ということですね。

モダニズムの価値観の中で、 どう位置付けるか

古谷 | 今回の改修の時に、くまなく美術館をご覧になったと思うんですが、堀越さんは吉田五十八設計の五島美術館をどうふうに解釈していらっしゃいますか？

堀越 | この美術館は、ある意味でモダニズム教育を受けた建築家泣かせの建築かもしれないと思うんですよ。私も芸大出身ですが、吉田先生のこういう日本的な建物に対して、モダニズムの価値観の中で、どう位置付けで考えたらいいのか…とっていました。それが私なりに歳を重ねてじっくり見てみますと、少しずつ見えてきたんです。例えば芸大の伝統として、若い頃から京都、奈良などに入って実測をしたりして、古建築に触れる機会を経た後に考えますと、吉田先生がかねてから言っていたことは、仏教建築とは違って、基本は住宅なんです。いわゆる寝殿造りで、平安が基本だということです。輸入ではなく、日本が自らつくったのは平安だと…。それまではある時代ごとに中国から仏教的な技術が入ってきては消えて日本化され、また入って…、奈良時代と鎌倉時代の間の平安が、非常に日本化した。まさにご自分のスタンスと似ていたんですよ。要するに西洋の影響で日本を見直したのと同じように、外国からの影響を消化した上で、日本化した時



代にオリジナルがあると見ている。そういう目で五島美術館を見ますと、先ほど言いました芸術院会館の流れですから、平安が持つ豊かさみたいな、そういう構成美が入っていると思いました。つまり建築と庭園、それから建物へとつながっていく。一気に大きな建築をつくるんじゃなくて、平安の時代は構造的にも無理をしないし、梁間のスパンを飛ばしたりもしない。割と小ぶりの建物がつながりながら連続していく構成が平安で、この美術館もそれが活かしている建築なんですね。そして骨太のしっかりとした柱と庇。特に庇が一番の特長ですよ。

古谷 | そうですね。

堀越 | やっぱ彼のオリジナルは、庇はあるけど屋根を付けない。芸術院会館を設計していた頃の話ですが、吉田先生の語録で有名な話がありまして、「京都御

所の紫宸殿に行つてごらん。最初は屋根が見えるけど、近付いて行くとだんだん屋根が消えていく」、そうおっしゃっていたそうです。ですから「五島美術館では、日本建築を直接的にコピーするのではなく、日本建築の室内と外をつなぐ庇の空間を設計しているんだ。これだけ深い庇はそれまでのRCの建築になかった」と、ご自分でおっしゃっていたそうです。

古谷 | なるほど。

名児耶 | 誰かに聞いた話ですが、その庇だったか、屋根の角度だったかを決める時に、エントランスに一番近いところから、朝の光から夕方の光まで、結局1日中見ていたそうです。

古谷 | 五島美術館には独特の地形がありますから、それとの関係で軒の出とか、張り出している床は水平に持っていくかとか…、それは佇んでおられた感じはよく

分かりますね。

改修したのは2012年 開館50年目を契機に…

古谷 | 改修の話にいきましょう。これは1960年に竣工して、改修されるのが2012年だから、約50年を経たことになりませぬ。

名児耶 | そうです、50年を機に改修しました。

古谷 | きっかけというか、背景は何かありますか？

名児耶 | 空調が一番ダメになっていまして、次は照明でした。とにかく設備系統は基本の部分はいじっていませんでした。それから可能であれば展示室を増やしてほしいという希望もあつたんです。

古谷 | その間、ほとんど大きな改修はされていない。

五島美術館 玄関狐格子詳細図【出典：「吉田五十八建築展」[吉田五十八建築展実行委員会、東京藝術大学美術学部建築科編、財団法人芸術研究振興財団/1993]】
吉田五十八は、日本の良いものが純粹に育つたのは平安時代と考えていた。ここでは、平安建築を代表する京都御所などに見られる都戸(しとみど)の意匠を穴あきコンクリートブロックで「現代化」した。そのブロックと鉄筋、ガラスの納まりの詳細図である。原寸を重要視した吉田の丁寧な納まりであり、50年の時間に耐える設計であることがよく分かる図面である【解説：堀越英嗣】



日本芸術院会館[1958]【出典：「INAX REPORT」No.89,1990.8】



竣工当時の航空写真[所蔵：五島美術館]
東急電鉄の創始者・五島慶太の美術コレクションを収蔵・展示する目的で1960年に開館した。敷地は東京・上野毛。武蔵野の急峻な傾斜地を活かした6,000坪の広大な庭園の高台にあり、豪壮な住宅が建ち並び中に鉄筋コンクリート造の寝殿造りの面影を活かした建築がひっそりと建っている。中央の美術館から下方右手にある住宅が旧五島邸。左端の1棟だけが残され、現在も会長室として使われている

名児耶 | そうです、一部を除いてしていませんでした。
古谷 | ずいぶん我慢強く使われていたと思いますね。堀越さんがこの改修を担当されることになったのは、何かきっかけがあったんですか。
堀越 | 吉田先生と関係のある話としては、旧キャピトル東急ホテルは吉田先生が和風別館をやられているんですね。そこを一時的に改修する話がありまして、その時、私が担当したのは、源氏という建物ですが…。
古谷 | そうでしたか。

堀越 | その時に感じたことは、あそこは水に張り出していて同じように平安の意匠を表現した建築で、吉田五十八の精神を現代に活かそうとした私の仕事を東急電鉄の方に評価していただいたことから、私に話が来たと思います。それに芸大の先輩でありますし、実は吉田先生は中・高とも開成の先輩でもありましたので、個人的にも非常に興味がありました。このお話を頂いて、館内を見せていただいた時、最初はかなり驚きました。なぜかという、過去50年間にいろんなものが蓄積されていたんですね。移築された門、古い灯籠などがたくさんありました。どうも吉田先生の明朗な平安の様子とは違っている。建物の増築も結構されていました。その中で、後ろの方に文庫の建物がぼつんと自立して建っていて、それが今回の増築を妨げているような状態でした。私が改修を担当する以前からかわられた清水建設の設計・プロポーザルの方々、この建物のことも把握されていましたが、運営上、撤去はできない条件となっていたようです。この現状を見た時にこれはまずいと…。私がこのプロジェクトに参加する役割としては、例えば、「これは整理してもいいんじゃないですか、移築しましょう」と、そういう役割かと思ったんですね。
古谷 | なるほど(笑)。

堀越 | まず名児耶さんと「何を守るか」というプリンシプルを話しました。ももとの表情が変わらないこと。要するにずっと50年近く通ってきた人たちの印象が変わらない状態をつくるのが大事だと。だから、

正面に新たに増築することは絶対にやめましよう。そんなことをしたら吉田先生や五島さんのイメージが薄れてきて、徐々に関係なくなっていくのではないかと、そう思いました。

名児耶 | そうですね、関係なくなってしまう。
堀越 | そういう状態でつくられている文庫の建物は、途中で建てたものですし、思いきって「壊しましょう」と申し上げた(笑)。私が言わなきゃたぶん壊せないんですよ、皆さん大事にしていますから。そこで私はむしろ強引に申し上げました。
古谷 | つまり50年間ずっと慣れ親しんできた印象を変えないという時の、その変えない印象を最初におっしゃっていた。軒を介して建築と外部空間が繋がっている状態、そこが大きいですね、要素としては。
名児耶 | ただ照明とかは部分的には直していましたし、玄関まわりも少しだけ手を入れました。
古谷 | なるほど。今回、大改修を思い立てられて、これを事業化するの結構大変だったでしょう。

名児耶 | そうですね。いろんな限界がきていたもので、東急と話して最初は夢みたいな計画もしてもらったんです。新しく展示室にしたところの崖の下を少し削って展示室をつくるとか…。
堀越 | 半地下の案ですね。
古谷 | 展示室を倍くらいにするアイデアですね。まあ、資金的な問題もありましたでしょう…。
名児耶 | 上限がありますからね。いろいろ検討していったら、集会室を展示室に変える方が良いのではないかと…。
古谷 | そうですよ。
名児耶 | それで、堀越さんに相談したわけですよ。吉田先生はもちろんいらっしゃらないので、吉田先生のことを理解されている建築家を…ということで堀越さんが加わって…。実はこの別館は、野村先生というお弟子さんが設計されたんです…。
古谷 | 野村加根夫さん。

名児耶 | そうです。美術館の評議員をしていただいたこともありましたが、今度の改修では、東急から堀越さんを推薦していただいた。最初にお話を伺った時、「吉田先生のこの美術館は、例えば格子があったり、窓があったり、戸があったりしますが、パッと見た時にそれらはあんまりごちゃごちゃした感じではなくて、プロポーショナルがすっきり見える」、そう言われたんです。なるほど、と思いました。それは、五島美術館の展示室で展示すると、ものが1段も2段も良く見える…、そういうことにつながる話かもしれないと思った。他の美術館に行くときとコンセプトが見えたり、壁の筋が見えたり、必要じゃないものが結構、気になるでしょう。

古谷 | なるほどね。
堀越 | 吉田先生は明朗化とよく言います。要するに日本建築は江戸時代にものがすごくごちゃごちゃしちゃった、いろんな技巧に凝って。それをモダニズムの目で見ると、余分なものがいっぱいありまして、必ずしもそこは暮らす人のためになっていない。むしろ

すっきりさせることによって、ぐっと焦点が当たるとか、美しさが見えてくる…。今、名児耶さんが言われたように、吉田先生は美術品がきれいに見るとか、人の気持を明朗化させるために建築があると言っている。例えばプロポーショナルに対する非常にはっきりとした姿勢とか、ものを整理していく姿勢、つまり整理された建築なんです、本来の吉田五十八は。

名児耶 | 美術に対する考え方もそうなんですよ。私、書をやっているんですが、仮名がそうなんです。仮名の散らし書きがありましてね。それは活字みたいに全部同じような調子で書いたら、すっきり見えない。ところが強弱があって、目がいくところとかいかにところろに間をつくって重心のバランスを取ると、同じだけの量を書いてあっても、調和が取れてすっきり見えるんですよ。点画が少なく見えるんです。ですから堀越さんの話を聞いた時、これは自分のやっている仮名の良い作品と一緒に考えた。それこそ平安の美意識の頂点なんです。ムダなものが見えてこない。

景観を変えない… ディテールへのこだわり

堀越 | 慣れ親しんできた景観を変えないという話の続きですが、骨格は変えないから守られますけど、もっと細かいディテール、色彩はもちろんだし、それが経年変化で変わったものを、どの時点に戻すのかで一番もめたのが、実は底の先端の色なんです(笑)。

名児耶 | そうなんですよ。私の記憶では色が変わったような気がしていたんです。
古谷 | 長い年月の間に…ということですか？
名児耶 | それとも途中で1回塗り直したりしてる時があったかもしれない。記憶があいまいなんです。
堀越 | 当時の写真はカラー写真が数点しかなくて、色も非常に不明瞭ですね。
古谷 | 昭和30年代のカラー写真ですからね。
堀越 | 吉田先生のこういう底型の建築は数種類ありまして、この後に出来た作品にローマの日本文化会館があるのですが、それと芸術院会館は軒の先端が小豆色なんです。もう一つの大和文華館は、きれいな薄浅葱色なんです。

古谷 | 最終的にはどういうふうにされたんですか。
堀越 | 時代考証をしまして、はがしてみたら、この薄浅葱色だったんです。
名児耶 | もうそれは納得して。
堀越 | さんさん悩んだんです。CGでも色を変えて、いろいろやってみたんです。

古谷 | 話は飛びますが、例えば玄関ポーチの床とか、そこから入ったエントランスホールの床とか、他にも細かいところいろいろ苦労されたようですね。
名児耶 | そうなんです。エントランスホールの天井の蛍光灯のカバー。あれも前からの計画では変更したいという話が出ていましたが、もとのままが良いと言っていて…。堀越さんも同じ考えでした。

堀越 | そうそう、私も変えては絶対ダメと(笑)。
古谷 | 変えるというのはどういうことですか。全然違うものになりそうだったんですか。
名児耶 | あそこには朽木文様が付いているんですが、プリントのようなもので表面的に再現するのではなく、昔のようにもとの朽木文様の型を取って、一枚ずつ厚みのあるものでつくる。そういう方法でやってほしいと言ったんです。

堀越 | それは何とか出来ましたけど、さらに床の復元も大変でした。よくやっていただいたと思います。美術系の大学生に絵を描いていただいて。
名児耶 | そうそう、手仕事でやっていました。
古谷 | むしろ復元的な修復ですね。
堀越 | そうですね。それから、私がこだわったのは玄関の階段のゴムタイルなんです。吉田先生ならではの“新素材”のオリジナルな利用の仕方なんです。ああいうところを変えちゃうと、きれいにはなりますが、最初のワンステップで何となく違う印象を与えちゃうんです。ですから玄関の外の鉄平石みたいな四半敷きの石と、階段とエントランスホールの床までを連続して修復しているんです。ちょっとだけ欠けているようなところは修復してもらって…。そういうやり方をしました。
古谷 | なるほど。玄関のゴムタイルは半外部に使われていますね。あれはオリジナルだったんでしょ？
堀越 | オリジナルです。ああいう新しい素材を吉田先生は使うわけですよ。普通だったら使いませんか。要するにデコラとかを高級な料亭のバーの天板などに使ったりするんです。現代がつくる新しい素材を…。アルミもそうです。

名児耶 | 下地窓ね。
堀越 | ええ。よく下地窓や簾をアルミでつくるのも、伝統の現代化と言えると思います。
古谷 | 今の部分をもう一度整理しますと、玄関はゴムタイルを保存した。一方、天井の照明カバーの朽木文様はできるだけ昔のパターンをもう一度再現されたということですね。エントランスホールに入ったところは人研ぎですか？
堀越 | 人研ぎです。

古谷 | 人研ぎのこの文様は、何文様とおっしゃいましたか。
堀越 | 松皮菱です。
古谷 | 松皮菱の床のテラゾーですね。
名児耶 | まさに平安の意匠ですよ。朽木文様はオリジナルで吉田先生のデザインなんです。美術館に青焼きが保管してあります。

古谷 | そうでしたか。
名児耶 | まさに平安の意匠ですよ。朽木文様はオリジナルで吉田先生のデザインなんです。美術館に青焼きが保管してあります。

自然光と人工光 展示ケースの照明まで

古谷 | 自然光と人工光の問題を『新建築』に書かれていますね[3]。ずいぶんいろいろ議論したんだけど、結果的には人工光線を選ぶ結論になった。そのために

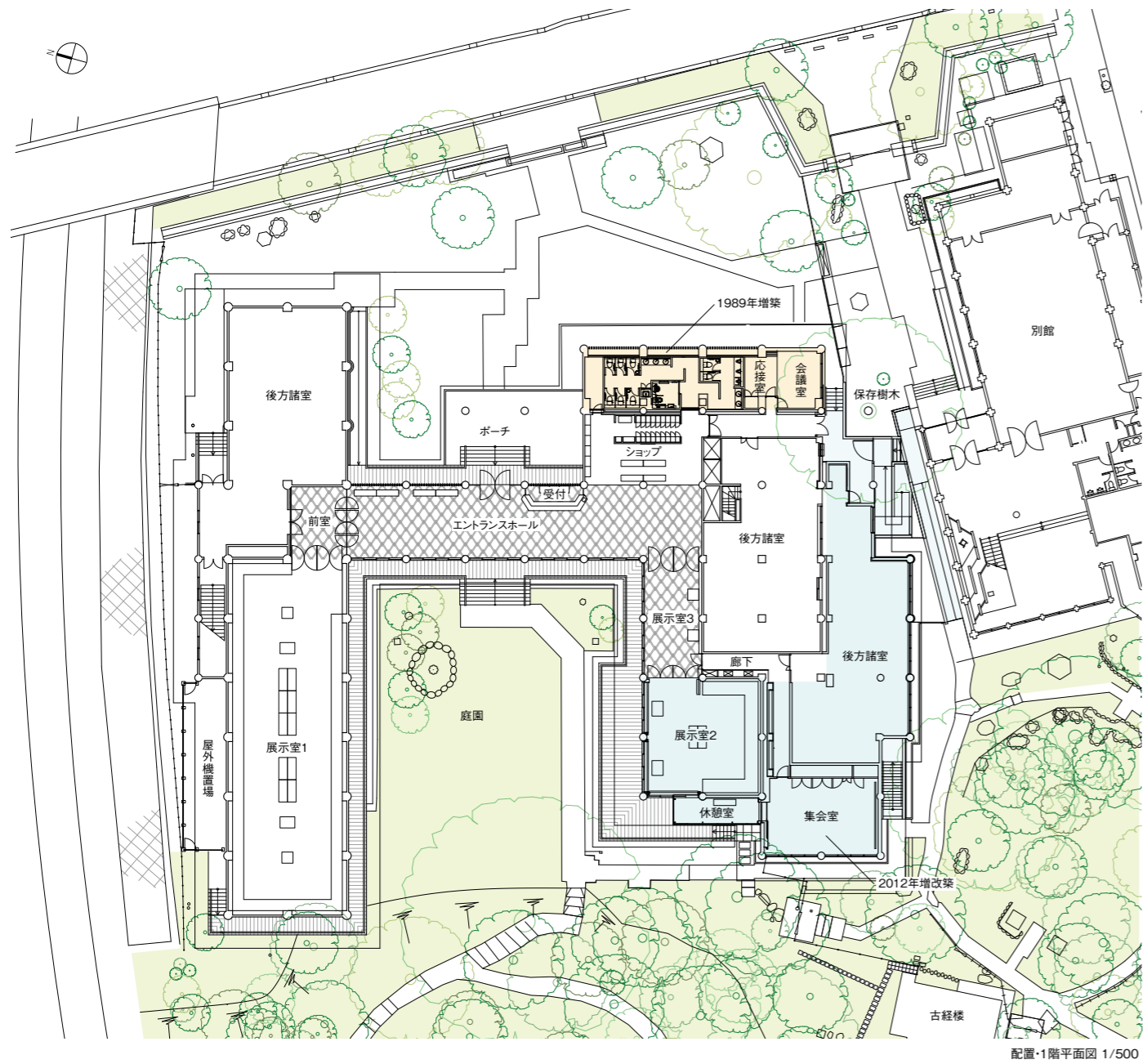


上ー朽木文様が描かれたエントランスホールの照明カバー | 下ー松皮菱が描かれたエントランスホールの床



大和文華館[1960][出典：『INAX REPORT』No.89,1990.8]

[3] 吉田五十八「五島美術館」『新建築』1960.6



五島美術館 配置・1階平面図 [提供：清水建設]
 正面入り口に向かって左側のトイレ、応接室、会議室となっている部分は、前回の増築によって追加された。今回オリジナルのファサードに戻すことも検討したが、必要面積不足のため断念した。展示室2と集会室、その後の部分が今回、増改築した部分である。展示室2は旧集会室を自然光による展示も可能な新しい展示室としている。ガラス張りの休憩室を介してその奥に新しい集会室を設けている。桂離宮の古書院、中書院、新書院のように、増築部分がもともとの景色を妨げない雁行配置の構成とすることで、エントランスホールから増築部分が見えないようになっている【解説：堀越英嗣】

「かくのごとき密閉式の展示室になった」と、まあ少し悔しそうに。

堀越 | そうなんです(笑)。

古谷 | 本当は展示室と言えどもつながりを持たせなかった…ということでしょうね。

堀越 | そうです。吉田先生は美術品の鑑賞、信仰、実用という種類を研究し、照明のかたちを分けた。そういう記録がありまして、光に対してものすごく研究した方なんです。例えば書が下がっているのは、本当は床の間に掛かるわけですから、その当時の部屋を考えて、床の間へ当たる光の様子を彼なりに全部、分析しているんです。そうするといったん、畳へ当たった光が大体10度から35度の範囲で下から反射する。それからロウソクの光も下で、ロウソクの床からの高さを考えるとこのくらいではないとか、結構、詳細に考えてやっていた。本来は自然光で見るのが基本だけれども、文化財の観点からはなかなか厳しかったし、法隆寺の火災もありましたから、照明とか展示のケースを

相当考慮したと思います。これからの話で出てきますけど。

古谷 | なるほどね。やっぱり美術館としては近代的な新しい美術館の黎明期で、そういう葛藤がちょうど出たところでしょうか。

堀越 | そういう気がします。

古谷 | 本来の美術品が置かれていた環境を復元しようという気持ちと、それをきちんとコントロールして火災からも守って人に見せることと、収蔵品を守ることは相反する。葛藤されている気持ちが何となくここに、にじんでいますね(笑)。

堀越 | そうですね。それを後でわれわれがつなぐんです。

古谷 | 先ほど館内を拝見して、名児耶さんがケースの中の照明について、かなり工夫されたお話を伺いました。吉田先生はできるだけ自然光を採り入れたかったという思いがあって、つまり本来の和室で床の間に掛かっている軸を見る時の光線を再現するという話を伺

いましたが、名児耶さんが工夫をされたお話もご披露いただけますか。

名児耶 | はい。先ほどの話とかぶりですが、もともと掛け物は床の間で見せるものですね。ところが日本の美術館は全部、壁で見せている。これには私はいまだに違和感があって、もっと工夫の余地があるのではと思っています。それと下から照明を当てていて、しかも蛍光灯でやっていた。「紫式部日記絵巻展」を開館25周年記念展として行った前後でしたが、照明を直そうという話があった。その時は蛍光灯が上の方と下の方に2列に並んでいたんです。いわゆる昼白色という青みがかった色です。今でもそういう美術館があります。実はガラス面から壁面までの奥行きがありません。つまり上からの光だけでいくと、どう見ても…。

堀越 | 下からの光が足りない。

名児耶 | そうです、上の方が明るくて下が暗いんです。それで吉田先生は下にも付けたんだと思うんです。ところが上下で付けますと、いかにもつくったような光になる。それに上の2列の蛍光灯は同じタイプを使っていた。ある時、気が付いてメーカーに聞いてみたら、電球色もできると言うんです。

古谷 | もう少し温かい色という意味ですか？

名児耶 | そうです、電球色と両方あると。しかも両方も美術館仕様があって紫外線も出ない。それを並行して使えないか。光と光がケンカすることはないか。なぜかというところ他の美術館で見ますと、蛍光灯と電球色を同時に使っている美術館が結構ありまして、光がまだらなんです。ここは赤く見えるけど、こちらは白っぽいとか。

堀越 | 変ですね、それね。

名児耶 | それが気に入らなくてね。

古谷 | 今のお話はこういう話ですか？ 軸物とかそういうのは巻きますから、どうしてもシワが入る。そこを上から照明が当たるとシワが目立ちますから、下からも光が欲しい。ところが下付きの照明を入れますと、結局、作業スペースがなくなってやりにくいということですね。

名児耶 | そうです。でも、どうしても下からの照明が欲しい。入れようかと思っていたところに、カメラマンが撮影の時にレフ板を使っているのを思い出したんです。女優さんの肌を美しく見せるために使うアレ…です。周りから反対も出しましたが、とにかくやってみようというのが発端だった。やってみたらレフ板は目立たず、角度もうまくいく。ほんのちょっと、下3分の1くらい当てれば良くて、測ってみたら光がほぼ均等に当たるんですよ。

古谷 | なるほど、そうですね。

名児耶 | そうしますと電気代は少ないし、レフ板は自由に使えます。

堀越 | シワも消えますものね。

古谷 | 銀のレフ板を入れて、下から柔らかく反射させる光でシワが隠れるようになった。女優さんと一緒にすごすね。奇しくもそれは、いわゆる床の間が持っていた

原理なんですね。

堀越 | そうです。そこが大事で、それこそが創造的精神なんです。ものとしてシワなくきれいに見せることはもちろん大事ですが、吉田先生が考えたのは、その当時の人の気持ちになって、いかにアートを鑑賞できるかなんです。そして、その気持ちというのは、当時の光の様子に近いものを再現して、昔はこういうかたちでそれを見ていたということを優先して考えると、びたっと一致するわけですね。

古谷 | お話を伺って面白かったのは、そういう本質的に望ましい空間をつくり上げるためにいろんな技術が必要ですが、その技術というのは大それた技術ではなくて、今のように少し工夫して良く見せようとする気持ちみたいなものがそれを生み出すんだと思います。すごく感銘を受けました。

名児耶 | そうですか。私もこの仕事をしていて、あれはヒットだったと思いました。電球色と蛍光灯と並行すればいいじゃないか。もう一つ面白かったのは、牧谿の展覧会の展示替えの時ですが、ちょっとライトを補助で付けていたんです。そうしたら水墨画は光の当て方で全く違う作品みたいになるんです。

堀越 | それ見てみたいですね。

古谷 | そう、それは見たい。

名児耶 | 美術館の使命は作品を良く見せることです。しかし、ある一定の光でしか見せられない。やっぱり床の間で牧谿の瀟湘八景を見たとしたら、素晴らしいはず。朝と昼と夜で表情が違いますから。

堀越 | なるほどなるほど。

名児耶 | 画面が変わってくる。今まで見えなかったものがバツと浮かんできたり…、ともかく牧谿展の時はすごく勉強になりました。また、五島美術館では大徳寺の有名な「観音猿鶴」の三幅対を正面に掛けたんです。その時は、展示室の入り口から見てもすごい迫力があつた。少し後に、同じ三幅対が他の美術館で展示されたんです。ところがあまり良く見えなかったんですよ。その時「吉田五十八に感謝だ」と思いましたね。遠くから見ても迫力が出るわけです。やっぱり、ものを展示してみると分かります。

古谷 | それもやっぱりさっきおっしゃった、「ここで展示すると、1段か2段、格が上がって見える」とおっしゃったことですね。

名児耶 | そうですね。もちろんテクニックとして、ごちゃごちゃしないとか、その辺の間とかも考えなきゃいけないけど、もともとの建築が、そういう根本的な良さを持っているのではないかと思いました。

堀越 | 吉田先生は、前にも言いましたが、最初は日本に帰ってきて住宅系から始めているんですね。芸大出身の建築家の方々の多くはそうですが、吉村先生はもちろん住宅中心だけど、吉田先生もまさに住宅で、「住まいの極致」ということをよく語っている。要するに、何が良いか分からないけど、また行ってみたいくなるような居心地が良い住宅とか、使い方とか、人の気持ちのために建築があるということをおっしゃっている方



前面道路から本館を見る【所蔵：五島美術館】竣工時の美術館のアプローチ部分で、正面がエントランス、右手は収蔵庫。本館のイメージを受け、前面道路に沿って築地塀を巡らせ、住宅街に独特の雰囲気漂わせている。樹木の配置や状況を含め、美術館の景観は50年を経た現在とほとんど変わっていない

なんです。ですから美術館と言えども、美術品のためだけではなく、美術品とそれを見る人間が呼応する、空気全体を設計したのが吉田五十八なんです。だから“住宅作家”が美術館を設計している。

名児耶 | 私は竣工して12年目ぐらいに美術館に入ったわけです。それから40年以上経て感じることは、建物に入った時のイメージがあまり変わっていない。それと繰り返しになりますが、ずっと展示して思うことは、五島美術館で展示すると、他で展示した時よりも作品が良く見える。さっきから言っていますが、格が2つくらい上がったように見えることですね。

古谷 | それは空間が持っている何かが、見る人に働く作用がある。

名児耶 | おっしゃるとおりです。同じ頃に来た他の美術館に行っても、30年くらいで建て替えるとか、行ってみたら、何となく少しみすぼらしいとか、要するに良い環境に置かれていない印象を受けるんです。ところが五島美術館だけはそういう感じがしない。自分のところだからかもしれませんが…。でも、時々ふつと新鮮な目で見ると、やっぱりものが良く見えるな…と思いますね。

堀越 | 全体の面積のプロポーションからいくと、ある意味で展示室がすごく小さいんですよ。

名児耶 | 小さいですね(笑)。

古谷 | 割合がね…。確かにそうですね。

堀越 | しかも玄関のゆったりとした構えと庭、玄関から見た更なる遠くの景色までを含めて、ものすごく豊かな広がりの中に小さな展示室がぼつんとある。これが

疲れぬ美術館なんです。

集会室を改修… 自然光の入る展示室へ

古谷 | 話は展示室に戻りますが、左手奥に大きなガラスの開口があった集会室を展示室に改修なさったわけですね。

名児耶 | そうです。そこはもう堀越さんと設計の皆さんにお願いして…(笑)。

古谷 | 堀越さんは、ここでは吉田先生がやりたかった自然光の入る展示室に挑戦されたわけですね。

堀越 | 古谷さんが読み取った吉田先生の文章でいきますと、おそらくやりたかったし、大和文華館ではそれをやっている。ですから今回増築するのであれば、そういう質を持った部屋をつくりたいと…。もちろん文化財が入りますから、当然、閉じて使うこともできる。スクリーンの構成によって完全な暗転もできるし、自然光も採れるということですね。それとやはり学芸員の方々が、展示するものによって創造性を働かせることはとても大事なことで、次の50年に向けて頑張ってもらうためには、ここをどう工夫してつくるか。そういう場所にしたいと思いました。さらに吉田先生の遺志を別のかたちで継げるんじゃないか。その時に当初は使っていなかった障子を導入しよう、それも大判の障子を…。先ほどお話しした旧キャピトル東急ホテルの源氏にも大判の障子が非常にうまく使われていて、庭と室内の関係を柔らかくつなぐ役割をしているんです。

この時期、吉田先生はアメリカの大使館とか外務省飯倉公館、そういうところにも大判の障子を入れていましたから、障子もあり得るだろう。ここから先はわれわれの創作で導入しました。新しく増築した集会室も小さいですが、庭に面した開口部一面を障子にしています。午後から夕方の光によって木々の姿や枝が障子に映し出されることで、豊かな自然の移ろいを感じるように設計しています。また、旧集会室のアルミの格天井のイメージを継承したシルバーのアルミルーバーを天井と壁に用いています。

古谷 | 結局、新しい展示室は3重の層、つまりガラスと障子と、それから遮光も兼ねたシャッターがある。それを展示によって使い分けている。今日はたまたまシャッターを下ろして遮光している状態でしたけど、光が差し込む方が良い場合はそれを上げる。

名児耶 | やきものの展示なんかでは今もやっていきます。自然光が入るとなかなか良いですよ。時間によって見え方が変わりますからね。

堀越 | それから吉田先生はメカニカルなことに非常に長けていたんです。有名な話では、実は舞台や劇場が得意で、本人も常磐津をやっていたらしいんですが、ああいう舞台の昇降機構とか回り舞台は、かなり早い時期からやっているんです。

古谷 | からくりがお好きなんだ。

堀越 | お好きですね。料亭、例えばつる家でも、突然、床がガンと回転して舞台になったり、ものすごいことをなさっている。新喜楽でも踊りの舞台に急転させるために床に照明機構が隠されていたり、そういうことがすごくお得意でした(笑)。

古谷 | 面白いですね。

堀越 | 私も金田中でそれをやりました。柱がバツとあって、そこに障子が全部収納されて、閉めると障子は跡形もなくなる。電気機構も含めて、吉田先生はそういうことに非常に長けていた。明朗化じゃないですが、空調の吹き出し口なんかも早い時期から和風建築に導入して、それを金属の地下窓の意匠でリターンをつくったり、格子天井に空調スリットを入れたり、もうお得意でした。ですから、吉田先生はモダニズムの中で機能性と意匠性を技術的にも融合させた方なんです。そういう意識をお持ちで、技術力を最大限に使っている。

古谷 | それはむしろマッチしている。

堀越 | そうです、マッチしている。

名児耶 | 違和感がないですもんね。

古谷 | あの集会室は何人くらい入るんですか。

名児耶 | 100から120くらい。

古谷 | その配列が45度使いというところが、また良いですね。

堀越 | 石の張り方でも四半敷きして45度に張ったりしますが、そういう角度を付けるやり方は、日本の建築でも粋な扱いとしてよくやりますね、良いですよ。

古谷 | 集会室がなくなったのは、ちょっともったいな

かったです。一般にはイベントのある時しか入れないにしても、格天井とかガラスの大きな開口は馴染みのあるものになっていましたから。そこは展示室を増やすという命題上、やむを得ず、そうされたんですね。

堀越 | そうです、もったいなかった。

古谷 | とところで、改修後にご覧になった方々の評判はいかがでしたか。これまでの50年間ずっと慣れ親しんできたものでしたから。

名児耶 | 皆さんはそんな大きく変わったとは思っていないみたいな感じですよ。

古谷 | じゃあ全く違和感がないと…(笑)。

名児耶 | そんな感じがします。

堀越 | でもそこが狙いでしたよね。今回、改修するにあたっては…。

名児耶 | 最初からそのつもりでしたし、そうしてほしかったわけです。

古谷 | 狙いどおりだったんですね。

継承と展開 今後の50年に向けて

堀越 | 初期の建物は平安ですから、いちばん大事なのは中庭ですね。すっきりとした中庭と建築の関係、そしてその奥に広がる広大な庭。そういう長年親しまれてきた美しい風景に新しい建築が顔を出してはまずいんですから、増築部分の配置検討には特に気を使いました。

古谷 | それで後ろ側。

堀越 | ええ、雁行させた。桂離宮のように雁行させながら逃げることによって、お互いが邪魔をしない状況をつくれると思ったんです…。

古谷 | でも、もう相当せめぎ合っているから、かなり制約がある中でやられたわけですよね。

堀越 | かなりの制約でしたね(笑)。

名児耶 | 逆に後ろの茶室まわりは整理されましたから、すっきりしました。

堀越 | そうですね。お茶室の関係で何かというんなものが残っていましたので。

古谷 | なるほどなるほど。庭の灯籠も増えたものは外されたんですか？

名児耶 | いや、それは減らせませんでした。いろんなグループから贈られたものですから。移動はさせてもらいましたが…。

古谷 | さっき堀越さんが整理とおっしゃったけど、ここは整理して、もとの空間性をもう一度、純粋なものに戻していく作業と、それから現代化する作業と、それが兼ね合われていることなんですかね。

堀越 | そうですね。それが目的です。だから継承と展開ということですね。

古谷 | 堀越さんはこの美術館が竣工した頃に、美術館について雑誌にエッセイを書かれていましたね[4]。

名児耶 | そうそう、それは私がお願したんです。前から美術館・博物館施設の建物についてはいろんな

[4] 堀越英嗣「岐路に立つ現代建築と美術館」『博物館研究』2013.2



五島美術館で談笑をする名児耶氏(中)、堀越氏(右)と古谷氏(左)

不満がありまして、機能重視で学芸員だけが使いやすい施設になったりしている。それも良いですが、美術館はやっぱりものが良く見えないとダメだと思うんです。建築家のエゴで、後に欠点が出て簡単には直せないとか、緊急性があってもすぐに動かせないとかもおかしいと思います…。

古谷 | 昔の大先生はそうだったかもしれないですが、今時そういう建築家はだいたいなくなっていると思いますが… (笑)。

堀越 | そうですよ(笑)。

名児耶 | でも、まだ残っていますよ。自分のお金でつくったのであれば、あしろこうしろと言えるかもしれないですが、例えば行政のお金でつくった場合は、設計者の権利もあるかもしれませんが、自分のお金でつくっているわけではないのに、何で自分の作品にするのか…、おかしいと思うんですよ。

古谷 | なるほどなるほど(笑)。

堀越 | 厳しいですね(笑)。

名児耶 | 一般人として考えるとそう思いませんか？

古谷 | でも、今日のお話を通して聞きますと、非常によく分かる感じがします。例えば、そこを訪れた人は展示品、収蔵品だけではなくて、それらが置かれている空間に身を置いて、居心地が良くて見やすくて、しかも疲れないと言いますか…。

堀越 | そうです、疲れない(笑)。

古谷 | 展示品と対峙しているだけじゃなくて、簡単に言うと、その時間をそこで過ごすという体験全体が心地良くなるように…。五島美術館もそういうことに配慮したいということですよ。

名児耶 | 美術館に来るのは、作品を一生懸命見たいという研究者もいれば、自分の普段生活しているところとは違う異空間に行って、その時間を楽しみたい人もいるわけですね。それをかなえてあげるような環境とか設備でなければいけないと思いますね。

古谷 | それを第一に考えているというのは、吉田先生が最初にここを一種の住居空間というか、広い意味での居住で、そこに滞在するための空間だと考えられたことにもつながっていくわけですよ。

堀越 | そうです。ですから、五島美術館は本当に適切なスケールなんですよ。大きな展示室でドーンと一遍に見せるのではなくて、むしろ小さいことが幸いでいるんですね。非常に小さい企画をしょっちゅうやる。大変だとは思いますが、企画が変わるのを訪ねる楽しみがある。だからこの美術館はリピーターがものすごく多いんです。リピートするということは何回来ても飽きない空間じゃなきゃいけない。逆に、来るたびに強い刺激を受けすぎると、これもなかなかつらいでしょう。それが本当に自然体で入って、自然に時間を過ごして、疲れずにちょうど良い具合に終わって帰っていく。そういうところがまさに住宅というか、その延長線上に建築がある。それが寝殿造りでもあるし、吉田五十八の原点、住宅から始めた建築家を持っている質ではないか。そういう感じがします。

古谷 | そうですね。それと先ほどのエッセイ[4]の中で、居心地の良い、歩いて疲れない美術館の例として、ルイジアナ美術館とかカステルヴェッキオ美術館を挙げられましたが、五島美術館にはどう活かされたか。

堀越 | もともと持っている性質が非常に似ている。入ってみると、やっぱり住宅のような美術館なんです。そして、常に庭と一体化している。

古谷 | そうですね、似ていますね。

堀越 | いつでもざっと外に出られる。この美術館もいつでも中庭に出られます。そういうところは、まさにルイジアナだし、カステルヴェッキオで言うなら展示するレベルが建築と一体化していますよね。

古谷 | 渾然一体となっています。

堀越 | それはスカルバのすごいところですが、まさに吉田五十八も本当に同じだと思っているんです。館内に入った時、ある質感で見られる。一見シンプルですけど、柱のザラっとした質感やツルっとした床のテラゾー、柱・梁のうるみの色。光を和らげる蔀戸の格子ブロックだったり、少し反射する床だったり、そういう質感の組み合わせの心地良さに、カステルヴェッキオ的なものを感じますね。

建築も展示物の一部

會津八一博物館も五島美術館も…

古谷 | 早稲田大学の話になりますが、今井兼次先生が1925年につくられた図書館を會津八一博物館に改修するデザインは私がしました。あそこには主要な展示が3つあって、會津先生の集められた東洋美術と日本の近代絵画、それから考古学。これが3大展示物なんですけど、建築そのものも展示物みたいなものでしたので、その空間性を損なわないでいただきたいと申し上げて、上にあったカマボコ型の大閲覧室はそのまま保存して、逆に床に置かれたケースだけで構成する展示空間をつくったんです。その時に感じたのが、やっぱり建築も展示物の一部であるし、それと一体になって人々が鑑賞し歩いて下さる空間にしたい。そういう

意味で五島美術館の改修はひととき興味深く思っていました。改修後、初めて拝見しましたが、非常に良かった。

名児耶 | われわれ古美術をやっている人間からすると、ある意味で建築が愛おしくなると言いますか、傷が付いてもやっぱり大事じゃないかと思えますね。今、まわりを見てみますと、うちは50年で改修しましたが、だいたい20年、30年で改修ですと言っている美術館が多いんですよ。改めて考えると吉田五十八は、やっぱりすごいと思いました(笑)。“ちゃんとしたもの”をつくってくれたと思うんですよ。

古谷 | それと後輩と言いますか、次の世代の人をエンカレッジするというか、鼓舞するところがありますね、さっきの素材の使い方とか…。そういうことがないと、守的に古いものを守る方向だけで改修したら、こういう思いきったことできないじゃないですか。だけど、ももとの原設計に新しいものを取り入れて、その中で何とか調和させていくというチャレンジが入っているから、現代のチャレンジをしてみようと思う。応援されているような気がしますよね。

堀越 | そうですね。そういう意味では、少し第三者的な立場ですけど、私が担当させていただいたのは、そういう使命かなという気はしました。本当の価値をもう一回見直すと言いますか、客観的に見られますからね。本当に今だからこそ気付くところもあると思いましたし、残っていて本当に良かったと思ったところもあります。特に、日本の近代建築は失われつつあります。吉田先生の建築は、本当にこの質が保たれている建築であるし、こういうものが日本の戦後の時期に出来ていたことは、ものすごく誇りだと思うんです。それがなくなってしまうと誰も体験できない。こういうかたちで継続できたことは、大きな資産です。

名児耶 | 今、本館とお茶室とを併せて世田谷区と協力して国の登録文化財にしようかと…。世田谷区の財産でもありますし、もう50年以上たっていますからね。

古谷 | 良い建物があるということはすごく大事ですが、ただあるということ以上にそれが本来の良さをそこから感じ取れる状態であってもらわないといけない。そう思いますね。本日は貴重なお話をありがとうございました。

[収録：2015年11月26日]

[取材協力]公益財団法人五島美術館／東京急行電鉄／清水建設

なごや・あきら——公益財団法人五島美術館常務理事・副館長・学芸部長／1949年生まれ。1972年、東京教育大学教育学部芸術学科専攻卒業。同年、財団法人大東急記念文庫。1974年、公益財団法人五島美術館に異動。主な著書：『書に心よせる(美術館へ行こうシリーズ)』[新潮社／1998]、『日本書道史年表』[編著、二玄社／1999]、『書の見方—日本の美と心を読む』[角川学芸出版(角川選書419)／2008]、『決定版 日本書道史』[監修、芸術新聞社／2009]など。

ほりこし・ひでつぐ——建築家・芝浦工業大学教授／1953年生まれ。1976年、東京藝術大学美術学部建築科卒業。1978年、同大学大学院修士課程修了。1978-86年、丹下健三・都市・建築設計研究所、1986-2005年、アーキテクトファイブ設立・共同主宰。2001-04年、鳥取環境大学教授。2005年、堀越英嗣 ARCHITECT 5 設立・代表。2004年より現職。主な作品：小川美術館[1987]、LINK [1988]、世田谷ビジネススクエア[1993]、FIVE [1996]、SME白金台オフィス[1998]、鳥取県立フラワーパーク[1998]、ブリッジ渋谷21 [2000]、セルリアンタワー金田中[2001]、IRONY SPACE [2003]、モエレ沼公園 ガラスのピラミッド[2003]、モエレ沼公園 [2005]、新潟駅南口駅舎接続施設および南口広場 [2009] (以上、アーキテクトファイブ)、芝浦工業大学大宮キャンパス 新2号館 [2011]、正願寺 [2013] など。

ふるや・のぶあき——建築家・早稲田大学教授／1955年生まれ。1978年、早稲田大学卒業。1980年、同大学大学院博士前期課程修了。1986年から1年間、文化庁芸術家在外研修員としてマリオ・ポッタ事務所(スイス)に在籍。近畿大学助教授を経て、1994年、早稲田大学助教授、NASCA設立。1997年より現職。主な作品：アンパンマンミュージアム[1996]、詩とメルヘン絵本館[1998]、早稲田大学會津八一記念博物館[1998]、ZIG HOUSE/ZAG HOUSE [2001]、近藤内科病院[2002]、神流町中里合同庁舎[2003]、茅野市民館[2005]、高崎市立桜山小学校[2009]、小布施町立図書館「まちとよテラソ」[2009]、早稲田大学理工カフェ[2009]、鶯庵[2009]、T博士の家 [2010]、実践学園自由学習館[2011]、熊本市医師会館[2011]、中河原保育園[2012]、ルビシア滋賀工場[2012]など。

鼎談後記——古谷誠章 戦後日本の芸術文化の復興、 モダニズムのポキャブラリーでつくる新たな日本の建築

これまでこの鼎談に取り上げたプロジェクトは、戦後の日本近代が築かれる過程において、目覚ましく躍進した科学がその原動力となり、日本が技術立国を果たすその時代の折節に立ち現れたものたちであった。しかし、今回の五島美術館は技術文明と経済成長が一層進展するかわらで、同時に再び取り戻されねばならなかったわが国の芸術文化の礎を築くものだったと言える。戦前から鉄道事業を展開する東急の創始者・五島慶太が、経済界の交流の中から書画骨董の蒐集の世界に足を踏み入れることとなる。幼い頃から仏心に触れていたこともあり、初めは經典などを買い入れて、次第に絵画にも対象が広がったという。誰も知らぬ者のない「源氏物語絵巻」は、この美術館を開設するにあたって買入れたものだそうだ。

芸術文化の館の設計を託されたのが、吉田五十八。すでに芸術院会館を設計し、東京芸大の設計教育の要であった。以来の経緯はつまびらかではないが、日本の芸術文化の再興にあたってはまさに当を得た人選であったと感じる。近年の改修を担当した堀越さんが「丹下健三がモダニズム建築を日本のポキャブラリーでつくったのに対し、吉田五十八は日本建築をモダニズムのポキャブラリーでつくった」と考察するのが印象的で、説得力がある。吉田が手掛けた外務省飯倉公館から料亭に至る、種類の異なるさまざまな建築に通底する設計の姿勢が見えてくる。アルミやデコラやリリウムなどの工業的な建築素材も、その中で日本の建築を構成する一部となっている。

現在、貴重な収蔵品と共にこの館を預かる名児耶さんも、建設時の直接のかかわりはなかったが、建築の随所に込められた細やかな吉田イズムに通曉されていて、改修時には展示室の計画やケース内の照明などに至るまで、隅々に創意工夫を巡らしている。

建築というものは、つくづく記憶装置であると思う。こうして建ち続けていることによって、今は直接に会うことのできない故人の意思や、考え方に接することができる。展示品だけでなく、その器である美術館の建築、周囲の外部空間までを含めて、館そのものが今やなくてはならないものとなっている。

鍛造作家・藤田良裕さんの巻

Yoshihiro Fujita

中村好文：文とイラスト
Yoshifumi Nakamura



♪かじ屋は かちかち かっちな♪

子供のころは、よく歌を唄って遊んでいました。

貧しい漁師町の子供にとって(とりわけ私にとって)は、歌を唄うことが主要な遊びのひとつだったのです。学校で教わる唱歌も唄いましたが、私はおもに歌謡曲を好んで唄っていました。

ところが、そうやって唄いながら「これはいったいどういう意味なんだろう…?」と首を傾げる歌詞にたびたび出くわしました。歌謡曲は大人の歌なので、子供に理解できない歌詞があっても不思議はありませんが、子供向けの童謡にも理解できない歌詞がたくさんありました。そのうちのひとつが、「♪よい子が住んでるよい町は…」で始まる「歌の町」という童謡で、「♪かじ屋は かちかち かっちな♪」の「かじ屋」です。私が生まれ育った海辺の田舎町には「かじ屋」という職業はなかったの、これが何のことだかさっぱり分かりませんでした。

やっと「かじ屋」らしい「かじ屋」に巡り会えたのは二十代も後半

になってからで、場所は韓国のソウル郊外にある「民俗村」でした。李朝時代を再現したこの民俗村の中には当時の「かじ屋」も再現されていて、手動式の鞴ふいごでコークスを熾し、鉄を熱して、叩いて鉄製品を作って見せてくれていたのです。私は実演していた鍛冶職人に李朝時代に行商の飴売りが客寄せの道具ヨッカウイ(豆腐屋のラッパと同様の商売道具です)として使っていたという飴屋鉄をその場で注文し、目の前で作ってもらって購入しました。

鉄という素材は熱することで飴細工のように加工できることは知っていましたが、実際にその仕事を間近に見学すると大いに心そそられ、ちょっと自分でもやってみたくくなりました。

鍛造作家への道のり

私の場合は鉄を熱して叩く鍛鉄の仕事を見ていて「やってみたくなった」のですが、この頁で紹介するのは鍛鉄で製作された現物を目のあたりにして「やってみたくなった」と語る鍛造作家の



上一螺旋階段を上った所から食堂と居間を見おろす。テーブルには奥さん手作りの豪華なおやつと白ワイン(中村用です)が並べられています | 下一居間から食堂と台所方向を見る。左手の煙突付きの黒いかたまりは奥さんの料理の手助けをするキッチンストーヴ

藤田良裕さんです。

鍛造は造形的な仕事ですから、藤田さんはたぶん美術大学の彫刻科あたりの出身ではないかと私は睨んでいましたが、予想は見事に外れました。意外なことに藤田さんは関西にある大学の文芸学科の出身だそうです。「では、なんでまた、鍛造家に?」と、私がたたみかけるように訊ねますと、「建築設計事務所で働いていた嫁が(奥さんのことです)ガウディが好きで、その嫁と一緒にスペインに出掛けたとき、ガウディのカサ・ミラやグエル邸などで鍛鉄の素晴らしさに魅せられ“こんな仕事がしたい”と思って…」と、鍛鉄との出会いを話してくれました。もともと大学を卒業したら「頭を使う仕事ではなく、体を使って働く仕事があった」とのことですから鍛鉄との出会いは「渡りに舟」のタイミングだったのかも知れません。このあたりの経緯をうかがっていると、藤田さんが鍛造家になった背後に「嫁が…」と話す奥さんの、内助の功と、暗黙の誘導(操縦?)が見え隠れするような気がします。

あどがわ 安曇川への道のり

藤田さんはガウディ作品に感動して帰国してから、雑誌で見かけた著名な鍛造作家に弟子入りし、そこで5年間、鉄格子、フェンス、門扉などの製作に従事。その仕事をしているうちに、やはり本場の鍛冶屋の技術を学びたいという気持ちが募り、ヨーロッパに渡ります。そして、オランダ、オーストリア、チェコスロバキア、ドイツなどヨーロッパ各地の鍛鉄工房で1年半にわたって武者修行(?)したうえで、2006年に独立…というのが私が藤田さんから聞いた経歴です。

藤田さんが独立して開いた鍛鉄工房の屋号は「美術鍛造・ふじたん」といいます。

「美術鍛造」という画数の多い漢字と「ふじたん」というほんわかしたひらがなが並ぶところに妙味がありますが、じつは、このひらがなの「ほんわか感」が藤田さんの雰囲気とピッタリ重なりあうのです。

藤田さんは独立後の数年間は大阪の実家の近所のガレージを借りて製作していたそうですが、手狭になったことと家賃が高かったので、住まいと仕事をより良い場所に移転すべく何年もかけて数多くの候補物件を見て回りました。そして、ようやく琵琶湖西北の安曇川に辿り着いたとのこと。湖西線の安曇川駅



鑪(ふいご)でコークスを焼し、鉄棒を熱する藤田さんと火元を覗き込む私

から車で10分ほどの位置にあるこの土地と建物は、もとは工務店を営む大工さんの住まいと作業場だったそうですが、経営がうまくいかず手放した物件だそうです。値段も安かったとのこと(参考までにその金額を教えてくださいましたが「えっ?」と耳を疑うほど破格の値段でした)。

藤田夫妻はこの場所を手に入れてから2ヶ月後に、たまたま訪れた高松の「まちのシューレ963」というお店で、以前から雑誌などで見かけていて、住まいに対する考え方や作風に共感を抱いていた建築家のAさんにバッタリ出会います。そして「千載一遇のチャンス!」とばかり、その場で自己紹介したうえで、購入したての建物の改修を依頼し、即座に快諾を得たのだそうです。出会ったとんに依頼するほうもするほうですが、初対面で、どんな人たちか?、どんな場所か?、どんな仕事か?、…など、詳しく聞きもせずに引き受けてしまう建築家もいるんですね(そういう私も、じつはそのタイプなのですが)。

こうして藤田家の改修計画がスタートしました。

「すべておまかせします!」

手に入れた安曇川の土地は320坪ほどありました。また、もともとそこに建っていた建物も延べ床面積130坪を越える大きなものでした。そのほかに30坪ほどの大工さんの作業場と、工務店の事務所に使っていたらしい6坪ほどの建物が付いていました。

ももとの持ち主が大工さんですから普請はお手のものだったので、その広い住宅をさらに広げる増築工事を始めたところで工務店はあえなく倒産し、その結果、外壁と屋根だけのがらみだけの建物が残されました。

現地を下見に来たAさんは既存の住宅部分には手を付けずに「このがらみだけの部分とそれに付随する部分だけを改修しましょう」と藤田さんに提案しました。改修費に限られているので、手を付ける面積を最小限にして工事費を抑えようという作戦です。家族の生活の中心になる居間・食堂と、料理上手の奥さんが愉しく料理のできる台所になれば「それで充分ではないか」というのがAさんの判断でした。もとより藤田さん夫妻にも異論はありません…というより異論以前に「予算がなかった」というのが本当のところではないかと拝察します。藤田さん夫妻は、これこれしかじかの金額で「すべておまかせします!」とAさんに託しました。

すべてをまかされた建築家は底力を発揮するものです(私もそのタイプなので断言します)。下見のとき、Aさんは家の中央部にある採光的にも通風的にもあまり効果のなさそうな薄暗い光庭を眺めながら「ここをなんとかしなきゃ…」と呟いたそうですが、基本設計案ができ上がってみると、その陰気な場所が天窓付きの開放的な階段室になっていて、そこに鉄骨の螺旋階段がシンボリックに据えられていました。そしてその螺旋階段を上がった2階

には、子供たちが幼いあいだは家族全員で雑魚寝のできたたみ敷きの寝室になっていました。また、この2階には居間と食堂の様子が伺える覗き窓がふたつ開けられていました。この窓に居間と食堂の気配を寝室に伝える役割もさせよう…とAさんは考えたのだと思います。

この階段室にはもうひとつ愉快的エピソードがあります。

Aさんは計画段階からこの螺旋階段を藤田さんに作ってもらおうと企んでいたというのです。その企みに「螺旋階段を作る手間代を浮かせたい…」という実利的な意味があったのか?、「鍛造作家の仕事の中を上げる機会になれば…」という教育的な意味があったのか?、あるいは、その両方だったのか?、うっかり聞き逃しましたが、とにかく建築家がクライアントに難しい宿題を出したことになります。

さて、居間・食堂に戻りましょう。ここは吹抜けのある大らかな空間です。パイン材の床、白い壁、簡素で使い勝手の良さそうな台所、最小限の家具。白壁を背にして藤田さん製作のキッチンストヴが据えられています。この部屋にはどこかシューカー教徒の室内に通ずる清楚な空気感が漂っていることも書き添えておきたいと思います。

「鉄の匂いのする」仕事場

最後になりましたが、鍛造の仕事場を紹介しておきたいと思います。

別棟に移動して広々とした工房に足を踏み入れると、そこに、金属加工の機械や様々な道具たちと一緒に、モノ作りの熱気と気力のみなざる「男の仕事場」が待ち受けています。

居並ぶ機械も道具も見慣れないものばかり。木工機械なら私はよく知っていますが、金属加工の機械を眺めてもどんな作業に使うのかまったく見当が付きません。共通するのはどれも硬そうで、重そうで、冷たそうなこと。扱ふ金属は鉄ばかりではありませんが「鉄の匂いがする」と書いたらこの工房の雰囲気がいづらか伝わるかも知れません。

そうそう、熱気と言えば工房の東側の壁際にはコークスの炉が据えられていました。

「なにか作業して見せてもらえませんか?」とお願いすると、藤田さんは即座に「かじ屋」に変身して、コークスを熾し、鉄の角棒を熱して、叩いて、捻って、牛の鼻輪のようなリングを作ってみせてくれました。

所要時間15分ほどの「かちかち かっちゃん」でした。

なかむら・よしふみ——建築家/1948年生まれ。武蔵野美術大学建築学科卒業。1972-74年、栄道設計事務所。1976-80年、吉村順三設計事務所。1981年、レミングハウス設立。主な作品:三谷さんの家[1986]、REI HUT [2001]、伊丹十三記念館[2007]など。主な著書:『住宅巡礼』[新潮社/2000]、『住宅読本』[新潮社/2004]、『意中の建築 上・下』[新潮社/2005]、『Come on-a my house』[ラトルズ/2009]、『普通の住宅、普通の別荘』[TOTO出版/2010]、『建築家のすまいぶり』[エクステルジ/2013]など。

[撮影:雨宮秀也]



藤田さんの家は、広々とした田んぼの中に建っている。左の瓦屋根の建物が住宅部分、右側の切妻の建物が鍛鉄の工房



左—改修前は薄暗い光庭だった場所が、穏やかな光の降り注ぐ明るい階段室に大変身 | 右—Aさんから藤田さんに出された宿題の「螺旋階段」の製作に励む藤田さん。螺旋階段を作るのはもちろん今回が初めてのことだそうです



上—「美術鍛造・ふじたん」の工房の様子。奥にあるコークスの炉がなければ「鉄工場」という表現がぴったりのスペース | 下左—真っ赤に焼いた鉄棒を鍛造機(エアハンマー)で叩いて加工する、真剣な眼差しの藤田さん | 下右—熱して、叩いて、捻って作った鉄の輪っか。さて、何に使えますかね?、ペーパーウェイト?、ナブキンリング?、ちょっと違うなあ

古民家の 保存と活用

2014年6月に公布された国家戦略特別区域法における規制改革事項のひとつに「歴史的建築物の活用」が取り上げられた。そこでは、各地に残る古民家を、国内外の旅行者向けの宿泊施設や文化事業施設として活用することで、国際観光を振興し、地域活性化を図ろうとしている。さらには、古民家を地域資源として捉える価値観を共有することで、建築技術の継承や、新しいビジネスの創出、雇用や移住者の増加が見込まれ、人口減少などの地域の課題解決にもつながる可能性があると期待されている。本特集では、古民家再生への期待と、それに取り組む各地の事例を紹介する。



歴史的建築物活用に関する自治体の新しい仕組みづくり

歴史的建築物活用ネットワーク(HARNET)事務局

歴史的建築物活用ネットワーク(以下、HARNET) [1]が、国家戦略特区に対して歴史的建築物の保存・活用を促進するために、建築基準法適用除外を含めた総合的な規制緩和・改正に関する提案を行ってから、2015年9月で早2年が経過した。この2年間、国土交通省および消防庁より発出された歴史的建築物活用のための通知等(2014年4月発出) [2]をもとに、幾つかの自治体において、「歴史的建築物の活用」へ向けた新しい仕組みづくりへの着手が見られている。本稿では同仕組みの骨子と共に、各地域の取り組みの最新状況を記載する。

国土交通省通知より拓かれた歴史的建築物活用の新たな可能性

前掲の国土交通省の通知は、建築基準法第3条1項3号に示されたその他条例(以下、「3条その他条例」)に基づいて、歴史的建築物を活用していくための具体的な「運用の仕組み」を新たに示したものである。同通知は、あくまで現行制度の円滑化を図る観点から発出された

ものであり、特区としてある特定地域の規制緩和がなされたものではない。では、一体なぜ、今、歴史的建築物に着目する自治体間で、同通知に示された新しい仕組みづくりへの検討がなされているのか。一般的に、歴史的建築物と言われる建築物は、建築基準法が制定された1950年11月以前に建築されたものであり、いわゆる“既存不適格建築物”の扱いとなっている。こうした建築物を活用し、増築・用途変更を図ろうとすると、同建築物の歴史的な価値を維持したまま現行法に適合させることが困難なケースが多く、活用を諦めざるを得ない場合や、空き家化や解体・放置に至るケースなどが多々見受けられてきた。「3条その他条例」は、自治体がこのような課題を克服するツールとして、建築基準法を適用しない(建築基準法に代わる安全を担保する)運用を認めるものとして建築基準法に設けられてきた現行制度のひとつであり、それ自体は目新しいツールではない。なお、同通知の発出前に「3条その他条例」を持つ自治体は、単独条例としては京都市のみで

[3]、景観条例を改正した神戸市[4]、横浜市[5]、伝統的建造物群保存地区条例を改正した萩市[6]の4都市にとどまっており、これまで同条例が「歴史的建築物の活用」へ有効なツールであるとは言い難い状況であった[7]。このような背景のもと、2014年4月に発出された国土交通省の通知は、こうした「3条その他条例」に基づく運用の円滑化のための仕組みを新たに具体的に示したものと注目された。これまで条例制定済みの都市が数都市に限られ、その波及効果が非常に限定的であった「3条その他条例」が新たな日の目を見ようとしている。

特定行政庁でない小規模自治体の可能性の開拓

「3条その他条例」に基づき、歴史的建築物の保存・活用を図りたいとする自治体は、建築基準法の適用除外にあたって“建築審査会の同意”が必要とされている。現行法上、独自の建築審査会を持ち、建築物を自律的に審査することのできる自治体は特定行政庁と呼ばれる比較的規模の大きな自治体のみであり、それ以外の小規模自治体は同権限を持たず、上位自治体である都道府県に同審査を委ねてきた[8]。同通知によれば、あらかじめ建築審査会の包括的な了承を得て“同意基準”を策定すれば、“建築審査会ではなく地方公共団体に置いた委員会”で審査できることが運用上認められた。これにより、特定行政庁でない小規模自治体でも、建築審査会の個別の審査(1件1件の同意)を経ずに、自律的に歴史的建築物を積極的に保存・活用できる可能性が拓かれたと言える。

歴史的建築物専門委員会における審査

従前の建築審査会は、当然、歴史的建築物のみを審査する体制ではないため、詳しい専門家が審査員になっている自治体でなければ、そもそも歴史的建築物を評価することが難しいという事

情があった。同通知では、歴史的建築物の保存・活用や構造安全性に詳しい専門家から構成される委員会を自治体が設置し[9]、当該地域内にある歴史的建築物を自律的に審査できることが示された。

歴史的建築物活用に関する自治体の新しい仕組みの構築と動向

前述のような国の新たな通知発出に対し、自治体はどのような反応を見せたのだろうか。まず、2014年度、いち早く条例制定着手に乗り出したのは、国家戦略特区の認定を受けた福岡市、木造3階建ての多く残る城崎温泉を抱える兵庫県豊岡市、域内に残る歴史的建築物を新たに有効な地域資源として地域再生を図ろうと手を挙げた富山県氷見市・射水市であった。2015年度には、埼玉県川越市などが検討を開始した[10]。上記に挙げた自治体を見て分かるように、長年、歴史的建築物に関する施策を実施してきた自治体もあれば、国家戦略特区や通知発出を契機に、新たに歴史的建築物に着目し、「3条その他条例」制定へと動き始めた自治体など、検討経緯はさまざまである。また、特定行政庁である比較的大きな自治体の取り組みほか、小規模な自治体レベルまで見受けられる[11]。こうした今回の自治体主導の新しい仕組みづくりにあたって、本稿では最後に同施策の目的に着目しておきたい。各自治体は自らの施策状況に応じ、景観保全、産業振興、観光振興、まちづくり、空き家対策、文化振興等の観点から、新たに歴史的建築物の保存・活用により乗り出そうとしている。自治体ごとに現存する建築物も、構法も、技術者も、建築素材も、これまでの自治体の取り組み経緯もさまざまである。そうした状況下で、自治体は自らの責任と権限を持ちながら、どのように地域の重要な資産である歴史的建築物の継承を可能とする具体的な仕組みづくり、運用を図っていくことができるだろうか。



左一兵庫県篠山市の明治前期創建の長屋を利用した、篠山山下町ホテル「NIPPONIA」NOZI(ノジ)棟の中庭 | 右一NOZI棟の室内

従前、建築基準関連法規は「国民の生命・健康・財産の保護のため、建築物の敷地・設備・構造・用途についてその最低基準」として、国が一律的に示してきたものであるが、今回の通知の発出は、地方自治体が独自の政策目的達成のために、自律的に同基準を制定できる可能性が改めて示されたものである。したがって、特定行政庁との間に結ぶ同意基準の制定や歴史的建築物の審査を図る委員会の設置・運用等の技術的な課題解決も当然重要であるが、その前に大前提として施策目的の共有は欠かすことができない。それなくしては、技術的課題解決のための検討ボリュームやハードルの高さを前に、関係者間の合意形成を図ることは非常に難しいと言える。現在、HARNETでは自治体ごとの既

存施策(景観、産業、文化行政等)の状況を踏まえた上で、専門家の派遣を通じて、同意基準の制定や歴史的建築物の審査の仕組みづくりに関する技術的なサポートを実施している。これまで述べてきた新しい仕組みづくりは、「国民の生命・健康・財産の保護」を目的とする建築論だけでなく、次世代にどのような風景を残すかという景観・都市計画論でもあり、次世代にどのような建築物を残すかという文化論でもあり、どのような生業をつくり上げていくのかという産業論でもあり、そのためにどのような資源をどう持続的に利用し、保全していくべきかという資源管理論でもある。このように多様な目的があり得る中で、HARNETは、自治体が独自に掲げる政策目的の実現に資するよう、サポートを続ける。

[1] HARNET

2013年、歴史的建築物の保存・活用を促進するために、国家戦略特区に対して建築基準法適用除外を含めた総合的な規制緩和・改正に関する提案を行ったことを契機に発足した任意団体。安藤邦廣(筑波大学名誉教授)、西村幸夫(東京大学先端科学技術センター長)、後藤治(工学院大学教授)を共同代表とし、自治体や専門家、技術者、NPO等の会員からなる。主な活動として、歴史的建築物活用スキームに関する各地域の事例調査およびシンポジウムの開催、情報発信など

[2] 各都道府県建築行政主務部長宛て 国土交通省住宅局建築指導課長「建築基準法第3条第1項第3号の規定の運用等について(技術的助言)」、各都道府県消防防災主官部長・東京消防庁・各指定都市消防長宛て 消防庁予防課長「歴史的建築物に係る消防法施行令第32条の適用事例の報告等について(依頼)」

[3] 京町家等の伝統的な木造建築物については、2012年4月に「京都市伝統的な木造建築物の保存及び活用に関する条例」を施行。2013年11月、条例の対象建築物を木造以外の建築物にも拡大する条例改正を行い、条例名称も「京都市歴史的建築物の保存及び活用に関する条例」へと変更

[4] 2010年12月「神戸市都市景観条例」を改正(翌年1月施行)し、歴史的建築物等の景観形成上重要な建築物等の保存・活用を促進(建築基準法適用除外など)するための制度を追加(「景観形成重要建築物等指定制度」の拡充)

[5] 2013年12月「横浜市魅力ある都市景観の創造に関する条例」を改正(翌年7月施行)し、魅力ある都市景観の創造を推進する上で特に重要な歴史的建造物について、歴史的景観の保全と賑わいの創出等による持続的な保存・活用の推進を目的として、「特定景観形成歴史的建造物制度」を追加

[6] 2010年9月「萩市伝統的建造物群保存地区保存条例」を改正、翌月施行

[7] 現在までに、京都市においての木造建築物(京町家)の実績は1件にとどまり、神戸市も実績が1件にとどまる。横浜市、福岡市に関してはまだ運用実績はない

[8] 特定行政庁とは、建築主事を置く地方公共団体およびその長を指し、小規模自治体の多くは特定行政庁ではないことから建築基準法上の建築審査会を持っていないのが現状

[9] 委員会の設置に関しては、小規模自治体単独ではなく、近隣市町村と連携したかたち、県単位で1つ設置するかたちなど、さまざまなケースが想定される

[10] 2015年11月現在、「3条その他条例」を設置済みの自治体は、萩市、神戸市、京都市、横浜市、福岡市の5市である [11] 自治体動向ではないが、2014年、公益社団法人日本建築家協会再生部会と東京弁護士会・歴史的建造物部会で構成された「既存建物を使い続けていくための諸制度見直し研究会」を立ち上げ、建築士と法律家の専門家の立場で、自治体における「3条その他条例」などに関する調査研究を開始。同年、岡山県建築士会において、行政と連携し歴史的建築物の積極的な活用を図ることを目的とした「岡山県歴史的建造物委員会」が発足

古民家活用が地域にもたらすもの

角間崎主輔

Keisuke Kakumazaki
日本政策投資銀行地域企画部副調査役

見直される地域資源としての古民家

最近、まち中を見渡すと古民家を活用したカフェやレストランなどを目にする機会が増えてきた。活用方法も多岐にわたっており、飲食店のみならず、宿泊施設、高齢者福祉施設、さらに地域によってはオフィスや工場まで幅広い。このような施設の多くは、営業を始めてまもないものでもすぐにまち並みに溶け込み、老舗のような雰囲気さえまといている。そして、古民家は施設自体を特徴付けるだけでなく、まちの歴史や風情を表す、いわば地域の貴重な資源である。

古民家を取り巻く状況と活用への課題

古民家について明確な定義付けはなされていない。そのため日本政策投資銀行(以下、当行)が行った調査においては、1950年以前に建てられた木造の住宅を古民家と仮に定義した。1950年は建築基準法が制定された年であり、この年を境に再建築不可となった物件も存在するが、その技術面や意匠面で貴重な建築物も多く含まれており、耐震補強や改修などによりまだ活用できる建物もある。もちろん現実的には年数などの定義にとらわれることなく、所有者や地域住民にとって残したいと思われるかどうかという精神的なシンボル性もとても重要である。築年数の経過した貴重な古民家は、日本のスクラップ・アンド・ビルド中心の社会構造ゆえ、毎年のように建て替えられ、減少している。特に近年は空き家が社会問題として取り上げられ、管理の行き届いていない危険な空き家につ

いては、行政が代執行で解体できるような法律が各地で制定されるなど、住宅、特に空き家を取り巻く環境面で大きな変化が起こっている。このような状況において、2013年10月に国が地域を特定し、規制改革等を集中的に推進する国家戦略特区の対象分野として「歴史的建築物の活用」が取り上げられた。そして、国家戦略特区のひとつの分野となったことで、旅館業法や建築基準法の運用が一部見直されるなど、古民家を活用しやすい環境が整い始めている。

一方で、2008、09年に京都市、財団法人京都市景観・まちづくりセンター、立命館大学が共同で行った「京町家まちづくり調査」によると、京町家に住んでいる住民の49.7%が自身の所有する町家を普通の木造住宅と認識しているという調査結果もあり、古民家の価値への認識はそれほど高くはない。同時に、所有者が住居を売りに出す際、市場の需要や税制面などから解体した上で更地として売りに出すケースも多く、どんなに地域にとって価値のあるものだとしても、所有者がその価値を認識していない場合は、解体という選択肢が最も選ばれやすいのが現状である。

観光ファンドを活用した新たな取り組み

古民家の活用に向けては、リノベーションなどの初期投資に対する資金をいかに金融機関などから調達するかが課題となる。新規事業の場合は過去の経営実績もなく、また古民家は中古住宅と見なされ担保評価も低いため、金融機関からの借り入れはハードルが高い。そ

のため古民家の活用促進に向けてファイナンスの呼び水となるエクイティ(株主資本)などのリスクマネーを供給する必要がある。

昨今、成長産業育成のためリスクマネーを供給する仕組みとして、ファンドの組成が増えている。観光振興を目的としたファンドがいくつかの金融機関で組成されており、古民家再生資金などへの投融资事例も出てきている。当行では地域経済活性化支援機構(REVIC)、リサ・パートナーズ(RISA)と共に「観光活性化マザーファンド」を組成している。当ファンドの投融资対象は広く、観光産業の活性化に寄与するものとしている。そして当ファンドを活用した古民家に関する事例として一般社団法人ノオト(以下、ノオト)が設立したNOTEリノベーション&デザインへの出資が挙げられる。ノオトは国家戦略特区における「歴史的建築物の活用」に関する認定事業者にもなっている。すでに多数の古民家再生を手掛けており、古民家を収益化することで持続性のある保存を可能とし、広く観光促進や地域活性化、コミュニティの再生に寄与している。このノオトが兵庫県篠山市で手掛ける古民家のリノベーション事業や古民家を活用したホテル事業に対して、地元金融機関である但馬銀行と協調して投融资を行っている。

このような金融機関による投融资の他にも、古民家活用事業に関心のある人が直接的に出資や寄付をすることができるクラウドファンディングの活用も年々増えている。クラウドファンディングとは事業者がインターネットのサイトなどを通して出資者を募り、対価として対象事業の収益の一部や物品、宿泊券



左一古民家活用例：ノオトが最初に手掛けた兵庫県篠山市の宿泊施設「集落丸山」。限界集落にある古民家を地域資源として再生させた | 右一「集落丸山」の室内

などを出資者に還元するものである。例えばクラウドファンディングを古民家の修繕などに活用することで、出資者にとっては出資金の使い道が把握しやすく透明性が高いものとなるほか、同施設への思い入れも強くなり、事業者と出資者の距離を近付ける効果も期待できる。いかなる資金調達をするにせよ古民家をどのように活用し収益を確保していくのか、さらに物件の改修やメンテナンスまで含めた維持・管理の業務サイクルをどう築いていくのかを検討する必要がある。運営や改修に関するノウハウを持った人材も必要不可欠である。しかし、これら多方面に精通する人材は稀である。だからこそ、意欲にあふれた人材・事業者をつなぎ、サポートする体制を地域で整えることも必要となるだろう。

外国人観光客の古民家への関心

当行が行った調査(「アジア8地域・訪日外国人旅行者」の意向調査(平成26年版))では、アジア各国の日本旅行希望者が行ってみたい日本の観光地イメージとして、「日本的なまち並み」を選んだ割合が最も高かった。古民家があるような日本的なまち並みは、外国人観光客にとって日本の歴史や文化に触れることができる場所であるため関心が高いのではないかと予想される。さらに、統計やアンケートなどをもとに当行が算出した試算では、外国人観光客の古民家宿泊ニーズを満たそうとする場合、全国でおよそ7,800棟の古民家を宿泊利用

する必要がある、その宿泊に伴う消費効果は毎年380億円近くに及ぶ。古民家はインバウンド観光推進の観点からも有効なコンテンツのひとつとなり得るのではないだろうか。また、地方都市や山間部においては、観光に力を入れながらも、ヒト・モノ・カネの制約などから大規模な観光施設の整備ができない地域も多い。その点において、規模は小さいながらも特徴的な施設として整備できる古民家の宿泊利用は検討する価値があると思われる。宿泊費は旅行消費額の3割を占めるため宿泊地への経済効果も大きいほか、宿泊地への滞在時間も増え、宿泊に付随するかたちで地域の飲食店や物販施設なども利用されやすい。訪日外国人観光客は年々増加している上に、趣向も多様化してきている。「古民家」や「地方」をキーワードに、より多くの外国人観光客のニーズを満たすことで地域経済へもその効果は及ぶのではないかと考えられる。

地域のまちづくりを考えるきっかけに

ここまで、主に観光による交流人口の拡大という点から古民家の活用を捉えたが、地域によって抱えている課題や推進すべき取り組みは異なる。最近では高齢者が精神的に落ち着くという理由で古民家をデイサービスセンターとして活用したり、古民家特有の広い居間を交流の場としたゲストハウスが開設されたりしている。今後は、定住人口増加に向けた移住者の受け入れ、高齢化に

伴う社会福祉施設の設置など、地域の課題解決の手段として古民家の活用について検討されることが望ましい。また、古民家は地域に伝わる伝統的な建築技術が支えている場合が多く、そのリノベーションなどについては地場の工務店や大工の技術が必要となるため、地域内での波及効果も期待される。古民家を活用した観光促進で外需を取り込みながら、その修繕などで内需を回す。規模は小さいながらも、そのような地域の経済循環を生み出す可能性を秘めていると思われる。

少子高齢化が進む中で「コンパクトシティ」や「小さな拠点づくり」など、新しいまちづくりの在り方が模索されている。その時、既存のストックである古民家を地域資源と捉えるのか、使い古して建て替え間近の住宅と捉えるのかによってまちづくりの方向性やコンセプトは大きく異なる。所有者はもちろんのこと、地域住民や行政なども古民家の活用に関心を持ち、コミュニケーションを図ることが新しい交流を生み出し、新しいコミュニティ形成の核となるのではないだろうか。そしてまた、地域住民にとっても地方創生を身近なものとして直接的にかかわることのできるテーマではないだろうか。地域の古民家から地方創生に向けた取り組みが始まることを期待したい。

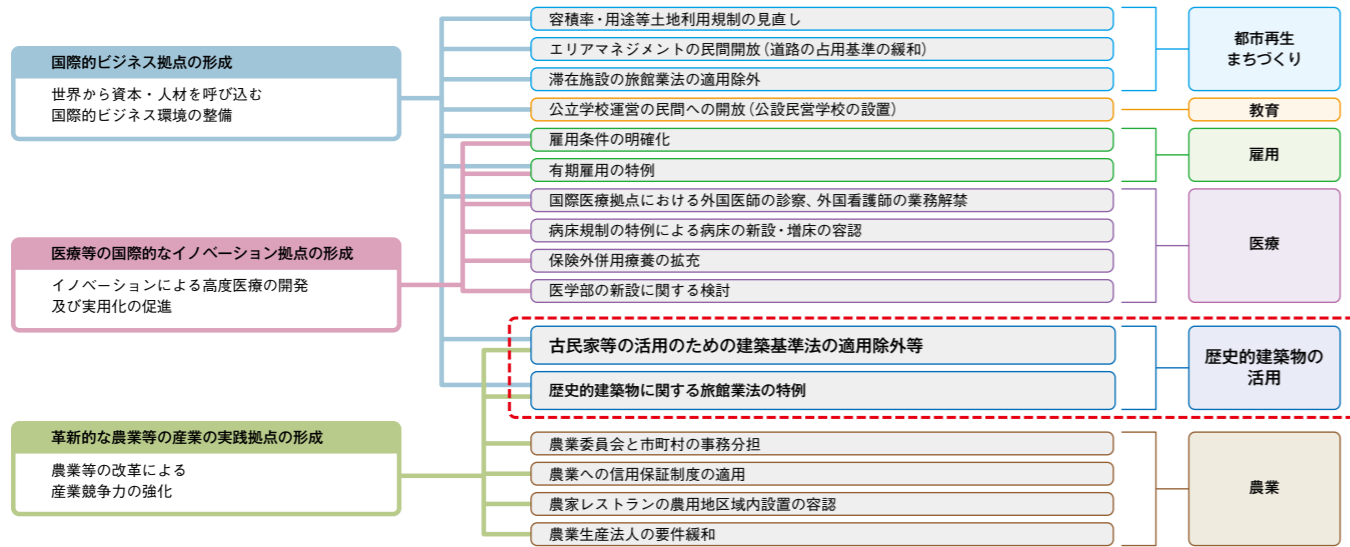
かくまぎき・けいすけ——日本政策投資銀行地域企画部副調査役 / 1985年生まれ。秋田大学教育文化学部地域科学課程卒業後、北都銀行入行。2014年4月より日本政策投資銀行へ出向中。

古民家再生や活用を巡る状況

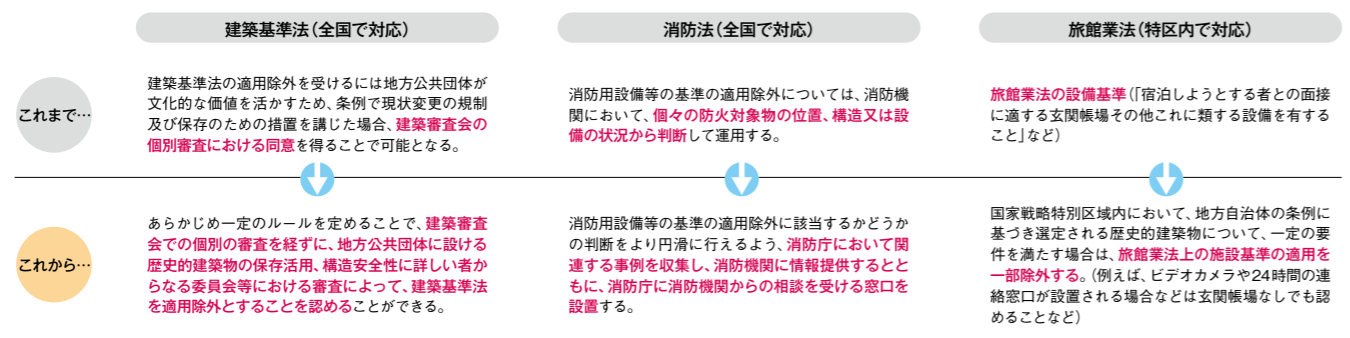
[出典：「古民家の活用に伴う経済的価値創出がもたらす地域活性化」角間崎圭輔・山野井友紀著
[日本政策投資銀行地域企画部／2015]]

国家戦略特区重点項目

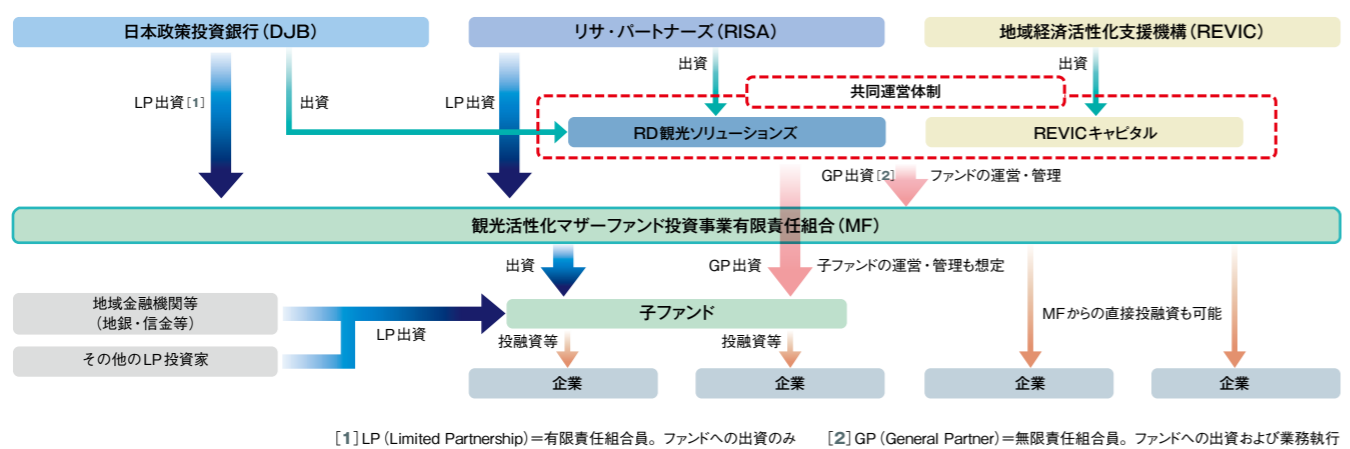
[出典：内閣府資料]



歴史的建築物活用に向けた主な法律及び運用の変更内容



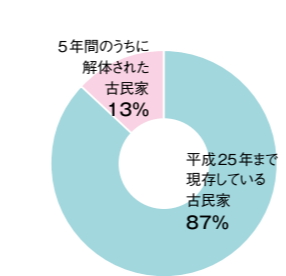
観光活性化マザーファンドのスキーム図



[1] LP (Limited Partnership) = 有限責任組合員。ファンドへの出資のみ [2] GP (General Partner) = 無限責任組合員。ファンドへの出資および業務執行

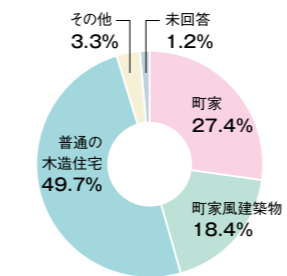
平成20-25年古民家の減少率

[出典：総務省「平成20年住宅・土地統計調査」、平成25年住宅・土地統計調査より日本政策投資銀行作成]



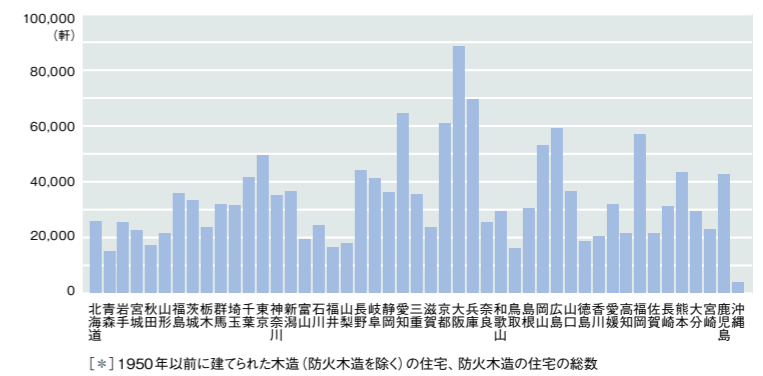
京町家所有者による自らが所有する建物に対する認識調査

[出典：京都市、財団法人京都市景観まちづくりセンター、立命館大学平成20・21年度「京町家まちづくり調査」]



都道府県別古民家[*]現存数

[出典：総務省「平成25年住宅・土地統計調査」より日本政策投資銀行作成]



[*] 1950年以前に建てられた木造(防火木造を除く)の住宅、防火木造の住宅の総数

アジア8地域・訪日外国人旅行者を対象とした「行ってみたい日本の観光地イメージ」調査

[出典：日本政策投資銀行「アジア8地域・訪日外国人旅行者」の意向調査(平成26年版)]

順位	観光地イメージ	%
1	日本的な街並み	74
2	温泉	73
2	富士山	73
4	桜	73
5	日本旅館	66
6	雪景色	63
7	新幹線	63
8	紅葉	61
9	城	61
10	寺社仏閣	57
11	テーマパーク	56
12	ショッピングモール	51
13	日本庭園	51
14	百貨店(デパート)	50
15	島々の風景	43
16	スーパーマーケット(コンビニ)	43
17	海(海岸)	41
18	海(リゾート)	40
19	田園風景	38
20	山岳	36
21	都市風景(高層ビル街)	32
22	高級ホテル	29
23	ダム(巨大インフラ)	19
24	工場	13
25	この中には行ってみたいところはない	0

※ 8地域：韓国、中国、台湾、香港、タイ、シンガポール、マレーシア、インドネシア
%は、国・地域別の旅行嗜好「海外旅行ならどこへ行きたいですか?」という設問において、日本旅行希望者のみを対象とした割合

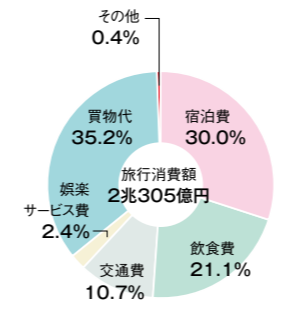
都道府県別外国人延べ宿泊者数(2013年)

[出典：観光庁「宿泊旅行統計調査」(平成25年1-12月)]

順位	都道府県	宿泊者数(万人泊)	構成比
1	東京都	983	29.3%
2	大阪府	431	12.9%
3	北海道	307	9.2%
4	京都府	263	7.9%
5	千葉県	205	6.1%
6	沖縄県	149	4.4%
7	愛知県	115	3.4%
8	神奈川県	107	3.2%
9	福岡県	90	2.7%
10	静岡県	56	1.7%
	全国	3,350	100%

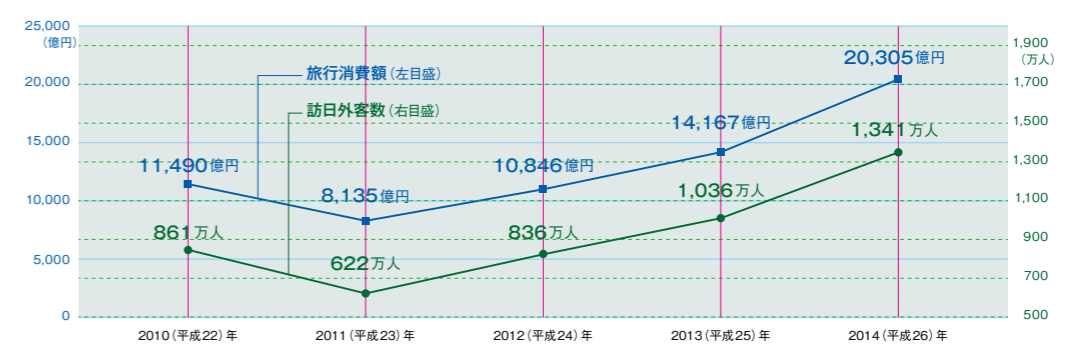
2014年 費目別旅行消費額

[出典：観光庁「訪日外国人消費動向調査」2014年 年間値(速報)]



旅行消費額と訪日外客数の推移

[出典：観光庁「訪日外国人消費動向調査」]



※ 2014年の調査よりインドネシア、フィリピン、ベトナムの3ヵ国を調査対象に追加

城下町に点在する4棟の古民家がひとつのホテルに 国家戦略特区制度を活用した新たな試み

兵庫県篠山市

兵庫県篠山市は古来より京都への交通の要として栄え、まち並みや祭りなどに京文化の影響を色濃く残している。市の中心にある篠山城跡は約400年の歴史があり、城下町には約40haにも及ぶ国の重要伝統的建造物群保存地区を有するなど、武家と商家のまち並みが広がる。タイムスリップしたようなこの城下町に、2015年10月、点在する4棟の古民家を活用した篠山城下町ホテル「NIPPONIA」がオープンした。メインのONAE（オナエ）棟は、明治期の建物で、元銀行経営者の住居だったもの。敷地面積約1,190m²、延床面積約470m²あり、当時はこの2倍の敷地、延床面積は4倍近くあったという。客室5室、レストラン、庭園、土蔵があり、フロント部分の土間にはかまども残され、当時の生活を垣間見ることができる。

このプロジェクトを率いるのは、篠山市副市長を務めたこともある金野幸雄氏である。古民家が地域再生の鍵になると考える金野氏は、2009年に一般社団法人ノオトを設立し、篠山市を中心に古民家の利活用に取り組んできた。これまでも、地域運営方式の古民家の宿「集落丸山」や、活用提案型指定管理方式による竹田城下町の宿「旧木村酒造場EN」、サブリース方式の里山旬菜料理「ささらい」、転売方式の「篠山ギャラリーKITA'S」など、60棟以上の古民家再生の実績を持つ。

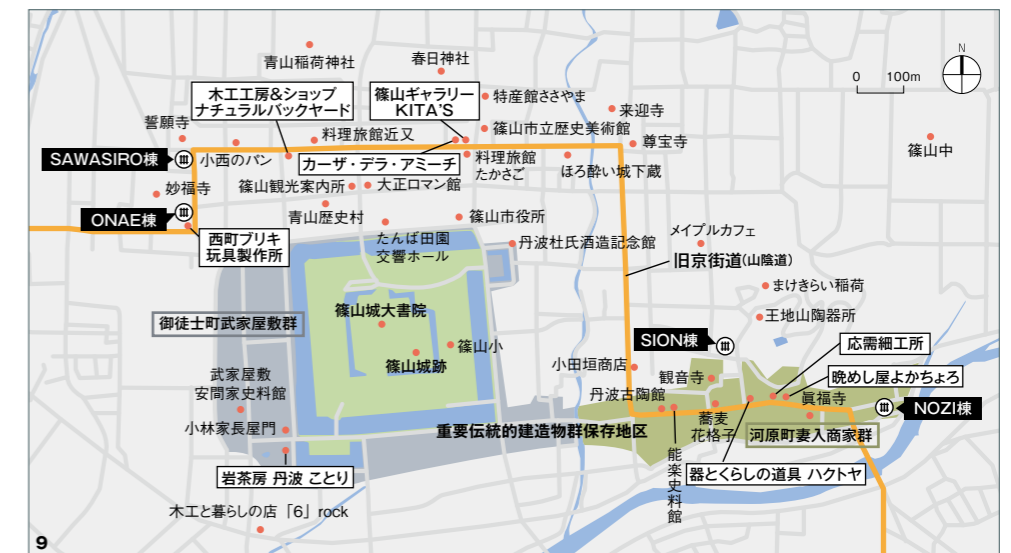
そして今回の「NIPPONIA」の事業では、これまで資金調達が困難だった古民家の改修にファンド方式を導入した。ノオトが出資する特定目的会社（SPC）NOTEリノベーション&デザインを設立し、観光活性化マザーファンド[*]と但馬銀行からの融資を受けて事業展開するという、古民家再生における新しい投融資の仕組みに挑戦。これがうまくいけば、全国の古民家を地域の資産として活用していく道筋ができるかもしれない。2020年に向けて、10棟30室まで拡張し、地方創生の先導地域となることを目指している。

[文責：編集室]



- 1 篠山市篠山伝統的建造物群保存地区にある河原町のまち並み：瓦葺き中2階の妻入の商家が数多く建ち並ぶ。「NIPPONIA」のNOZI（ノジ）棟、SION（シオン）棟の他にノオトがサブリースした古道具屋「ハクトヤ」などもある
- 2 ONAE棟外観：「NIPPONIA」のメイン棟
- 3 SAWASIRO（サワシロ）棟外観：江戸後期に創建された建物で、お茶屋を営む店舗兼住宅だった。敷地面積約370m²、延床面積約191m²、3室の客室がある
- 4 NOZI棟外観：河原町の一角にあり、明治前期に創建された長屋。創建当時の土壁の保存状態が良かったため最低限の修復にとどめ、当時の雰囲気を残している。敷地面積約234m²、延床面積約125m²、客室2室
- 5 ONAE棟の客室：床の間や欄間、釘隠しなど創建当時の装飾を残しリノベーションしているため、古民家ならではの雰囲気が楽しめる
- 6 ONAE棟にあるレストラン：ガラス戸で仕切られた4室は、畳から栗材の板張りに替えモダンな空間に。兵庫県のブランド食材、丹波の黒大豆、丹波栗、丹波松茸、但馬牛などの料理でもてなす
- 7 ONAE棟の中庭：母屋と離れ座敷をつなぐ日本家屋ならではのつくり
- 8 ONAE棟のフロント：「NIPPONIA」を利用する客はここでチェックインしてから、それぞれの宿泊棟に移動する
- 9 篠山城下町周辺地図：「NIPPONIA」の4棟の他に、ノオトがかかわったカフェやギャラリー、店舗（囲み表示）が点在する[提供：ノオト]

[*]観光活性化マザーファンド
地域経済活性化支援機構、日本政策投資銀行、リサ・パートナーズが共同で組成した官民ファンド

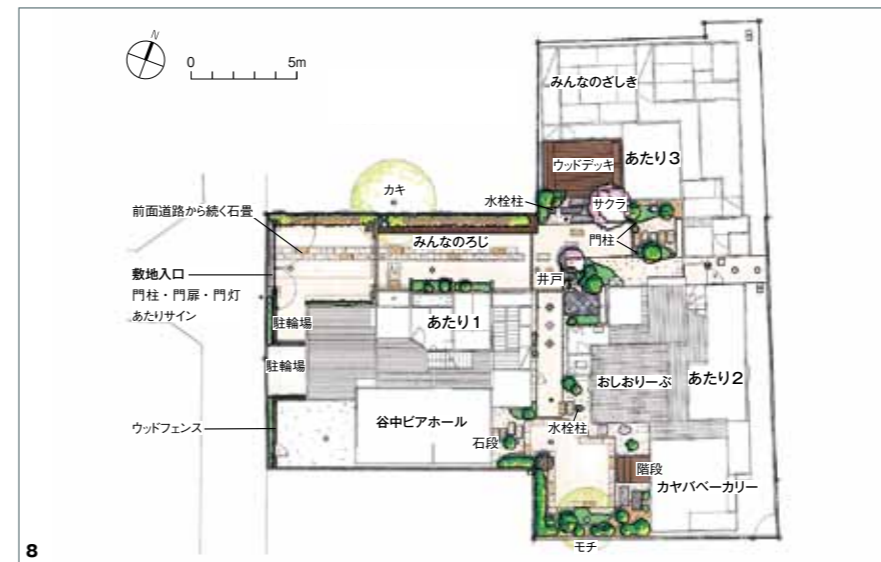


歴史のある建物を活かし、来訪者も楽しめる場所をつくる オーナーと入居者、設計・施工者と共に地域に寄り添うNPO

東京都台東区

1984年発行の地域雑誌『谷中・根津・千駄木』（通称：谷根千）の登場によって、東京東部のまち歩きがブームになる。谷中の隣に位置する上野桜木は、明治中期に日本橋や上野辺りで事業を営む人たちのお屋敷が建てられた、日本で最初の郊外住宅地のひとつだった。震災、戦災で焼けたところが少なかった上野桜木は、明治・大正・昭和の住宅が数多く残り、今でもまち全体の雰囲気をつづけている。

大正から昭和初期の風情が残る住宅街で、ひととき賑わっている一角がある。それが2015年3月にオープンした「上野桜木あたり」というネーミングの場所。1938年に建てられた3軒の家を部分的に改修し、住宅、事務所、ベーカリー、食品専門店、ビアホールなどを混在させた複合施設で、狭いながらどの店もはやっている。この古民家活用を企画したのが、土地・建物のオーナーで、1900年に日本橋に創業の塚越商事と、2001年設立のNPO法人たいとう歴史都市研究会。このNPOは、谷根千工房、谷中学校、谷中芸工展と続いてきた地域のまちづくり活動に連なるもの。バブル期以降、古民家がアパートや狭小住宅に建て変わっていく姿に、古民家そのまま維持できる事例をつくりたいと取り組んできた。家主からNPOが借り受けサブリースする形式が多く、管理運営を任されることもある。「市田邸」、「間間間」、「旧平櫛田中邸」、「カヤバ珈琲」などすでに4軒の古民家を修復し、地域に親しまれる施設に生まれ変わらせた。NPOの副理事長を務める椎原晶子氏は、30年前からこの界隈で活動が続けている。心掛けていることは、家主の事情に寄り添うこと。負担になれば現実的ではなくなる。そして、建物のもともとの用途をできるだけ活かしながら使うこと。不要な改修は避け、理解して使ってもらえる借主を探すことに心を砕く。この秋には貸しスペース「みんなのざしき」や「みんなのろじ」もオープン。今後は地域の古民家をネットワークしていきたいと語る。 [文責：編集室]



- 1 あたり2の外観：1階は塩とオリブの専門店「おしおりーぶ」と「カヤバベーカリー」が入り、2階は事務所として利用
- 2 あたり1の2階「でも俺5時間だからユウスケ」：ワインページ雑誌と古着の店。古民家の空間を活かしたディスプレイが面白い
- 3 あたり1「谷中ビアホール」：ここでしか飲めない地ビールの他に、土鍋を使用して調理したおつまみが楽しめる。中庭や路地のベンチは施設の共有部分のため、飲食もできる
- 4 あたり2「おしおりーぶ」：日本初の塩とオリブの専門店。オリブラテなど飲み物も販売
- 5 あたり2「カヤバベーカリー」：午前8時には店内で焼かれたパンが並び、焼きたてを求めて朝から客が出入りする
- 6 「みんなのろじ」を使ったイベント：路地空間にテーブルを出し、近所の住人を招いての感謝バーベキューパーティ
- 7 あたり1の外観：昭和初期の木造住宅3軒を丁寧に改修し、店舗や工房として活用。近隣住民だけでなく、外国人旅行者も多く訪れる観光スポットになっている
- 8 「上野桜木あたり」配置平面図：3棟の建物をつなぐ外構は、土地の歴史を継承する植栽が施され、くつろげる空間をつくり出している [提供6・8：©上野桜木あたり]

食を通して京都を体感できる町家

錦市場から発信する日本の伝統文化

京都府京都市

観光地として国内外を問わず高い人気を誇る京都。「京の台所」とも呼ばれる錦市場には、390mに及ぶ通りに、京都ならではの食材を扱う老舗・専門店が約130店舗並ぶ。近年、割烹や料亭、旅館などの仕入れだけでなく、食べ歩きメニューなど、一般客でも気軽に購入できる商品が豊富に揃い、多くの人であふれている。

2015年5月、錦市場から歩いて1分ほどの場所に、特定非営利活動法人京都文化協会による食文化・伝統文化体験施設「京町家 錦上ル」がオープンした。錦市場400周年を記念して、京都錦市場商店街振興組合などと立ち上げたプロジェクトで、「食文化発信プログラム」、「京都伝統文化体験学習プログラム」を展開している。

大正時代の町家を改修した施設は、残されていた建具は当時のままに、厨房や食事処などを設置した。京都文化協会では、文化財のデジタルアーカイブを手掛けており、座敷の大広間には葛飾北斎の掛軸など、精巧な日本画の複製作品が飾られている。京都らしい風情ある雰囲気の中、気軽に京料理と文化を楽しめる仕掛けになっている。また、錦市場で惣菜などを購入し食べられるように、11-16時半はイートインスペースとして施設を開放している。ドリンクなどをメニューから注文するワンオーダー制で、持ち込んだ商品を温めたり、和食器にきれいに盛り付けて提供する。錦市場初の試みだが、店頭に並ぶさまざまな“おばんざい”が、その場で味わえると観光客に好評だ。

2015年11月からは、修学旅行生の「食育体験プログラム」も始まった。第1回目は、千葉県の中学生在が参加した。まず、京の食文化について学び、実際に錦市場で食材の仕入れを体験。仕入れた食材をミシュラン2つ星獲得店でもある料理屋「祇園さ>木」の料理人がオリジナル弁当に仕上げてくれる。

京都文化協会では、地域と連携した「京町家 錦上ル」を通じ、錦市場の振興と更なる京文化の普及・発展・継承に取り組んでいく。【文責：編集室】



- 1 活気あふれる錦市場：錦市場のある錦小路通は、京都の目抜き通り・四条通の1本北に位置する。京都の食材や道具が豊富に揃い、大勢の観光客で賑わっている。「京町家 錦上ル」によるイートイン機能は、混雑緩和や食べ歩きによる事故防止の狙いもある
- 2 錦市場で購入した“おばんざい”でランチを楽しむ様子：兵庫県から来た中学3年生のグループは、500円のご飯・みそ汁・漬物のセットを注文し、持ち込んだ惣菜をきれいな器に盛り付けて食事に仕立ててもらった。日中はイートインカフェ、夜は錦市場の老舗25店舗とコラボレートした料理を提供するダイニングになる
- 3 掛軸などの複製作品が飾られた大広間：「京町家 錦上ル」は、京都の食文化と伝統文化を合わせて体験できる施設として、京都文化協会が運営。着付け体験やミニ屏風づくり体験などのプログラムも実施している
- 4 京町家 錦上ル：京町家の特徴である美しい格子に、通りに面した間口は狭く奥行きのあるつくり
- 5 中2階の茶室：天井、襖、ガラス戸など、大正時代からの建具を活かした落ち着いた雰囲気の一部屋で、窓からは坪庭が眺められる
- 6 坪庭
- 7 石畳の一軒路地：のれんをくぐると建物入り口まで続く細長い路地が現れる

古民家を村に見立て、全国の村民で支える クラウドファンディングで実現したシェアビレッジ

秋田県南秋田郡五城目町

人口減少率が日本一の秋田県。その中でも五城目町は県内上位の高齢化率である。そんな五城目町で、シェアビレッジ・プロジェクトという取り組みが展開されている。町村と呼ばれる集落に残る築133年の茅葺きの古民家を活用した農家民宿「シェアビレッジ町村」だ。2015年5月にプロジェクト第1号としてオープンした。プロジェクト運営リーダーである秋田県出身の武田昌大氏は30歳。大学を卒業し、都内のゲーム会社に就職した後、地元を元気にしたいと農業関連の会社を起業した。秋田の食料自給率は170%超え、全国2位を誇る。地域の強みと自分の得意分野であるITやwebを活かし、地域活性化に力を注いできた。活動する中で、いつでも集まれ滞在できる拠点が必要だと考えていた時に五城目町の古民家に出会う。農家だった古民家は住む人がなくなり、維持費が掛かることから解体が予定されていた。同じ理由で全国の歴史ある古民家と日本の原風景が失われつつあると危機感を募らせた。「どうにかして次の100年も残したい」と立ち上げたのがシェアビレッジ・プロジェクトだ。

「村があるから村民がいるのではなく、村民がいるから村ができる」という考えのもと、消滅の危機にある古民家を村に見立てて再生させていく。多くの人で1つの家を支える仕組みで、全国の古民家を村に変えていながら、「100万人の村」を目指す。ここでは会員を村民と呼び、年貢と呼ばれる年会費3,000円を払えば誰でも村民になれる。「シェアビレッジ町村」では、クラウドファンディングで全国・海外から村民を募ったところ、開始32時間で年貢の目標額100万円に達成した。現地での農体験や宿泊のほか、東京を中心に各地で「寄合」と呼ばれる懇親会も開き、村民同士の意識と交流を深めている。その後も村民は1,000人以上に増え、まもなく関西地方で次のシェアビレッジもオープンする。みんなで支える新しい村が広がりつつある。

[文責：編集室]



- 1 シェアビレッジ町村：「新しい田舎の形を目指して」というデザインコンセプトのもと、その取り組みが評価され、2015年度グッドデザイン賞を受賞。さらに、グッドデザイン・ベスト100の日本商工会議所会頭賞に選ばれた
- 2 板の間の台所兼事務スペース：元の持ち主が土間の馬屋を台所に改装した。写真の管理人で「家守」の半田理人氏は五城目町の隣町出身。村民として東京で参加した「寄合」で声を掛けられ、Uターンした
- 3 勝手口の大門を入ると広がる土間：たたきの土間にはかまどが残り、高い天井には茅葺き屋根を支える立派な梁が組まれている
- 4 秋田杉の新しい風呂場・洗面所：古民家は、引き継いだままの状態でも活用しているが、風呂場・洗面所、トイレの水まわりのみ、クラウドファンディングで集めた資金を活用して改修した
- 5 茅刈りに集まった村民：2015年11月、茅葺き屋根の材料となるススキを収穫した。村民から参加者を募り、古民家を維持するための作業も行う。写真前列中央の眼鏡の男性が武田氏[提供：シェアビレッジ町村]
- 6 12畳の茶の間と奥に続く8畳の中の間：茶の間は、土間と玄関(写真右手)から上がることができる。宿泊した村民が食事をしたり、イベントスペースにもなる
- 7 紅葉が美しい玄関まわり：玄関に向かって左が台所兼事務スペース、右は書斎で宿泊スペース。玄関や各部屋の窓から四季折々の庭が眺められる

鉄の器

原田真宏
Masahiro Harada

「器」は建築を学び始めた学生に対して、その「本質」について説明する際、例えに使われることの多いもののひとつだろう。

たいていは「器の“本質”とは、ガラスや樹脂などの“物質”にあるのではなく、その“虚ろな部分”にある。なぜなら液体を満たすという器の目的は何もない“虚”の存在によってかなえられるからだ」とされ、その後「これは建築についても同様である。なぜなら建築の目的である用途が果たされるのは、鉄やガラスやコンクリートといった“物質”の部分ではなく、それらによって囲まれた“虚ろな部分”だからだ。すなわち、建築の本質とは“空間”である」と続き、時には「であるから、“物質”などは瑣末な問題であって、これに捉われては“建築の本質”を見失うことになる」と継がれることもある。「建築」とは、目に見える実体である「建築物」のことだと、世間一般と同じく信じてきたウブな学生にとっては、これはちょっとしたカルチャーショックだろう。そんな、少しアカデミックな香りのするインパクトによって「建築=空間」という教義は刷り込まれ、そしてめでたく建築学の入り口は開かれる、というわけである。

この「建築=空間」の大変分かりやすい例え話には、やはり、それなりの説得力があって、何となく同意しそうなものになるけれど、僕などは「それはどうかな?」と思いつつどまってしまふ。例えば「器」なのがいけない。「だって、同じ100ml入る“器”でも、ペカペカのプラコップで呑む日本酒と、例えば黄瀬戸の茶碗で頂くそれとでは、酒呑みの幸福は全く違うものだろう?」と、

同じく酒呑みである僕はすぐに気付くのだ…(数年前、ニューヨーク在住のある著名なギャラリストの自宅で日本酒を頂いたことがある。酒自体、上等なものだったと思うけれど、いまだにその味わいの記憶が鮮明なのは、その器の印象によるところが大きい。手にしつとり馴染む肌理と重さの、淡い黄土色の黄瀬戸の茶碗だった。これが他の器だったなら、特別な記憶として今よみがえり、こうして題材にすることもなかったろう)。

であれば、建築だって同じことだろう。「空間」が同じでも、それが“何で”、“どのように”出来ているかで、人の受ける感覚は全く異なる。つまり、「建築」は「空間(の構成)」と「物質(の構築)」の、その両方で出来ているわけだ。いや、もっと正確に、そして若干小難しく言えば、建築とは「空間という本質」と「存在という実質」が重なり合った状態」のことで、それらが調和したり、せめぎ合ったりする、その関係の操作が建築におけるデザイン行為だと、僕は考えているのである。

さて、「鉄のログハウス」はプラコップではなくて、いわば黄瀬戸の茶碗だ。100m²に満たない小さな住空間は、巨大なH形の重量鉄骨(h700mm×w350mm×t25mm×t16mm、最上層はh1,000mm×w350mm×t32mm×t16mmに変化する)を井桁に組むことで覆われている。このログハウスの形式は、構造を内側に隠蔽してしまう「大壁」の建築とは反対に、構造材を幾重にも積層し、それを露わすことで物性を濃縮しているが、それによって黄瀬戸の茶碗と同様に、物質固有の気配が空間に(実は都市空間

にも溶かし込まれることになるのである。今回の「気配」とは、H形鋼特有の丸みを帯びた入隅や、汗をかいた馬の肌のような黒皮の表面に現れる「温かみ」、あるいはその圧倒的な質量による「存在の確かさ」だろうか。実現したいと願ったのは、そんな濃密な実質の力場が、透明な空間の本質を、穏やかに抱擁しているような様相だったのかもしれない。言い替えば、この住宅は「鉄の器」なのだ。「空間」一辺倒で洗練されてきたモダンハウスに、建築が本来持っていた「実質の力」を取り戻したい。H形鋼の「強さと共にある温かみ」に、僕はその願いを託したのである。

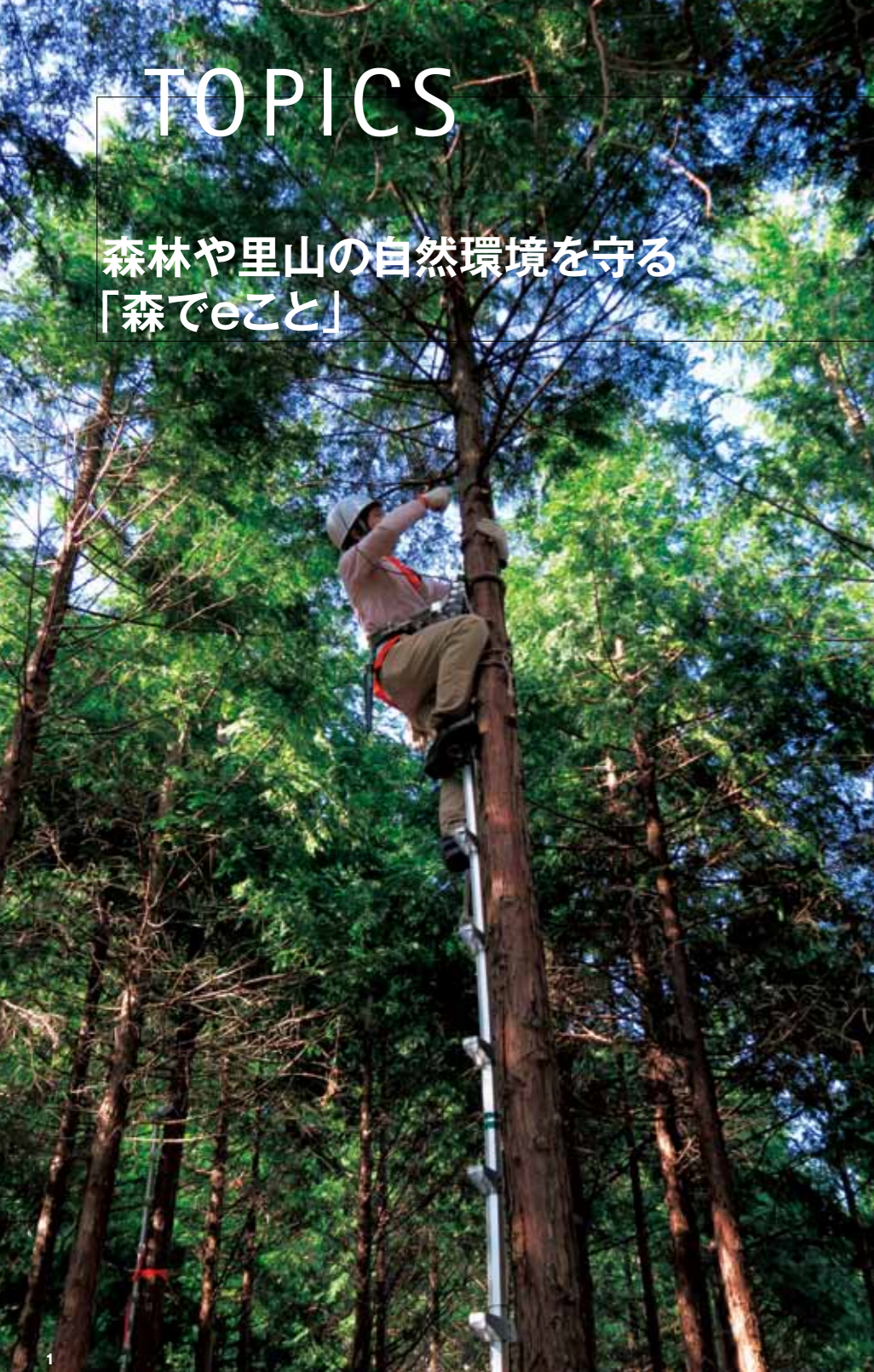
鉄のログハウス [2014]

- 1 工場検査の様子：フレームを2段分仮組みし、建て方時のシミュレーションをしている
- 2 建て方完了時の様子：10段分(計20本のH形鋼)を積み上げるのに必要な工期は1日半ほど。配線・配管のために必要な貫通孔など、可能な工程はあらかじめ工場済ませている
- [提供1・2: MOUNT FUJI ARCHITECTS STUDIO]
- 3 南面外観：大断面H形鋼を短手と長手で互い違いに積み上げ、ログハウスのように構築している
- 4 3階に上がる階段から見る：床と屋根はH形鋼のフランジに載せて架け渡している
- 5 2階リビング・ダイニング：内部に現れてくるH形鋼は黒皮のままUPクリアで仕上げている
- [写真3-5: 藤井浩司]

はらだ・まさひろ — MOUNT FUJI ARCHITECTS STUDIO 主宰・芝浦工業大学准教授 / 1973年生まれ。1997年、芝浦工業大学大学院建設工学専攻修了。1997-2000年、隈研吾建築都市設計事務所。2001-02年、文化庁芸術家海外派遣研修員制度で Jose Antonio Martinez Lapena and Elias Torres Architects (バルセロナ)。2003年、磯崎新アトリエ。2007年、慶應義塾大学非常勤講師。2008年より芝浦工業大学准教授。2014年より東京大学非常勤講師。2015年より東北大学非常勤講師。
主な作品: XXXX [2003]、Tree house [2009]、PLUS [2009]、Shore House [2012]、Seto [2013]、加須の美容室 [2014] など。



森林や里山の自然環境を守る 「森でeこと」



LIXILは地域の豊かな自然を守り地域社会に貢献するため、行政やNPO、森林組合などと協働し、森や里山の環境を保全するボランティア活動「森でeこと(もりでいいこと)」に取り組んでいます。

LIXILのあらゆる事業活動は、自然からのさまざまな資源の供給と生態系の浄化作用・調節作用(生態系サービス)を基盤としています。木材をはじめとする資源調達や製造場面での地球環境への配慮はもちろん、事業所近辺の生物多様性の場である地域の里山や森林の保全活動も行っています。この活動は、自然の本来の姿を取り戻し、健やかに育むだけでなく、地域の水源の保全や山崩れなどの災害防止、地球温暖化の防止にもつながります。

社員がこうした活動に取り組むことによって、一人ひとりの地域コミュニティへの参加を後押しし、社会意識の向上を図っています。

活動は三重県、茨城県、長野県の3カ所を拠点に、春と秋の年2回実施しています。各県で働く社員を中心に、これまでおよそ3,500人が参加し、地域と交流しながら身近な自然を守ることの大切さを学んでいます。

三重県での活動

三重県の活動は2008年、県が進める「企業の森」に賛同し、三重県、伊賀市と共に森林保全協定を結んだのが始まりです。県内には、上野緑工場、伊賀上野工場、青山工場、名張工場、久居工場といった5つの生産拠点があります。

2015年度からは県内の森林施業認定

NPO法人「^{もり}森林の風」との協働を開始しました。森林保全活動を企画し、技術指導を受けています。森林組合から借り受けた2.76haの土地で、植樹、獣害防止ネットの設置、環境学習を行っています。

「森林の風」は荒廃する水源の森を守るため、「施業のセミプロ」を目標に2005年に設立した団体です。森での作業を基礎から習得できる「まちのきこり人育成講座」の開催をはじめ、カットした竹をポット代わりに、その土地の樹木の種を育てて森へ返す育樹活動や小学校での森林教育活動など、啓発と実践を織り交ぜながら保全活動を継続しています。現在、大手電力会社や食品会社など11社とコラボレーションし、若い世代のスタッフの育成にも注力しています。2015年10月の活動では、パッチディフェンスの設置と、枝打ち体験を行いました。パッチディフェンスとは、植栽した苗木をある範囲だけ網で囲うことで、

シカに小さなオリと認識させ、侵入を防ぐ方法です。シカは囲われた外側を自由に行き来しています。従来の方法は、植栽した全領域を網、もしくは柵で囲い、そこからシカを完全排除するものでした。しかし、大規模に柵を張り巡らせても、柵を飛び越えたり、大雨で土が流されネットの下に穴があき、そこから侵入したりと、なかなかうまくいきませんでした。パッチディフェンスは他地域で成功を収めており、今回、伊賀市で初導入した方法です。

また枝打ちとは、木の下の方にある枝を取り払う作業のことで、木を真っすぐ成長させるために行うものです。今回は4mのはしごを登り、ノコギリを使った枝打ちを体験しました。

このように「森林の風」や三重県、伊賀市と相談しながら、その土地、その森に適した活動を実践しています。



三重県での活動
1 枝打ちの様子
2 パッチディフェンスを設置し、内部に植樹する
3 網を広げる
4 作業場所を背景に、参加者全員で記念撮影

LIXIL 社員がボランティアを通じて、 地域社会に貢献

蓼沼亜沙子

Asako Tadenuma

(株)LIXIL 広報部 コーポレートリスポンシビリティ推進グループ



茨城県での活動
 5 人の手で選別しながら雑草や竹を刈り取る
 6 育ちすぎた常緑樹はノコギリで切り倒す
 7 アシカキを除去し、湿地帯が現れた様子(写真11の作業後)
 8 渡り鳥も飛来する穴塚大池
 9 穴塚の里山を背景に参加者全員で記念撮影
 10 雪化粧した穴塚大池
 11 大勢で湿地のアシカキを除去している様子



茨城県での活動

茨城県では、2009年に認定NPO法人「穴塚の自然と歴史の会」(以下、「穴塚の会」と協働し、土浦市穴塚にある里山の保全を開始したのが始まりです。茨城県には、筑波工場をはじめ、石下工場、岩井工場、下妻工場、土浦工場、藤花工場、大和工場といった7つの生産拠点があります。雑木林の下草刈りや谷戸と呼ばれる湿地の水源や水路の整備、在来種にとって脅威となる外来種の撤去など、里山保全で特に人手が必要な部分を社員がボランティアで行っています。「穴塚の会」は、穴塚大池をはじめ、小川、雑木林、田んぼ、畑、草原など、多様な環境が存在する100haほどの穴塚

の里山を、未来の子どもたちに残すために活動している団体です。その継続的な活動は、日本ユネスコ協会連盟から「プロジェクト未来遺産」に登録されるなど、国内で高く評価されています。この里山には、オオタカやフクロウなどの大型の鳥類からアシカガエルなどの両生類、カミキリムシなどの小さな昆虫まで、さまざまな生き物が生息する豊かな自然が残っており、周囲には穴塚古墳群や貝塚もある歴史的にも重要な場所です。2015年6月の活動では、里山の一角にある雑木林の草刈りを行いました。カマを使って雑草や竹を刈り取り、大きく育ってしまった常緑樹はノコギリを使って切り倒します。常緑樹が繁茂すると光が地面まで届かず一年を通して

林床が暗くなり、生物多様性が失われていきます。斜面で中腰になりながらの下草刈りは足腰に負担が掛かりますが、人の手で樹種を選びながら刈り取ることで、植物だけでなく昆虫の多様性も保全することができ、自然豊かな里山へと生まれ変わります。初めは薄暗かった林が、活動後には明るい日差しが降り注ぐ林によみがえりました。また過去には池西湿地でアシカキという多年草の撤去と、ヤナギの抜根も行いました。アシカキは根が残るとすぐに伸びてしまうため、ぬかるんだ湿地にくるぶしまでつかりながら湿地の中に手を伸ばして、カマで根を掘るように抜き取ります。ほとんど見えなかった土(湿地帯)が現れた時は、参加者全員が達成感を味わいました。本来の生態系が回復する大きな手助けとなりました。

長野県での活動

長野県では「森林の里親促進事業」に

参加し、2009年から下伊那郡阿智村で森林保全活動を行っています。約16haの森を借り受け、間伐、整理伐を実施し、1,400mにわたって作業道を整備しています。2015年10月の活動では、これまでつくった作業道をメンテナンスし、間伐や炭原木の切り出しを行うなど、森林整備を進めました。三重県や茨城県の活動同様、社員同士の交流の場としても定着しています。

「森でeこと」を機に、環境問題や社会貢献活動に興味を抱き、活動を始める社員も出てきています。LIXILは、これからの地域のNPOや行政、また社内とのコミュニケーションの場でもある「森でeこと」を通して、自然に親しみ、森や木を育む気持ちや活動を継続することの大切さを、次世代へ伝えていきます。何年も掛けて育つ樹木のように、長く将来にわたって実を結び続けることを目指し、一つひとつの活動を積み重ねていく所存です。



長野県での活動
 12 指導を受けながらチェーンソー作業をする
 13 チェーンソーで切り込みを入れた木を倒す
 14 作業後に鮮やかな紅葉を背に記念撮影

「森でeこと」へのメッセージ

森林施業 認定NPO法人「森林の風」

代表 瀧口邦夫

2015年度からLIXILと森林環境保全活動を共に進めています。我々は荒廃する水源の森を守るため、「施業のセミプロ」となることを目標とする団体です。LIXILとの「森でeこと」の活動は、三重県だけではなく、大阪府の水源の森を守ることもつながっており、活動の広がりや影響の拡大を感じます。森林環境保全活動は、草木の名前を覚えることから始まり、枝打ち、間伐など、作業は実に多岐にわたります。人手が掛かることも多く、企業と協働することで多くの人々の手が森林に入り、短時間で作業を進めることが可能になります。また、樹木や自然生態系そのものにも興味を持ってもらうことも良い機会にもなり、意義を感じています。近年は、森に関心を持つ企業や人が増え、とてもうれしく感じています。今後も安全な活動を最優先に、共に汗をかき、共に学びながら森林の活動の中で達成感を共有していきたいと考えています。

認定NPO法人「穴塚の自然と歴史の会」

理事 兒玉正人 (LIXIL 土浦工場 加工課)

私は2012年、「森でeこと」の茨城県での活動をきっかけに穴塚の会に入会しました。穴塚の人と自然に魅了され、理念と事業に共鳴し、今では理事として運営にかかわっています。「森でeこと」には、社内の部門の枠を越えて多様な人たちが集まります。肩書きを外し、普段着で取り組む保全活動では社会貢献にとどまらず、コミュニケーションの活性、チームワークの醸成の場にもなっています。そこで生み出される善良で大きなパワーは、里山の手入れ・再生を一気に押し進めます。会員だけでは何カ月も掛かることが1日にして成し遂げられるのです。穴塚の会では「さすがはLIXIL!」と、その成果は大変に評価、感謝され、今では欠かせないものとなっています。これからもLIXIL社員として、穴塚の会の会員として、一個人として、みんな良し未来良しの仕組みづくりに努め、持続可能で豊かな価値の「協創」に寄与すべく、無限の可能性にチャレンジしていきたいと思っています。

「LIXILビジネス情報サイト」のご案内

http://www.biz-lixil.com/

LIXILのビジネスユーザー向けポータルサイト「LIXILビジネス情報サイト」のご案内です。

LIXILの豊富な商品について、ビジネスのお役に立つ情報をタイムリーに掲載しています。トップページの機能別メニューから、新商品情報、2次元・3次元CADデータ、商品画像データ、提案・見積書、取付・取扱・施工説明書などの各種データ提供や、カタログの閲覧・請求など、お探しの情報にスムーズにアクセスいただけます。

またLIXIL商品をご採用いただいた施工事例について、建築・施設別と商品別でご紹介しており、建築やまちづくりに関するコラムや「LIXIL eye」のバックナンバーもPDFデータでご覧いただけます。加えて、定期的にLIXILの新商品情報をお届けするメールマガジン「くつどりびんぐ」の登録もお申込みいただけますので、ぜひご利用ください。

http://www.biz-lixil.com/



施工事例 index

http://archiscape.lixil.co.jp/pickup/

日本橋 榛原

和紙舗「榛原」が東京日本橋タワーに移転し、その外壁に幾何学レリーフ・3Dカワラブリックが採用されています。「煉瓦十瓦」の手法で製作したこの商品は、日照条件によって濃いグレーや燻し銀に変化し、華やかの中にも落ち着いた和の素材感を演出します。1つのユニットを組み合わせ、連続性のあるレリーフ面を表現。夜は外壁から光が漏れ、豊かな表情を醸し出しています。



■建築概要■

所在地：東京都中央区日本橋2-7-1 東京日本橋タワー | 規模：地上1階 | 構造：S造 | 工期：2013.1-2015.4 | 設計：日建設計、インテリア設計：安井建築設計事務所 | 施工：大林組

行田市斎場

行田市斎場は建設から37年が経過し、耐震補強やバリアフリー化、多目的トイレを完備するため、改修工事が行われました。メインエントランス付近のスロープに、GK-A型シェルターを新設。建物のデザインと調和し、ガラス屋根から降り注ぐ光が利用者に快適な空間を提供しています。



■建築概要■

所在地：埼玉県行田市大字佐間 1751 | 施主：行田市役所

山梨大学医学部附属病院新病棟

地域医療の再生と病院機能の再整備を担う新病棟が建設されました。「入院患者満足度調査」をもとに、個室やトイレの増設などニーズに応えた整備を実施。従来の病室より床面積を増やし、採光確保にも配慮。洗面化粧台や車いすに対応した3枚引き戸のトイレ付きシャワーユニットなども完備しました。労働環境の改善にも取り組み、スタッフの利用する設備の充実化も図っています。



■建築概要■

所在地：山梨県中央市下河東1110 | 規模：地上7階 | 構造：RC造 | 工期：2013.3-2015.6 | 設計：石本建築事務所 | 施工：清水建設

武蔵野市道第92号

仙川・桜堤遊歩道の空間を、景観により調和したまち並みにしていくための歩道整備が行われました。そこに採用されたのが防護柵・楽樹です。木々の緑にさりげなく溶け込み、自然と調和した景観を保ちながら、歩道を通る人や自転車の安全を確保しています。



■建築概要■

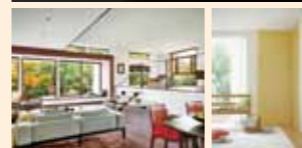
所在地：東京都武蔵野市桜堤2丁目地内 | 施主：武蔵野市役所

LIXILからのご案内

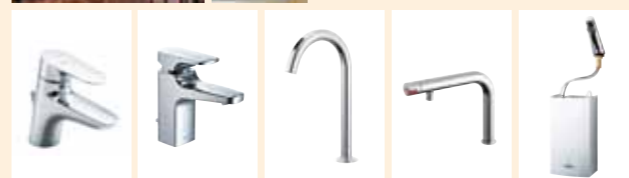
「2015年度グッドデザイン賞」を受賞



GOOD DESIGN AWARD 2015
BEST 100



GOOD DESIGN AWARD 2015



本年度は、本格的なエクステリアのライティングを電気工事士の資格を必要としない簡単安全な照明器具で実現した屋外用照明「美彩(Bisai)」シリーズ(写真上)が「グッドデザイン・ベスト100」を受賞しました。「グッドデザイン・ベスト100」は、受賞全1,337件の中で、明日を切り拓く力を持ったデザイン・未来を示唆するデザインとして特に高く評価された100件です。

その他、高性能ハイブリッド窓「サーモスX」、耐震リフォーム工法「アラテクト」、洗面用シングルレバー水栓「LF-WF340S」、シングルレバー混合水栓「キュービア」、浄水器専用水栓「キッチン用タッチレス水栓ナビッシュ(浄水器専用ビルトイン型)」、熱湯用単水栓「SF-WCH120」、電気温水器「加温自動水栓」(写真下左から右へ)が、「2015年度グッドデザイン賞」を受賞しました。

LIXIL出版 新刊案内

http://www1.lixil.co.jp/publish/



LIXIL BOOKLET

「薬草の博物誌——森野旧薬園と江戸の植物図譜」

執筆：高橋京子、水上元ほか
定価：1,800円[税別、好評発売中]



現代建築家コンセプトシリーズ20

「安東陽子 | テキスタイル・空間・建築」

執筆：安東陽子、伊東豊雄、青木淳ほか
定価：1,800円[税別、好評発売中]



現代建築家コンセプトシリーズ21

「小嶋一浩+赤松佳珠子 / Cat

「背後にあるもの 先にあるもの」
執筆：小嶋一浩+赤松佳珠子 / Cat
定価：1,800円[税別、好評発売中]

10+1 WEB SITE http://10plus1.jp/

建築・都市を巡るサイトです。建築写真アーカイブ、建築関連書籍、イベントの紹介、特集などを毎月更新しています。

ギャラリー+イベント

http://www1.lixil.co.jp/culture/

LIXILギャラリー | 東京

巡回企画展

薬草の博物誌
——森野旧薬園と江戸の植物図譜展
会期：3月3日[木]-5月21日[土]
江戸時代から続く森野旧薬園(奈良県宇陀市大宇陀)と、当時描かれた薬草を中心とした植物図譜を通して、幅広い本草の世界とその魅力を紹介しします。



「松山本草」(森野實郭著)より「ホンバオケラ」(左)と「オケラ」(右)
[提供：高橋京子、森野旧薬園]

建築・美術展

「クリエイションの未来展 第7回」
伊東豊雄展
——みんなの森 ぎふメディアコスモス
会期：3月4日[金]-5月24日[火]
「みんなの森 ぎふメディアコスモス」は2015年7月に開館して以来、60万人以上の方が訪れ、地域に新しい賑わいを生み出しています。本展では、「ぎふメディアコスモスの完成報告」、「オープン後どのように使われているか」、「この先の展望」の構成からなり、コミュニケーションの場の回復と展望を探ります。



みんなの森 ぎふメディアコスモス
[写真：Kai Nakamura]

「やきもの展」

小池頌子展——遠い煌めき
会期：開催中、3月7日[月]まで

見附正康+西田健二展

会期：3月10日[木]-5月5日[木]



見附正康
「赤絵細描小紋蓋物」
[H12×直径22.5cm | 2015年]



西田健二
「青白磁水注」
[H28×D9.5×W16.5cm | 2015年]

LIXILギャラリー | 大阪

巡回企画展

文字の博覧会——旅して集めた「みんなの」中西コレクション展
会期：3月4日[金]-5月17日[火]
人類にとって最大の発明のひとつとされる文字。世界でも稀有な「文字ハンター」、故・中西亮さんのコレクションを中心に披露しながら、世界のさまざまな文字の魅力を紹介しします。

INAXライブミュージアム

土・水・火、ものづくりと生活文化をつなぐ企画展

素掘りのトンネル マブ・二五穴

——人間サイズの土の空間展

会期：開催中、3月27日[日]まで
会場：「土・どろんこ館」企画展示室
入館料：共通入館料で企画展も観覧可
江戸時代から昭和初期にかけて人力で掘られたトンネルの多くは、新たな水田を開くために水路を引いたり、川の流れを変えたりする目的でつくられ、中越地方(新潟県)では「マブ」、房総半島(千葉県)では「二五穴(にごあな)」とも呼ばれてきました。本展では、写真家・中里和人氏が撮影した写真を展示するほか、トンネルの実物大の再現や、トンネル内部の三次元映像などを通して、素掘りのトンネルの魅力を伝えます。



新潟県十日町市
白小舎の「マブ」
[写真：中里和人]

「LIXILギャラリー | 東京」

所在地：東京都中央区京橋3-6-18
東京建物京橋ビル LIXIL | GINZA 2階
Tel: 03-5250-6530
開館時間：10:00-18:00
休館日：水曜日、2月21日(日)、5月22日(日)

「LIXILギャラリー | 大阪」

所在地：大阪府大阪市北区大深町4-20
グランフロント大阪南館タワーA 12階
Tel: 06-6733-1790
開館時間：10:00-17:00
休館日：水曜日(祝日は開館)

「INAXライブミュージアム」

所在地：愛知県常滑市奥栄町1-130
Tel: 0569-34-8282
開館時間：10:00-17:00
(入館は16:30まで)
休館日：第3水曜日(祝日の場合は翌日)
共通入館料：一般：600円、高・大学生：400円、小・中学生：200円

禁欲的な潔癖さにたいして、ヒンドゥー教のバイタリティ、開放性は驚くべきものです。ヒンドゥー教の神様は、像がピカピカに磨かれて、とにかく輝いていて、たいへん印象的なものでした。それはほとんど新品で、日本の仏像のような古さ、風格というよりは、さつき作つたみたいな新しさです。扉が開かれて神様の像が現れると、興奮した人々がピカピカの神様にせまり、元来や携帯カメラでばしゃばしゃ撮影して、たいへんな熱狂ぶりでした。かつて梅棹忠夫が、日本の寺や仏像は古く、苔むしていて、逆にインドや東南アジアでは、神も仏もみんなピカピカに輝いていると言っていました。どの世界でも、愛されて大切にされ

ているものがいつもピカピカに磨かれて輝くので、何が輝いているかを見れば、その国の人々が何を大切にしているかわかる、ということ、インドでは神仏が輝き、日本では新幹線やジュース自販機が輝いている、と言っていたのを、ふと思い出しました。

今日日本にいて思うのは、インドの街は、混沌として、やかましく、また厳しい階級があり、貧しい人々は路上で生きて死に、さまざま生き物が混ざり合っていて、しかし人にも街にも、動物にも、不思議な気高さがあったように思います。いろんな生き物が押し合いへし合いする街の風景は、そのままヒンドゥー教の神々の世界にも見えました。菩提樹の下

でくつろぐ人々や牛を見ていると、ブツブツが動物を従えて野を歩き、木陰で寝た時代がそのまま現代化したような、昔から何も変わっていない世界がそこにあるように思えました。宗教と文化が街に与えるものの大きさを、僕はインドに行つて、あらためて感じた次第です。

長谷川さんは今までどのような旅をされてきましたか？ お好きな国、街はどこでしようか？

二〇一五年十二月二〇日

西沢立衛

にしざわ・りゅうえー建築家・横浜国立大学大学院建築都市スクールY-GSA教授／1966年生まれ。1990年、横浜国立大学大学院修士課程修了、妹島和世建築設計事務所入所。1995年、妹島和世とSANAA設立。1997年、西沢立衛建築設計事務所設立。主な作品：金沢21世紀美術館[2004]、森山邸[2005]※、ROLEXラーニングセンター[2009]、豊島美術館[2010]※、ルーヴル・ランス[2012]など(※以外はSANAA)。

西沢立衛様

インド旅行はずいぶんと刺激的だったようです。西沢さんが楽しく旅行されている様子が目に浮かびます。私も若い時はいろいろの旅をしました。しかし、何故かアジアに旅行すると、帰国してから体調を崩すのです。何度さそれでもインドに何故行かなかったのか、自問してみましたが、知人からのいろいろの情

報を知るたび、私にはその場の力に立ち向かえないと思っているからかもしれない。

アトリエを立ち上げた直後、一九八〇年頃から新潟市民芸術文化会館の仕事が始まるまでの十五年程はレクチャーと展覧会の招待をたくさんいただき、ヨーロッパとアメリカによく出かけた。コンペやその後の設計の時は旅行をするという余裕は持てなかったが、レクチャーは一日で済み、あとの三、四日は旅行に出かけられた。パリではウィークデーがチケットが安く、モロッコやアルジェ

リアに飛んだ。マラケシュ、ラバド、フェズ、アトラス山脈を越えてサハラ砂漠へ、アルジェからチェニスへと出かけた。この辺りは土の世界で床・壁の建物や焼き物の壺なども土っぽい。日本やアジアの土の空間と違うのは、泥を手で塗つたものでマイスターが左官で仕上げた壁より生っぽいもの。その土の床の中間の日に陰に、美しい赤い手織りの絨毯を置いて昼寝をする。カラフルな焼き物を紐で繋いだネックレス、シルバーのブレスレット、青空と同じ色のスカーフ、真っ白なロングドレス、何もかも土の中

で美しい。モノは土の空間と対比的なのに一体になって人々を活気づけ、美しく魅せている。

八〇年代はこうして五回も北アフリカへ旅して土に魅せられていました。湘南の壁も床も土仕上げにしようと考えたのも、こうした経験と重なっていたのではないかと思ひ返します。

グラスゴーに一ヶ月のワークショップをしに行き、大学の先生たちと北部のハイランド地方にドライブした時、見たものは草木の無い岩山に石の廃墟が立ち並ぶ風景だ。風化した城は山に崩れて溶け込んで、自然と人工物が溶解している風景が続いた。城は地域の家々とはまったく異なるものだった。途中で宿泊した普通の家のグリーンハウスでは、よく手入れさせた鉢の緑が爽やかな香りを漂わせ、花々に囲まれてティータイムを過ごした。石の山の中にいたので、この家がオアシスのように感じられたのでしよう。しょっちゅう思い出します。その先のアイルランドに行った時の記憶は断崖の地層の風景です。

ハーバードに一年間滞在した時も、何度も旅に出た。ニューイングランド地方でイギリス人の入植者がつくつた煉瓦づくりのまちや、とても美しい紅葉の風景を、冬休みにはカリブの海も見に出かけた。

MIT、イェール、コロンビア、ライプス、テキサス、イリノイ、ノースキャロライナ、カリフォルニア、バークレーとアメリカ中の建築の大学を一ヶ月かけてレクチャーツアーした一九九一年のことである。アメリカの国内を移動する低空飛行機に乗ると、自然の地形の変化に驚かされる。地球の歴史が読み取れる如く思えてしまう風景が展開する。あの時のような低空飛行でアフリカをはじめ地球全部を飛び回るのを夢にしています。私にはあれからというもの日本の地層や断層の美しい半島やジオパークを見歩いています。特にこの頃は西伊豆の美しい地層や柱状節理の重なる岩石海岸などに出かけています。

一九九九年、二〇〇四年、二〇〇九年と一ヶ月のザルツブルクのサマーアカデミーに三回出かけ、夜はオペラやオーケストラを見に行き、週末の二日は周辺のいろいろな所を訪ねる生活をしていました。ウイーンからブダペストへ、グラーツ、インスブルグからリヒテンシュタインへ。特にアルプスの山々を眺めたくてロープウェイで登れるだけ登って、山々の美しさを眺めていると、清められたような快さを感じた。巨大な氷の洞窟を訪ねた。氷がつくる造形の美しさに驚いたし、ザルツブルグ周辺の湖の風景も格別

アルプスの麓の緑の山々が地元の人々が当番で清掃してつくられている美しさだと知っても、その美しさを保持する手入れを通してある風景でも私は感激してしまふ。一方、氷の洞窟は長い時間、外の空気に触れることなく時間をかけて氷が変化しながら出来た空間、その美しさに感激をしまふ。人間が関わっても関わらなくても自然を保全することで美しさをつくっている。そうした自然の風景を見ることが何よりも好きでやめられない。あるがままに放り出されているのではなく、自然に人が関わることで美しい文化に高めている風景となつて、はじめて第二の自然といえるもののように思っています。

二〇一六年一月六日



スイスの氷の洞窟と西伊豆の断層

長谷川逸子

はせがわ・いつこー建築家／菊竹清訓建築設計事務所勤務、東京工業大学篠原一男研究室を経て、1979年、長谷川逸子・建築計画工房設立、主宰。早稲田大学、東京工業大学、九州大学などの非常勤講師、米国ハーバード大学の客員教授などを務め、1997年、王立英国建築家協会名誉会員。2001年、ロンドン大学名誉学位。2006年、アメリカ建築家協会名誉会員。主な作品：大島町絵本館[1994]、新潟市民芸術文化会館[1998]、珠洲市多目的ホール[2006]、ふじのくに千本松フォーラム[2013]など。

いろんな国を旅行して、 まず、頭に浮かぶのはインドの街…。

長谷川逸子様

ますます寒くなってまいりましたが、

長谷川さんはお変わりありませんでしょうか？ 今回の手紙は、外国について書くかと思いましたが、いろんな国を旅行して、どこがいちばん印象深かったかなと考えると、まず最初に頭に浮かぶのはヨーロッパと、あとインドです。インドの街、宗教、文化、気候風土、さまざまなことに、たいへん感銘を受けました。

インドの路上では、さまざまな動物が人間と一緒に暮らしています。巨大な菩提樹が大通りを塞ぐように立ち、牛や象、ラクダや猿が、路上で寝たり、歩いたりしています。物資を運搬しているのではなくて、街を散歩しているのだそう

です。さまざまな生き物が通りでくつろいで、寝たり歩いたりしている、その風景を見てみると、日本の都市がいかにも人間中心主義というのか、人間の「生」のために作られてきたかということを思います。

インドの街に行くと、もうひとつ印象的だったのが、ヒンドゥー教でした。カオスそのものというか、あまりに大衆的というのか、いろんな神様がカオス的に混在していて、人々の熱狂があつて、そのエネルギーはすごいものでした。

そういう激しいインドで、イスラム教のモスクは、一服の清涼剤といえますか、静謐で、ちよっとホッとします。モスクには美しい中庭があつて、中央に水が張ってあり、人々は暑い太陽の下で黙々と、大理石の床を磨いています。美しい柱と文字、長方形平面の美しさ、静けさというものには、心身が清められる

ようです。そしてそのミニマルな中庭の向こうに、混沌の極致のようなバラックとスラムがあふれるように山積みになっていて、ぎよつとします。イスラム教の



インドの街：動物と人間と一緒に暮らす



LIXIL

Link to Good Living

株式会社 LIXIL

XU8600 | 01 | 2016.2.20 発行